クロス・ワールド

小来栖　千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロス・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ９３５９Ｙ

【作者名】
小来栖　千秋

【あらすじ】
「全てを話して、あなたは信じてくれる？」
現実世界（リアルワールド）と並行世界（パラレルワールド）が存在する世界で、一人の少年が世界の交錯に巻き込まれる。少年が飛ばされた世界は『覚醒者』と呼ばれる人知を超えた力を有している人々が争う世界だった。少年は元の、自分の世界へ帰ることができるのか？
二つ存在する世界の真実は？　二つの世界を守るために、戦おうとする少年へ逃れられない影が忍び寄る、バトルＳＦファンタジー。

あなたは、どちらの世界がリアルだと信じますか？

タイトル変更しました（1月6日）

序章　交わりの始まり　†

世界は今を生きている現実だけだと、どうして言えるだろうか。
選択を迫られた一点から、それぞれに枝分かれした世界がないとどうして言い切れるだろうか。

そのような世界は存在しえるかもしれない。
それらを確認する術はないが、それらの世界が交われば、それが証拠と成りえるのではないだろうか。
そう思ってしまうのだ。

いつか複数存在する世界が交わる時が来たとして、人間はその世界の存在をどのように捉えるのだろうか。
肯定するだろうか、否定するだろうか。
いや、そもそも共存できるのだろうか。

それらの杞憂はその時が来てみなければ分からない。
しかし、人――あるいは世界は寄り添いあって生きていくことが出来ると思うのだ。

序章　交わりの始まり　？

太陽が沈んだ街の夜は数メートル先の世界が分からないというほどに暗いことはない。
しかし、どんよりとした厚い雲が空を覆っているため、夜空に輝いているはずの月や数えきれない数の星たちはその姿を隠している。普段はそれらの輝きで夜の街は照らされている。夜の街を照らす街灯の明かりがあるとはいえ、月や星の輝きがないことはどこか心を不安定なものにする。
そのような夜の街には硬質な質感を与えてくる建物が均等な距離を保って、連続で建てられている。それらの建物を地上から見ると、壮観であり圧迫感が身体を恐怖させる。

夜の街には人がいる気配がまるでしない。
建物の窓には明かりが灯っており、わいわいと賑やかな声が今にも聞こえてきそうだが、それらの声も街灯だけが虚しく照らす街の雰囲気にすぐに消されてしまう。
「はぁはぁ……」
その建物が建ち並ぶ圧迫感が溢れる街を必死に走っている人影がある。人影は、どこまでも続くかのような建物の間を縫って行く。
街の街灯に照らされるその人影はどこかの学校の制服を着ているようで、走っている姿をよく見れば、成人していないようにも見える。
（まだ追いかけてきているか……）
人影は走りながらも、自身の後ろを振り返る。走っている人影は、誰かに追われているかのように必死だった。
視線を前に戻し、さらに先を急いで、人影は走っている足を止め

ない。荒い息遣いだけが木霊するのは、現代ではとても考えられない。しかし、実際に周囲からは他に音も聞こえてこず、人影は自分の走る音と呼吸の音だけの街を走っていた。
（出来るだけ遠くへ――）
その一心で、人影はどこまでも走り続ける。
そこへ、
「いつまで逃げるんだよー、ユウキ――っ！！　さっさと観念するんだな――っ！！！」
周囲への騒音を顧みない大声が響きわたる。その声はスピーカーを介して、街中に届いているのではないかと思うほどに大きい。
「はぁはぁ……」
（ち……っ、もう追い付いてきやがった――！？）
聞こえてきた声は硬質感漂う街を走っている人影――『ユウキ』を追いかけている。ユウキは追ってきている声の主たちから逃げているのだ。
（なんで追ってきてんだよ……っ！？　たく――っ！）
ユウキは自身が追われている理由を知らない。思い当たる節はあるにはあるが、それを確認している暇はない。
「見つけたぞ――っ！」
「な……っ！？」
一直線に大通りを走っていたユウキに対して、大通りと繋がっている右の道から現れた全身を黒い防護スーツで覆っている追手の男たちがライフルを発砲してくる。いきなりライフルで撃たれるユウキだが、咄嗟に大通りに路上駐車されている自動車の陰に隠れる。
「ぜぇぜぇ……。くそ――っ」
（街中で銃連射とか止めろよな……）
そう、見つかると問答無用に銃で狙い撃ちにされるのだ。その度に、ユウキは自動車や建物、街路樹の陰などに隠れている。追われているユウキは発砲音に気付いた誰かが、警察に連絡してくれることを祈っているが、周囲には明かりの点いている窓が見当たらない。

周囲の建物がマンションから雑居ビルに変わっていたのだ。
「ち……っ！　周りこめ！！」
ユウキが自動車の陰に隠れたところをみた追手の一人は、ついてきている仲間に指示を出す。その指示を聞いた仲間は、迂回して挟み打ちにしようとしているみたいだ。
（向こうは複数か……。正確な数が知りたいな――。てか、捕まえる気なのか、殺す気なのかも分かんねえ……）
「ただやられるわけにはいかない、か――っ！」
じっと隠れているユウキはこのままではやられるだけだと判断して、追手の何人かが大きく通りを迂回しているスキを見て、残った追手の男たちに突撃を行う。
「な……っ！」
（残った追手は五人――か！）
自動車の陰からいきなり飛び出してきたユウキを見て、追手の男たちは一瞬ひるむ。その一瞬をユウキは見逃さない。
「ふ……っ！！」
「が……っ！？」
短い呼気を吐いてユウキは追手の男の一人を飛びあがっての回し蹴りで吹き飛ばす。大の大人を吹き飛ばすほどの蹴りの威力はとても成人もしていない少年の力には思えない。
しかし、吹き飛ばされた男が、街路樹にぶつかりそのまま気絶したのを見る限り、ユウキをただの少年と思うことはできなかった。
「なっ！？　こ、こいつ――っ！」
「くそがきがぁあああっ！」
仲間がやられたことに激昂した男たちが照準も定めないままライフルを発砲する。
「げっ！？」
近距離で撃たれた弾丸はユウキの急所に狙いが定まっていなかったが、流れ弾がユウキの左肩をかすめる。
「ぐぅ……」

かすめただけだったが、裂けた制服の肩口から血が流れる。その痛みを感じた瞬間にユウキは一度追手の男たちから距離を取る。

（迂回してる連中がもう少しで、後ろの通りから出てくるか……。さっさと片付けないと――）

そう焦るユウキだが、実弾を使う相手をさっさと片付けることは容易ではない。突撃も追手の一人を倒すことしかできず、すでに一度してしまったためにもう一度突撃を行ってもそれほど効果はないだろう。何よりもカウンターを受けやすくなる。それが拳ではなく銃弾なので、常套手段とするべきではない。

一度距離を取ったユウキを追撃するように、追手の男たちは発砲してくる。その追撃も、ユウキは通りに面している建物の陰に隠れてやりすごす。これで前方からの銃撃は凌ぐことができるが、後方からは格好の的になる。

（さて、どうする――）

ほんの一瞬の間に、ユウキは思案を巡らせる。そして、すぐ行動に移す。

「いつまでも隠れてられると思うなよ！！」

ユウキが先ほどまで逃げていた方向である前方からは追手の男が四人いて、建物の陰に隠れているユウキを狙って何度も銃撃を繰り返している。

さらに追手の男たちのうち数人が、ユウキを挟み打ちにしようと大通りを迂回しているだろう。そちらの数は把握していないユウキだが、そのことは気にも留めていない。

「そんなこと全く思ってねえよ」

追手の男の挑発に乗るように、ユウキは躊躇なく隠れている建物の陰から出て、一気に大通りに反対車線まで走る。

「逃がすかぁ！」

その行動を見た追手の男たちはユウキを逃がさないように追いかける。

（やはりついてきた。これで――）

建物の陰から飛び出したユウキは歩道から車道に飛び出し、街路樹を飛び越えて反対車線の歩道まで辿りついた。
「はぁはぁ……、ぐ――っ！？」
街路樹を飛び越えた後の着地の衝撃で、銃弾がかすめた左肩の傷に痛みが走る。
しかし、その痛みに蹲っている場合ではない。視線を上げたユウキは、目の前にある建物の入り口のガラスを突き破るようにして中に入っていく。
「な！？　あ、あいつ――」
追手の男たちは、ユウキが入っていった建物を見て、驚きの表情を見せる。
その建物は銀行だった。

序章　交わりの始まり　？

銀行の入り口を突き破って入ったユウキは、明かりが消されている一階の受付を見渡している。無論それは銀行強盗しようとか金庫を探そうとしているわけではない。

（銀行や金融機関には必ずあるはずだ――っ）

ユウキが探しているものは別のものである。

目的のものを探そうと本来なら銀行職員が入る受付の奥まで、ユウキは並べられている机を飛び越える。

「どこだ……！？」

躍起になって探しているところに、

「俺たちを銀行強盗にでも仕立て上げるつもりかぁ！？」

追手の男たちが銀行の中へ入ってくる。

（こいつらも躊躇なしか――！！）

銀行のフロア内に現れた追手の男たちを見て、ユウキはすぐに飛び越えた机の下に隠れる。そのコンマ数秒後に、けたたましい音とともにライフルの火がふく。

「くそ……っ」

容赦なしの銃撃が銀行のフロア内に響きわたる。その銃弾は銀行の受付内の机や椅子を貫通していき、壁に設置されているロッカーにも穴をあけていく。

（まずいな――）

銃撃が止むまで机の下から出られないユウキは、身動きがとれない。このままではじり貧であり、男たちもユウキ同様に机を超えて狙ってくるだろう。

この危機的状況を一発解消するために、ユウキは目的のものを探す。

（ドラマや映画なんかじゃ、よくこの辺りに――）

頼りない知識ではあるが、あてもなく探すよりはマシだろうとユウキはフロアを区切るように長く設置されている机の下を這って進みながら探す。這って進むユウキの後ろには、肩から流れている血の痕が残される。
その間もライフルの発砲音は止まらない。
「……？　あいつ移動してるぞっ！」
何度銃撃を行っても反応がないことに気付いた追手の男の一人が、机を飛び越えて銀行の受付内に行こうとする。
（げ……っ、ばれたか――）
なるべく物音をたてないように慎重に進んでいたことが逆に男たちに気付かれる要因になってしまった。
（こうなりゃやけくそだ――）
どちらにしろ追手の男たちも机を飛び越えてくるだろうと判断したユウキは、机の下を這って進むことを止めて立ち上がる。
「いたぞ――っ！！」
当然追手の男たちにはすぐに気付かれるが、ユウキは気にしない。立ち上がってそのまま受付の長い机を並走する。そして、机の下に手を当てて、目的のものを手探りで探す。
「待てぇ！」
そのユウキのすぐ後ろを、受付の机を飛び越えた追手の男が追いかけている。振り返ってその様子を確認したユウキは、さらに走る速度を上げる。
「くそ、こいつ速い――」
銀行の入り口付近でライフルを構えている男たちは仲間にあたることを考慮して、発砲することが出来ないでいる。
（今のうちに見つけないと……）
そう焦るユウキの左手が、机の下の出っ張っている何かとぶつかる。
「……っ！？」
それを感じてユウキは立ち止り、急いで机の下を確認する。

（あった――）
そこにはユウキが探していたものがあった。
ユウキが探していたものは、外へ緊急の連絡ができ、ブザーを大音量で鳴らす『非常ボタン』であった。
（金融間係には絶対にあるもんだろ、これ――）
目的のものを見つけたユウキは、それに飛びかかるようにしてボタンを押そうとする。
「……？　な――っ！？　やつをとめろっ！！」
それに気付いた追手の男の一人が叫ぶ。
「ち……っ！」
気付かれたことにユウキは舌打ちをする。その背中に受付の机を飛び越えた男が飛びかかって抑えようとする。
（やば――っ）
捕まる。
そうユウキが思った瞬間、銀行のフロア内に強烈な風が銀行の入り口のガラスや窓ガラスを割って吹き荒れる。
「な……っ！？」
いきなり吹き荒れた強風に追手の男たちは、建物内の壁まで吹き飛ばされる。ドガッという大きな音とともに男たちは壁に衝突し、そのままずるずると床に倒れていく。
「はぁはぁ……」
（やっとか――）
強風に吹き飛ばされて気を失った男たちをユウキが一瞥していると、
「ユウキ――！！」
声がかけられる。そちらを振り返ると一人の少女が立っていた。
少女の名前は『ミユキ』。
肩を少し超えるほどに伸びたストレートの髪が驚くほどに綺麗な黒色で印象的なユウキの幼馴染みである。
「間に合ったみたいだね――」

「ぎりぎりだけどな」
「仕方ないでしょ。連絡きたのお風呂入ってたときだったんだもん――」
さきほどの強風によって割れた銀行の入り口のガラスを踏みしめて、少女――ミユキはユウキのもとへ駆け寄って言う。その言葉は間違いではなさそうで、タンクトップの上に薄いカーディガンを羽織り、ショートパンツを履いているだけの服装から覗いている肌は少し火照ったような色合いをしている。その彼女は肩に小さなバッグをさげていた。
「なるほどね……」
そのミユキの肌を見て、おもわずユウキは視線を逸らす。
「連絡をくれてからどうだったの？」
「どうも……。喫茶店で別れてから、ずっと追いかけられてるんだよ。もしかしたら、喫茶店から張ってたのかもな」
ユウキがミユキに連絡を入れたのはこの逃避行が始まったすぐであり、もう三〇分以上も前のことだ。その後からの状況をミユキに説明する。
「追ってきているのが誰か分かってるの？」
「いや、分からない。俺を捕まえようとしているのは分かるが、何が狙いなのかもさっぱりだ」
追われているという現実は変わらないが、その理由はユウキにも分からない。
「ともかく、追手きてるのはこいつらだけじゃない。さっきスピーカーでこいつらのボスみたいなやつが叫んでたから、まだ油断は――」
そこに再び声が聞こえてくる。
「その通り。まだお前を捕まえるのは諦めてはおらんぞ？」
それはまたしてもスピーカーを介して聞こえた男の声だった。

「……っ！？」
聞こえてきた声に、ユウキは敏感に反応する。どうやらスピーカーの声の男は、銀行の外からこちらの様子を窺っているようだ。
「さっさと出てこい！　お前は袋のねずみだぞ？」
スピーカーから聞こえてくる音のほかに、ユウキはエンジン音が紛れていることに気付く。
（車……？）
「どうするの？」
「何が目的かは分からないが、捕まる気はない。逃げよう！」
「どうやって……！？」
銀行の入り口は別の男たちに抑えられているだろう。すぐに突入してこないのは、こちらを警戒しているからだろうか。
「裏口があるはずだ。あいつらを牽制するためだ。もう一発頼むよ、ミユキ！」
「しょうがないなぁ、もう――」
ユウキの言葉の意図を理解したミユキは、銀行の入り口へと向き直る。
その瞬間、またしても強風が起こる。その強風は銀行フロア内の机や椅子を持ち上げ、そのままユウキを捕まえようと追っている男たちがいる外へと吹き飛ばす。次の瞬間には、その机や椅子やらが風とともに襲いかかってきたのを見た、男たちの悲鳴が夜の街に響きわたった。
「さ、今のうちに行こう！」
そう言って、ミユキは振り返る。
「あぁ！」

序章　交わりの始まり　？

どれくらい走ったのだろうか、分からなかった。
気がつけばユウキもミユキも疲労から足を止めて、近くの隠れやすい場所に身を潜めている。
「ち……っ」
「大丈夫――？」
肩で息をしながら左肩を押さえているユウキに、ミユキは心配の声をかける。
「あぁ……。なんとか――だけどな。今何時だ？」
「え？　日が回って二時過ぎだけど、なんで？」
「夜明けまで耐えればなんとかなるかもって思ったんだけどな……」
答えながら、ユウキは周囲へと視線を巡らせる。
追いかけてきていた連中が近くにいないか、と周囲への中注意を怠っていないのだ。それは、まだ逃げきれていないとユウキが判断していないからだが、ミユキはここまで逃げてこられれば大丈夫だろう、と完全に安心しきっている。
「どうしたの？」
「まだ追いかけてくるかもしれない」
「まさか――っ！？　ここまで来たんだよ？」
先ほどまでの建物ばかりが並んだ街中から、ユウキがいる場所の景色は随分と変わっている。太陽が昇る前ということもあり周囲の景色をはっきりと認識することはできないが、建物の明かりがないということは市街地を大きく外れているのだろう。必死に逃げてきたユウキは自分がどこに向かって走っていたのかも分からない。
「安心はできないさ。合流するまでに誰か見たか？」
「？　ううん。ユウキと会うまでは人とすれ違ってないけど――」
「そうか……」

「それがどうかしたの？」
ユウキの質問が何を指しているのか分からないミユキは、焦ったように尋ねる。
「人払いがされているのかもしれないってことだよ。最初から向こうの術中にハマってるのかもしれないな」
「そ、そんな――！？」
ユウキの推測を聞いて、ミユキは戦慄する。それが当たっているならば、ここは敵の集団のど真ん中ということになりかねない。そうだとしたら、助かる可能性は限りなくゼロになる。
「そうだとしても大丈夫さ。最低でもお前だけは逃がすよ」
「はぁ――っ！？　何言ってんのよ！　自分が一番危ないっての分かってるでしょ？　ユウキを置いて逃げるなんて出来るわけないじゃない！！」
声を荒げるミユキ。自己犠牲を厭(いと)わない、というユウキの態度に腹が立ったのだ。
ユウキもミユキも危険な状況であることは変わらないが、その度合いはユウキの方がはるかに高い。ここで守られるべきなのはミユキではなくユウキだ、というのがミユキの判断だ。
「女子に守られるってのは男のプライドが許さないんだよ」
「そんな問題じゃないでしょ？　狙われてるのは私じゃなくて、ユウキなんだよ！？　ここでユウキに守られて私だけ逃げたら、あなたのお父さんに会わせる顔がないわよ！」
声のボリュームを落とさないミユキは、さらに声を大きくして言う。ユウキは、ミユキの言葉の内容よりも、その大きさに気を取られてしまう。
「そう言ってもらえるのは有難いけどな、もう少し声のトーンを落とせよ」
「え……？」
「ここの場所がばれるだろ」
そう注意を促すユウキだが、それはもう遅かった。

ユウキとミユキが隠れている場所一帯に、急に強烈なライトが当てられる。その眩しすぎる光を浴びて、
「な、なに……っ！？」
「遅かったか――！！」
二人は眩しさに目をくらませるように、目を細める。
強烈な証明が当てられて、ユウキは自身がどこに隠れていたのかをようやく認識する。どうやら、ここは郊外にある公園の一角のようだ。遊歩道の端に設けられている藪の中に、ユウキとミユキは隠れていた。その二人の後ろは公園と車道を区切る二メートルほどの金網しかない。
（後ろに逃げ道はない……か）
それに気付いたユウキは、苦虫を噛むように下唇を噛む。逃げた先を把握しきれなかったことに対する自分への憤りだ。
そこに、
「そこに隠れているのは分かっている。さっさと出てこい。こちらも追いかけっこは疲れたのだ」
男の声が届いてくる。
その声は先ほどのスピーカーの声の男と同じものだ。そのことに気付くと、ユウキは身体を震わせる。
（ユウキ……？）
そのユウキの反応を感じて、ミユキは驚く。
その反応はそれまでミユキが見たこともないものだった。敵を眼前にして身体を震わせるというのは、武者震いしか見たことがない。しかし、このユウキの身体の震えはとてもそれだとは思えない。
「ここまでよく追ってくるな！」
強烈な光の先にいるスピーカーの声の男に対して、ユウキは言葉をかける。
「こちらとしても、子ども一人にこんな徒労はかけたくないのだがな――。こちらの計画としても、お前が必要なのだよ。すんなりと捕まってくれないだろうか？」

「は……っ！！　そんなのはごめんだね」
「そうか……。残念だよ」
ユウキの返事を聞いて、スピーカーの声の男は表情は見えないが残念そうに言う。
（そんなことはさらさら思ってないだろうな――）
じっとしているだけではただ的になるだけだと判断したユウキは、じりじりと相手との距離を測りだす。せめてミユキだけでもこの場から逃がさなければ、とユウキは思考を巡らせる。
「残念……？　さんざん俺を追いかけ回しておいて、捕まる気なんてさらさらないのは分かってるだろ？」
「たしかにそうだな、すまない。これ以上の問答は不必要ということだな？」
「いや、一つ聞かせてくれ。お前たちは、なぜ俺を狙う？　俺が必要と言ったが、何が目的だ？　何か計画でもあるのか？」
ユウキは話を引きのばそうとする。
それはミユキをこの場から逃がす方法を考えるとともに、自分自身が狙われている理由を探るためだ。
（敵の数が正確に分からない……。武器もマシンガンだけってことはないだろうな――）
次第に目が慣れてきたとはいえ、依然としてユウキたちが隠れている一帯を照らすように強烈な証明が点けられている。その光のせいで、向こうの正確な位置が把握できないでいた。
「目的はもちろんあるさ。しかし、それをここで話す必要はないな。お前を捕まえてから、話せば事足りることだ。今のお前が気にすることじゃないさ」
「そう言われても気になるものは仕方ないだろう？　理不尽に捕まるのは嫌なんでね。そっちが話す気がないのなら、俺も絶対に捕まる気はないぞ？」
（何かは分からないが、目的はあるってこと――か……。まぁ、親父関連だろうな）

スピーカーの声の男の話を聞いて、そうユウキは判断する。
それに間違いはないだろう。ユウキには、これほどまでに執拗に追いかけ回される覚えがそれ以外に思い付かなかった。
ユウキの父親は国家企業に属し、ある研究を行っている。子どもであるユウキはそれだけしか知らないが、何度か父親が自身の研究成果を家に持って帰ってきているのを見たことがある。ユウキは恐らくそれに関することだろう、と判断する。
（だとして、俺を捕まえることで何がしたい……？　何が目的だ？）
ユウキの父親の研究成果はかなり特殊なものであり、その内容を知っている人物も限られてくる。今、ユウキと相対している男がそれを知っているとしたら、かなり政府に近しい連中ということになる。
ユウキの返事を聞いて、スピーカーの声の男は光の先で強く頷く。
「なるほど、それはたしかにそうだな。では、強硬手段に移させてもらおうか――っ！！」
「……っ！？」
（まずい……っ！！）
一拍遅れて反応したユウキは隠れていた藪の中から飛び出して、隣にいるミユキを地面へと強引に伏せさせる。
「な、なに――っ！？」

ゴォオオオオオオオオオオオッ！！！

と、ミユキが声を上げた瞬間に炎が二人の頭上を通過する。
いきなりのことに驚いたミユキは、
「きゃ――……！！」
と叫ぼうとするが、寸前のところでユウキの手がそれを止める。
今叫ばれたら、二人の位置を完璧に相手に知られてしまうところだった。
（火炎放射――。とんでもない銃火器を持ってきたもんだな……）

放たれた炎の行方を視界の端で追って、ユウキは感想を漏らす。火炎放射器など生きているうちに、生でお目にかかれるものではない。そのことに単純に感動しているのだ。
しかし、頭の隅では別のことも考える。
（捕まえる、と言っておきながら、一帯を焼き掃おうとする行為……。これくらいじゃ死なないってことも織り込み済みか――？）
「むぅううう……っ！」
そのユウキの下で、口を手で覆われているミユキがもごもごと何か言葉を発しようとしていた。
「……？　あ、あぁ悪い――」
気付いたユウキは、ミユキの口から手を離す。
「ちょっと――！　死ぬかと思ったじゃん！！」
「悪かったって――。けど、あそこで叫ばれたら一発でこっちの隠れてるところがばれるだろ？」
冷静に指摘するユウキだが、会話してる時点で大体ばれてるでしょ、とミユキは思う。それは口にはせずに、ミユキはユウキの顔をなるべく直視しないように小さく、
「それはいいから……、も、もういいでしょ――」
「……？」
ミユキの言いたいことがわからずに、ユウキは困惑する。すると、
「だから……っ！　いい加減どいてよ――っ」
ミユキの言葉で、ずっとミユキの上に覆いかぶさるようにして身体を伏せていたことに気付く。
「あ、あぁ――。悪い……」
慌てて、ユウキはミユキの上から身体をどかせる。やっと身体の自由を得たミユキは、
「重かったじゃない――！！」
と覆いかぶさっていたユウキに対して声を荒げる。
「だから、悪かったって謝ってるだろ。それに今はそれどころじゃないから、文句は後で聞くよ」

「それどころじゃないって……」
わなわなと身体を震わせるミユキの頬は少し赤く染まっていた。
ユウキの淡泊な言葉が癇に障ったようで、さらに声を荒げようとするが、
「来るぞ――」
ユウキの声で冷静さを取り戻す。
「……っ！？」
ユウキの言葉通りに、照明の光の先から数人の男が両手を広げて襲いかかってくる。その手には鋭利な刃物が握られている。
（今度は斬りつける気か？　やり方をやたら変えるな……）
敵が視界に入ると、ユウキは隠れていた藪の中から飛び出して、襲いかかってきている男の一人へ強烈な回し蹴りを放つ。
「ぐ……っ！？」
急に現れたユウキの蹴りを男の一人は受けとめることも出来ずに、まともにくらう。蹴りをくらった男はそのまま数メートルも吹き飛ばされる。
（まず一人）
敵の総数が分からない以上、一人を倒したところで安心することはできない。襲いかかってきている男の数、さきほどの会話の相手、照明を点けている人物、最低限のそれらを足しても一〇人近くはいるだろうとユウキは推測していた。
「こいつ――！！」
姿を見せたユウキに、さらに男が右手に持った刃物を袈裟斬りに振りかかってくる。強い逆光の中、寸前のところでユウキはそれをかわす。
「な……っ！？」
（予備動作が大きい。戦闘のプロではないのか――？）
斬りかかる前の動作が大きいことに、ユウキは相手への疑問を感じる。それを今結論づけている場合ではないので、ユウキはかわした後の一拍で相手の鳩尾に後ろ回し蹴りを見舞う。

「がぁあああっ！！！」
鳩尾を蹴られた男は呼吸が止まる一瞬の間に、仰け反るように吹き飛ぶ。
（これで二人）
「ミユキ、そこから出るなよ！」
さきほどまで隠れていた藪に背を向けて、ユウキはミユキが参戦しないようにクギを刺す。しかし、それは遅かった。
「はぁ！？　ユウキだけに戦わせてらんないわよ」
振り返れば、ミユキはすでに藪から出ていて、ユウキのすぐ後ろに立っていた。
「……はぁ――、お前ってやつは……」
分かり切っていたことだが、ミユキは守られているだけで満足する性格ではない。あくまでも狙われているのはユウキであり、ユウキを自分が守らなければ、と思っているのだろう。
思い出すようにミユキの性格を再認識したユウキは、ため息を吐く。
「出てきた以上は仕方ない。半分は任せたぞ？」
「分かってるわよ！」
「なに、くっちゃべってんだよ――っ！！」
話している途中に、言葉の荒い男が先頭に数人の男がさらに迫ってくる。その形相はとてもユウキを捕まえようとしているものには思えないが、だからといって怖気づいているわけにはいかない。
次々に襲いかかってくる男たちを、ユウキとミユキはひらりとかわし、なぎ倒していく。
「相手の数は目星がついてるの？」
「正確じゃないが、一〇人程度はいるだろう。一人でも取り逃がせば、また追われる。ここで全員叩くぞ！」
「わかってる――っ！」
お互いに声を掛け合うユウキとミユキは、それぞれが向かってくる男を素手で倒していく。二人の力はとても年齢相応のものには思

えない。
「……子どもの力ではないな」
（もしやとは思っていたが、この二人も――）
ユウキとミユキの戦いぶりを照明がある位置から見ているスピーカーの声の男は、ユウキとミユキがただの子どもではないと判断する。
「このままではやられるのはこちら側だな。もう一度用意を」
「はっ！」
突撃させている男たちに刃物を持たせている時点で、無傷で捕えることに執着していないスピーカーの声の男は、先ほど使用した火炎放射器を再度準備させる。その火炎放射器はスピーカーの声の男の隣に配置されており、砲口がドラム缶ほどの大きさもある。個人で使用するようなちゃちな火炎放射器ではなかった。
「これで手傷でも負わせられればいいのだが――」
まだ突撃させた仲間が戦っていることも気にせずに、スピーカの声の男は悠然と呟く。そこに、仲間への心配など微塵もない。あるのは、目的の遂行のみだ。
一方で、
「ち……っ！」
（粘るな……）
数人を気絶させたところまでは良かったが、残った男たちが持っていた刃物を捨て拳銃を取り出すと形勢は逆転した。
素手で男たちをなぎ倒したユウキとミユキも、拳銃相手にまともに飛びかかることはしない。身体を弾丸が貫けば、それは致命傷になりえるからだ。
「どうすんのよ――？」
相手が拳銃を取り出したところで、ユウキとミユキは一旦藪のそばに林立されている木の陰に隠れることにしていた。
「どうするもなにも……。銃相手に正面から突っかかるのは自殺行為だろ。俺はともかくミユキじゃ危険だ」

「でも、ずっとここに隠れてるわけにもいかないわよ！？」
「それもわかってる――！」
ミユキの言う通り、じっと木の陰に隠れていてもいずれは捕まるだろう。後ろには逃げる道もなく、この状況を打開するにはやはり相手を沈黙させるしかない。
男たちは依然として見境なく銃を乱射してくる。弾の装填がなくなるのを待つのも一つの手かと考えるが、そこは交代で撃ってきているだろう。その銃の発砲音とミユキの言葉がユウキの焦りを増させ、最良の判断ができない。
（どうする……どうすればいい……っ！！）
ユウキにとって最も大事なのは、ミユキの安全だ。しかし、藪の中に隠れていたミユキも出てきたことで、それはすでに叶わないと言える。ならば、次に取るべき手段は狙ってくる敵の殲滅だが、それも劣勢に立たされた状況では見込めない。
（時間をかければ、もっと追い詰められる……）
銃声は止まず、隠れている木に銃弾が当たっていき、剥がれた木片がけたたましい音とともに飛び散る。
「ユウキ……っ！」
別の木の陰に隠れているミユキが、切羽詰まったように声をかけてくる。
（……くそ――っ！）
「俺が突っ込む！　ミユキは援護してくれ……っ」
これ以上考えている時間はない、とでも言うようにユウキは大きな声を上げる。それを聞いてミユキは、
「え、ちょ……っ！？」
「それしか方法がないだろ！　合図するからな――っ」
驚いた表情を見せるミユキに、ユウキは視線を向ける。その目を見て、ユウキは本気だと判断したミユキは覚悟を決める。
「一発で決めてよね」
「わかってるよ。いくぞ――っ！」

ユウキは相手の銃声が止む瞬間を待つ。交代で攻撃をしているのなら、スキをつくにはその一瞬しかない。タイミングを間違えれば、真正面から銃弾を浴びることになる。その緊張感からか、ユウキは深く深呼吸を行う。

（大丈夫、大丈夫……。できるはず――）

そう強く自分へ念じて、ユウキは隠れていた木の陰から飛び出す。

「……っ！？」

急に飛び出してきたユウキに驚いた男たちは、改めて銃口をユウキへと向け直す。その一瞬をユウキは見逃さない。

「今だ――っ！！！」

まだ木の陰に隠れているミユキに聞こえるように、ユウキは大声で合図を送る。

「わかった――！！」

ユウキの合図を聞いたミユキも木の陰から飛び出し、右手を開いて真っ直ぐユウキの背中へと差し出すように向ける。

「女も出てきたぞ！」

ユウキに次いで飛び出したミユキに気付いた男の一人が、ミユキにも拳銃の銃口を向ける。しかし、それよりも早くミユキは行動を起こす。

「はああっ！！」

短い掛け声とともに、ミユキは全神経を開いた右手へと集中させる。

「……っ！？」

すると、その右手から強烈な突風が生み出される。

その突風はビュゥウウウウウッというけたたましい空気を切り裂く音を響かせながら、真っ直ぐ先にいるユウキの背中へ直撃する。

「……っ！」

その突風を受けたユウキの身体は風の力でふわりと浮きあがり、走るよりも速くユウキの身体を男たちへと吹き飛ばす。

「な……に――っ！！」

突風を全身に受けたユウキの突撃に気付いた男が驚いた声を上げるが、その時にはユウキは男の眼前へと迫っていた。
「……！？」
「おらぁああッ！！」
強風を全身に受けたユウキの攻撃は、さらに威力を増して重いものになる。それを男はかわすことも出来ずに顔面に受ける。
「がぁあああああ――っ！！」
ユウキの攻撃を受けた男は為す術もなく吹き飛ばされていく。

「ち……っ！　こいつ――」
味方の男が吹き飛ばされたのを見て、別の男がユウキへ牙をむく。すぐに拳銃を発砲するが、銃口を向けている間にユウキの姿がいなくなっていた。
「な……っ！？」
「後ろだよ――」
驚いている男に、ユウキは声をかける。その声を聞いた男が振り向く瞬間を狙って、回し蹴りを見舞う。
「ぐ……っ！！」
ユウキの回し蹴りを受けた男は、頭を強く揺さぶられその場に倒れる。一蹴りだけで大の男をノックアウトしたのだ。
「はぁはぁ……」
ミユキが放った強風を受けたユウキも身体にダメージがないわけではない。強い風圧を伴う風は身体を襲う凶器にもなる。その風を受けたユウキは身体が軋んでいる。
「身体がギシギシ言ってやがる――」
（もう一度同じ手を使うのは無理か……）
悲鳴を上げている身体を庇うようにユウキは脇腹に手を当てていると、
「一度引け――っ」
男が二人も簡単にやられたことを見て、スピーカーの声の男が命

令を下す。その声を聞いた残りの男たちは、一度ユウキたちから距離を取って様子を見る。
「……？」
その行動を不思議に思ったユウキは、いつでも相手の攻撃をかわせるように身構える。しかし、その攻撃はユウキの予想をはるかに超える範囲で迫ってくる。
「全部まとめて燃えちまえ――！！」
「げ……！？」
ゴォオオオオオオオオオオッという地響きのような音を放ちながら、再び火炎放射器が火を吹く。
予想の範囲を超えた攻撃だったため、ユウキの反応が一瞬遅れる。その一瞬で火炎の塊はものすごい速度で迫る。反応が遅れたユウキはかわすことができない。
「ユウキ――っ！！」
身体が動かないでいるユウキに、ミユキが後ろから大声をかける。
「は――っ！」
その声を聞いて、ユウキの意識が火炎の塊から外まで広がる。
視界が広がったユウキは、迫る火炎を寸前のところで回避する。その回避の方法に、スピーカーの声の男は驚愕する。
「な……！？　なんだ、いまの――？」
ユウキの回避行動は、迫る火炎を横に走ってかわすというものではなく、その場から消えるように、一瞬の間に別の場所に立っているというものだった。
（やはり、この二人は『覚醒者』――）
その回避行動を見て、スピーカーの声の男は自身の予想を確信させる。
「もう一度放射の準備を。今の動きを見れば、やつらが炎程度で死なないのが分かっただろう！」
その確信を得て、スピーカーの声の男はさらに火炎放射を再度行うよう命令を出す。その目には強い愉しみの色があった。

「ユウキっ！」
「大丈夫だ！　それより、あの火炎放射器なんとか出来ねえか！？」
「まともにぶつかったって鉄の塊壊すことなんてできないよ……っ！」
火炎放射器がある限り、不用意に相手に近づくことができない。逃げ切ることよりも相手を沈黙させることを優先しようと考えたユウキはまず火炎放射器の無力化を狙うが、そう簡単に壊せれる代物ではない。
（やっぱりか……。どうすれば――）
ここは郊外にあるそれなりの大きさの公園だが、入り口は先ほどからユウキを捕まえようと躍起になっている男たちの後ろにあり、ユウキたちの後ろは二メートルを超える金網が公園全体を囲っている。金網を超えることもできるだろうが、その間に狙われたら意味がない。
ユウキがどう突破するかを考えていると、火炎放射器の準備が整う前に男たちがユウキを捕まえようと再度突撃をしかけてくる。
「危ない――っ！」
ユウキがまた狙われているのを見て、ミユキも公園内の繁みから飛び出す。
「ば、馬鹿――」
飛び出してきたミユキを見て、ユウキは大声をあげる。ミユキまで出てきたら、二人とも格好の的になってしまうのだ。当然突撃してきている男たちも、ミユキも標的として飛びかかる。
「こんなやつらなんかに、やられるかああ！！」
「ぐわぁああ――っ」
「がああ……っ」
飛びかかってきている男二人もカウンターでなぎ倒すミユキを見て、ユウキは恐ろしさで背中を震わせるが、一息をついている場合ではない。
「お前まで飛び出してきてどうすんだよ！？」

「だって、ユウキが危なそうだったから……」
「ち……っ！　こいつら――」
「それなら陰から援護してくれりゃよかったのに――」
「い、今さらそんなこと言っても仕方ないでしょ！」
ユウキとミユキは会話をしながら、捕まえようと迫ってくる男たちの手をかいくぐり倒していく。
（生身の人間じゃ歯が立たないか……）
その様子を火炎放射器の隣でじっと見つめているスピーカーの声の男は、部下である男たちがやられていく姿を見ても動じない。
「準備はまだか？」
「あと一〇秒ほどでできます」
「よし、あいつらが手こずっている間に焼き切るぞ」
「仲間も被害に遭いますが……？」
「だからこそ、だよ。ユウキがこちらに意識を向けていないうちに放つのだ。やられる味方は私は知らない。全ては計画のため――だろ？」
「は、は――っ！」
スピーカーの声の男は非情な命令を下すが、それは自身に課せられている命令を遂行するためであり、計画のためだ。命令を受けた男も一瞬躊躇するが、その真意を悟ったかのように仲間を見殺しにする決断をする。
その遠くでユウキは打開策をひらめていた。
「そうだ、さっきの風で火炎放射器を吹き飛ばすことは？」
「んー…あの鉄の塊がどれくらいの質量なのか分からないからなんとも――」
ユウキの提案もミユキは渋い表情で返す。
「そうか……」
「……けど、やってみる価値はあるかもね――っ」
突撃をしてきた男たちを全員沈黙させたユウキとミユキは、公園の中央に陣取っている火炎放射器を睨む。その砲口はまたしても火

炎放射のために、準備をしているのだろう。
「こっちも時間がかかるから、その間まかせたわよ！！」
「あ、あぁ――」
強気なミユキの言葉を聞いて、ユウキも改めて相手を見据える。
そして、今度はユウキの方から相手に向けて突撃を行う。
「考えもなしに真正面から突っ込むか――。青いな！！」
ユウキの突撃を見てスピーカーの声の男は鼻で笑うが、ユウキには聞こえていないだろう。余裕の表情のスピーカーの声の男を見て、さらに突撃の速度を上げる。
（その鼻っ面をへし折ってやる！）
「準備いいよ、ユウキ――っ」
「用意整いました！！」
そこに、それぞれ準備完了の声が届く。
「放て！！」
「俺ごとやれっ」
それを聞いてユウキとスピーカーの声の男が同時に声を上げる。
その指示を受けたミユキの手から再び強烈な風が生み出され、火炎放射器の砲口の奥が凄まじい熱を帯びていく。その間もユウキは相手との距離を詰め、火炎放射が放たれないように砲手へと突撃をかける。
「ユウキを放射線上にもっていけ！」
突撃の方向を見て、ユウキの狙いに気付いたスピーカーの声の男は近くにいる部下の男に命令を出す。命令を受けた男はライフルを構えながら、ユウキの突撃を止めるために前に出る。
（な……っ！？）
突然前に出てきた男の動きに、ユウキは戸惑ってしまう。常人の走りを超える速度で走っているユウキは、その途中で止まることや角度を変えることはできない。このままでは、そのままぶつかるしかなく、さらに男はライフルを構えているためカウンターで撃たれる可能性もある。

近距離の銃撃ですでに左肩を銃弾がかすめているユウキの心に、その恐怖が再度湧き上がる。
「そこで飛んでっ！！」
ユウキのその一瞬の躊躇いを見たミユキが、後ろから叫ぶ。
「……っ！？」
ミユキの声を聞いて、ユウキはその場でジャンプする。そこに、
「いっけぇえええええ――っ！！！」
ミユキが放った強烈な風が火炎放射器へ向けて、一直線に放たれる。それとほぼ同時に火炎放射器の砲口から一際大きな火炎の塊が放たれようとする。
しかし、それよりも先に強風が公園を分断するように吹き通る。その風は砂塵を捲き起こし、ジャンプしたユウキやスピーカーの男、さらにはその部下である男たちも巻き込んでいく。
ビュウウウウウウウウッというけたたましい強風特有の音が公園内に響きわたり、火炎放射器の火炎が放射される直前に、火炎放射器そのものを持ち上げている。
「な……っ！？」
その光景を見て強風にもまれているスピーカーの声の男は驚愕の声を漏らし、砲口が持ち上がった火炎放射器から放たれた火炎が空中へとジャンプしていたユウキへと向けられ、火炎が放たれる。
ゴォオオオオオオオオオオオオオオッ！！！
という周囲の空気が焦げるような音と匂いを撒き散らし、火炎はユウキへと一直線に飛んでくる。
「う、うそだー……」
ユウキが次の言葉を言う前に、ユウキの身体が火炎と衝突する。
「がぁあああああ！！」
その火炎を受けたユウキの背中にさらに強風が吹き荒れ、火炎とともにユウキも吹き飛ばしていく。そして、次の瞬間、公園内に大爆発が引き起こされる。

「ユウキぃ――――――っ！！」

郊外の公園内に響きわたる爆発音とともに、ミユキの叫び声が響く。

しかし、引き起こされた爆発のけたたましい音とまき上がった粉塵に、その声も掻(か)き消されていく。火炎とともに強風に飛ばされたユウキは、公園内のどこかに吹き飛ばされたのだろう。ユウキを捕まえようとしていた男たちも同様でそれぞれがミユキの放った風に巻き込まれ、ばらばらに倒れている。

夜はまだ更けたばかりで、これからさらに暗闇の世界が広がっていく。

しかし郊外にあるこの公園では、昼かと紛うほどの明るさを放ちながら、公園内の木々が火炎に飲みこまれ、爆発音が周囲の住民を起こしかねないほどにけたたましく響き、撒き上がる粉塵が夜空を雲よりも厚く隠していく。

まだ、夜は更けたばかりだ。

序章　交わりの始まり　？

夜空に吸い込まれるように、黒煙が空高く上っていく。ついで焼けるような匂いが、辺りに充満している。
それらは、先ほどの爆発によるものだ。
地面が大きく揺らぐほどの爆発は巻き上げられた粉塵と火炎の衝突によって、引き起こされた。いや、強烈な風とともに巻きあがった粉塵が火炎放射器を飲み込み、無理矢理放射された火炎が火炎放射器の内部爆発を引き起こした、と言うのが正確だろうか。
どちらにせよ、公園の一帯が爆発の影響で悲惨な状況と化していた。
「……逃げられたか」
その状況を眺めながら、スピーカーの声の男はぽつりと呟く。
先ほどまで捕まえようと必死に追っていたユウキの姿はすでにない。一緒にいた少女――ミユキと呼んでいた――とともに、どこかへ消え去ったのだろう。
「も、申し訳ありません。私のせいで――」
そこに、捕まえ切れなかった男が謝りに来る。
「いや、仕方ないさ。向こうが『覚醒者』と分かっただけでも上出来だ。これでさらに対策が練れる」
ユウキを捕まえ切れなかったことに、スピーカーの声の男はそれほど悔しさを見せない。悲惨な状況へと変化した公園の中で、スピーカーの声の男はおもむろにタバコを吸い始める。
「『覚醒者』、ですか……」
『覚醒者』という単語を聞いて、謝りに来た男は声を震わせる。その男の震えを感じてスピーカーの声の男は、
「そうと知っていれば、対処することにはそれほど困らん。むしろ我々の計画への必要性がより高まったというだけだ」

震え上がる男をよそにして、スピーカーの声の男はニヤリと笑みを浮かべる。それには自身の見立てが間違いではなかったことへの嬉しさが滲み出ている。その笑みを見て、男はさらに震え上がる。『覚醒者』に立ち向かうことに恐怖よりも嬉しさを覚えている、といった表情は見る側には獲物を狩る獰猛な肉食獣にしか見えない。

「では――」

「無論だ。奴らはそれほど遠くへは行っていないだろう。すぐに追いかけるぞ」

「はっ！」

スピーカーの声の男は、依然として残り火が燃える公園の後にして、ユウキたちを再度追いかける。

街灯の明かりが点々と夜の街を照らしている。

その明かりに沿うように、ぽつぽつと地面に血痕が残されている。血痕はユウキのものだ。

「はぁはぁ……」

夜の街を歩いているユウキは爆発の影響で腹部に傷を負い、ミユキの肩を借りてなんとか歩いている状態だった。

「くそ……っ」

そのミユキは額に汗をにじませながら、先ほどの男たちから一歩でも逃げようと必死に歩いている。しかし、その肩にはユウキの手が回されていて、とても重そうだ。

「無理するな……。俺を置いて行けばいい」

ミユキを心配するユウキの声はとても小さい。

「はぁ……！？　何、馬鹿なこと、言ってんのよ。ここでユウキを置いて私だけ逃げたら、身体を張った意味がなくなるでしょ。それに、ユウキも、あいつらなんかには渡さない――っ！」

途切れ途切れの言葉にも、強烈な意志が込められている。ミユキ

の意思は最初から変わっていない。ユウキを決して狙ってくる奴らには渡さない、というその一心でここまで身体を張っている。それはミユキの、ユウキへの恋心と重なっている。
「けど、ミユキまで捕まったら元も子もないだろ……」
「そんなヘマはしないよ。私も、ユウキもあいつらには捕まんない。捕まえさせない――っ」
力強い言葉とともに、ミユキは一歩ずつ前へと進む。立ち止まることは、それだけ相手との距離が開かないということだ。
ミユキが歩いている場所は、住宅街の中のようだ。周囲には一軒家がずらっと並んでおり、物静かな様子は、硬質感が漂う建造物ばかりの市街地よりも増しているようだ。
それらの住宅はすでに明かりが消されており、静まり返った夜の街を象徴している。
「はぁはぁ……」
その夜の住宅街に、ミユキの息遣いが響き渡る。
「だから、無理すんなって――」
ミユキの肩に手を回して身体を預けるようにして歩いているユウキは、ぽつりと声をかける。その声色は依然として弱弱しい。
「それはユウキも同じよ。何も自分だけを犠牲にしなくてもいいじゃない……」
「俺自身に関わることだ。お前を巻き込みたくないんだよ」
「今さら何言ってんのよ。私が自分から首を突っ込んだことだもん。途中で投げ出すなんてしたくないの」
ユウキの本音を聞いても、ミユキは引き下がろうとしない。
(そうよ。私が好きで飛び込んで行ったんだもん)
自分の意思を確認したミユキの決意は固い。それを止める術を、ユウキは知らなかった。
足を休めずに歩くミユキの呼吸は次第に荒くなっていく。すでに二〇分近くは歩いたはずだが、皮膚を伝う緊張感は未だに解けない。まだ先ほどの奴らが近くにいることを、その本能が知らせているの

だ。その緊張感のまま、ミユキは住宅街の十字路へさしかかる。
　それを証明するかのように、夜の帳が降りている住宅街に無数の走る足音が響きわたっている。こんな時間に足音が響きわたること自体が異常と言えるだろうが、聞こえてくる足音は次第にはっきりと聞こえてくる。
（追いついて来たのかな……）
　聞こえてくる足音に、ミユキは耳をすまして集中する。
　目の前の十字路のどこから聞こえてくるのかを判断しようとしているのだが、ユウキや自身の呼吸音、肌を刺すような緊張感が集中力を鈍らせる。
「足音は間違いなく奴らだな――」
　もっと意思を集中させようとミユキが頭を振っていると、ユウキが小さく言う。どうやらユウキも気付いたようだ。
「どうしよう……？」
「引き返すのがベストかもしれないな。けど俺の血が地面には垂れてる。先回りされたのかもしれない……」
　そう推測するユウキは渋い表情をしている。自分の不注意が招いた結果だと考え、自身に対して憤っているのだろうか。
「そんな……。ばれないように住宅街を縫うようにして歩いてたのに――」
「それでも相手の数と速さには敵わないさ。爆発が起きる前の時点で、まだ八人は生きてたんだからな」
「そんな数くらいなら、私でも十分倒せるよ？」
　ユウキは住宅の塀に寄り掛かるようにして、少し足を止める。その身体を相変わらず支えているミユキの息は上がりっぱなしだ。そのような状態でも、ミユキは大の大人八人を倒せると断言する。
　その発言は間違いではないだろう。先ほどのミユキの戦いっぷりはとても少女のようではなかった。さらに、数人の男に囲まれても軽々といなしていたのだ。八人ならまだ許容範囲であるのだろう。
「相手が単純ならそれでいいかもしれないが、八人全員で迫ってく

るわけでもないだろう。分散してるだろうし、何より応援が来てるかもしれない。相手の素情が分からないんだ。あらゆる可能性を考えるべきだろ？」

追ってきている敵全員を倒そうといきり立っているミユキに、ユウキは冷静な言葉を掛ける。腹部を押さえているユウキの左手は真っ赤に染まっていた。

「そうかもしれないけど……。このまま捕まるのだけは避けないと――」

「それは分かってる」

周囲への注意を怠らずに、ユウキは思考を巡らせる。傷を負った状態でなければ、逃げることは軽々と出来たかもしれない。今さら嘆いても仕方ないことだが、そう考えられずにはいられなかった。

足音はだんだんと大きくなり、それに次いで会話も聞こえてくる。

（すぐそこまで来てるな……）

そう判断したユウキは、ミユキとともに住宅街に設けられているごみ収集場の陰にひとまず隠れる。

「そっちには？」

「いなかった――。血痕はこの先にはない。やはり引き返したんじゃないのか？」

「そのはずはない。そのまま血痕を追っている味方とさっき会ったが、発見していないと報告してきた」

「じゃあ――」

「この住宅街にまだいるってことだ。それほど大きい住宅街じゃないんだ。各ブロックごとにあてれば、すぐに見つかるさ」

聞こえてきた声は次第に小さくなり、足音もそのまま通り過ぎていく。

（そのまま突っ切っていったのか――？）

会話の声や足音が聞こえなくなったことに、ユウキは不信感を露わにする。間違いなくこっちに向かってきていた声や足音はぴたりと止んだ。

「どうしたのかな……？」
隣にいるミユキも不思議そうに言う。
「十字路を突っ切ったんだろうな。恐らく俺の血痕は気にせずに、先回りを命令された連中なんだろう」
ということは後ろから追ってきている奴らもいる、ということだ。そして、それは聞こえてきた会話の内容からも間違いないだろう。
「そんな――！？」
「まぁ向こうにとっちゃ、それが一番の手だろ」
「どうしよう……」
二人の声が止まる。
前に進めば、先ほどの連中とぶつかるかもしれない。引き返せば、追ってきている連中とぶつかるかもしれない。正面衝突をして負けるとミユキは考えていないが、今の目的は追ってきている奴らを倒すことではなく、捕まらないように逃げることだ。
その目的を達するには、ユウキが負っている傷はあまりにも重い。出血はハンカチを破いて止血したが、失った血の量はとても多い。立っているだけでもユウキには苦痛な状態だろう。
「……」
（どうすれば――）
「……」
（私だけでも敵を倒す自信はある。けど、その間にユウキが捕まったら元も子もない。もうこうなったら――）
ユウキもミユキも声を発しない。再び静まり返った住宅街に、二人の息遣いだけが虚しく響く。
しかし、この場にじっとしていることはできない。後ろから男たちが追いかけてきていることは間違いないのだ。
「ね、ねぇ、ユウキ――」
意を決したように、ミユキが口を開く。
「……？　どうした？」
「ここで捕まるのだけは避けないといけないよね……？」

「？　ここまで来たら、な」
　そのユウキの言葉を聞いて、ミユキは肩にかけていたバッグから手鏡ほどのサイズの丸い円盤型の機械を取りだす。
「お、おい！　それは――っ！？」
　手のひらに収まるサイズのその機械を見て、ユウキは目を見開いて驚く。
　その円盤型の機械は、少し丸みを帯びた淵から中央のボタンのような仕掛けまで、全てが鈍い銀色を発している。パッと見ただけではどのような機械かも分からないが、それを一番間近で見てきたユウキには一瞬で分かった。
「うん。何かあった時に役に立つかなって持ってきてたの」
「それを使うっていうのか！？」
「ユウキが捕まらないで済む一番の方法――そうでしょ？」
「そうかもしれないが……っ！　それはまだ――」
「そうも言ってられないでしょ？　こうしてる今も、あの男たちが追いかけてきてるなら、こうすることが一番だと私は思うの」
　そう言ったミユキはユウキの同意も得ずに、円盤型の機械の中央にあるボタンを押して、機械をそばにある住宅の塀に押しつける。
　すると、円盤型の機械は眩しいほどの強烈な光を放ちながら、丸みを帯びた淵が円状に広がっていく。
「……っ！？」
　あまりの眩しさに、ユウキもミユキも手で光を塞ぎたくなるほどに目を細める。
　淵が広がりきるとその眩しさは次第に弱まっていき、そのうちまた元の鈍い銀色の光沢だけが残る。しかし、円状に広がった淵の中は薄暗い霧が渦巻くように漂っていた。その中だけ別の空間のように思える。
「これが『時空扉（タイム・ドア）』――」
　円盤型の機械は、時空を飛ぶための機械――『時空扉（タイム・ドア）』だった。
　起動した円の内に入れば、平行世界に飛ぶことが出来る機械だ。

この機械を使い、現在の世界とは別の時間を進んだ平行世界へ飛べば、ユウキは捕まらないで済む、という最後の手段だ。
「お、おい――。本当に使えっていうのか？」
ミユキはユウキを『時空扉（タイム・ドア）』の前に無理矢理といった感じで立たせるが、円の中に飛び込むことをユウキは躊躇する。
「なんで躊躇うの？」
そのユウキの反応を、ミユキは不思議そうに尋ねる。
「なんでって――」
目の前にある時空への扉は霧が渦巻いている状態にしか見えず、その薄気味悪さは尋常ではない。それだけでも飛び込むことは躊躇いそうになるが、ユウキが躊躇する最大の理由は別にある。
「ここで躊躇してちゃいけないよ！　前に行っても後ろに行っても、じっとしてもあいつらに見つかるんだよ？」
「だからって、いきなり時空を飛ぶのは――」
必死になっているミユキにユウキは『時空扉（タイム・ドア）』の使用は考え直そうと言おうとするが、
「もう――っ！　ここでジタバタしてるよりは絶対マシなんだって！」
の一言とともに、『時空扉（タイム・ドア）』の円の中へと背中を押される。
「え……っ！？」
急に背中を押されたことに驚き、また押されたことにより自身の身体が円の中に飛び込んで行こうとしていることに、ユウキは間抜けな声を上げる。
時間がその時だけゆっくりと進んでいるかのように、あるいはコンマ送りの映像を見ているかのように、身体が円の中に入るまでの一秒足らずの時間をユウキは途方もなく長く感じてしまう。
「おい！　ミユ――……」
最後の一言は途切れて、ミユキまで届かない。
「ばいばい……っ」
消えていったユウキにミユキは別れの言葉を言う。その表情はど

こか寂しげだった。
そのままミユキは起動させた『時空扉（タイム・ドア）』を元の状態に戻す。これでユウキがあいつらに捕まることはないだろう。
（出現座標は変えたし、理論上はこれで上手くいくはず……。あとは代替で現れる人物の確保――ね）
そして振り返って、視線を前へ向ける。その表情は毅然としたモノに変わっていた。

序章　交わりの始まり　？

空の真上に昇った太陽の日差しがとても強い。
その日差しから視界を守るように、『上村悠生（かみむら ゆうき）』は手で視界を覆う。
「今日も暑いな……」
長袖のシャツは腕まくりをしており、だらんと首元を緩めた学校指定のネクタイがとても気だるそうな表情を助長させている。悠生が着ているのは、彼が通っている高校の制服だ。
悠生は学校からの帰り道を歩いている。
しかし、まだ下校時間ではない。本来の下校時間まではまだ数時間以上も時間がある。悠生は体調不良を訴えて、授業を早退したのだ。
（こんな暑い日は、家でのんびりとしてるに限る）
そう考える悠生だが、決して仮病を使った常習犯ではない。本当に体調が悪いのだ。
（朝からついてねえよ……）
彼の朝はいたって普通だと言える。それが他の人とほんの少し違うのは、起きたら家に誰もいなかったということだけだろう。悠生が起きた時間も、登校には十分間に合ういつもの時間であり、寝坊をしたというわけではない。それでも起きたら家に一人だけ、ということは今までも幾度もあった。
「帰ってシャワー浴びよ――」
それが悠生にとってはついてない、ということになる。
そこには、悠生の家庭事情があると言えるだろう。両親の仕事にそれほど関心を持っていない悠生は自身の親が何をしているのかはよく知らない。しかし、起きたら家に一人という状態が何度もあるとさすがにうんざりしてくる。それが少なからず、今の体調が悪い

ということに影響しているのかもしれない。どちらにせよ、今の悠生の気分はとても良いとは言えなかった。
悠生が通っている高校から家までの街並みは、ずっと住宅街が続くなんてことのない道程だ。しかし、悠生は見慣れたその風景に何処か言い表せない違和感を覚える。
（……？）
すぐ目の前にある家の表札も、通るたびに吠えてくる近所の犬も、通り過ぎるときに軽く会釈してくる優しいお婆さんも、何もかも見慣れた風景なのに、悠生は言葉では表現のできない不安を感じる。
「……」
立ち止まり、ぐるっと周囲を見渡すが、やはり昨日と何も変わっていない――暮らし慣れた街の景色が広がっているだけだ。
「どうかしたの、悠生ちゃん？」
悠生の様子がおかしいと思ったのか、子どもの頃から良くしてもらっているお婆さんが心配そうに声をかけてくる。
「い、いえ……」
「本当……？　なんだか顔色が悪いわよ？」
「あ、ちょっと朝から体調が良くなかったんで、学校を早退したんですよ」
「あら、そうなの？」
上手く会話合わせるように、話をしている悠生の言葉をそのまま信じたお婆さんは本気で心配してくる。
「え、えぇ……」
「それは安静にしてないと！　お家に着いたら、お薬飲んですぐに横になるのよ？」
お婆さんにとって、小さいころから近所付き合いの一環として面倒を見ていた悠生は孫のような存在である。それ故に、悠生の心配はその家族よりも過度にしてしまう節があった。
「はい、わかってますよ」
心から悠生の身体を案じてくれるお婆さんに、悠生は笑顔を見せ

て答える。お婆さんも、その返事を聞いて安心したように「うん」と頷く。
「それじゃあ――」
そう言って、悠生はお婆さんと別れる。
再び家路を歩き始めるが、やはり感じた違和感は拭えない。
（空気が違うのか……）
悠生は、そう考える。
雨が降る前や降った後あるいは季節やその日の気温などによって、吸う空気の匂いや感じが微妙に変わっていると思うことがあるように、悠生は空気が違うのだろうか、と推測する。それはあながち間違いとは言えない。
昨日よりも湿度が高い今日は、生ぬるい空気はうっとうしく感じるだろう。
（何なんだろう……）
感じる違和感に答えを出せないまま、悠生は家路を歩く。
照りつける太陽の光は一向に治まらず、かいた汗は不快感を一層に増すように身体を伝っていく。
それから、悠生が家に着いたのは二〇分ほど経った後だった。
玄関のドアを開けようとするが、ガチャガチャという音がするだけで、開く気配はない。朝、高校に行く前に悠生が鍵をかけたままなのだろう。
「……」
（やっぱりか――）
気付いた悠生は仕方なく鞄を漁って、家の鍵を取りだす。そしてドアのカギを開けて、家に入っていく。
「ただいまー……」
家に帰ってきた悠生は一言そう言うが、返事は返ってこない。
（当然……だよな――）
家に帰ってきても『おかえり』の一言がもらえないことに、悠生は少し虚しくなる。玄関に突っ立っている悠生は自分が抱いた気持

ちに気付いて、
（馬鹿らし……。もう子どもじゃないんだし――）
と、靴を脱ぐ。そして、帰宅途中でかいた汗を流そうと浴室へ向かおうとする。
「ふわぁ～…」
欠伸をしながら、リビングに鞄だけを置いて浴室へ向かおうとする悠生はちらっとリビングに置かれているテーブルを見る。そこには朝見かけた置き書きが今もある。当然、家には誰もいない。
（……）
その書き置きを見て、苦い表情になる。それを振り払うかのように悠生は頭を振って、リビングを後にする。
誰もいない家の中は昼間だというのに、とても暗い。カーテンを閉めているために太陽の光が室内まで届かないということももちろんある。しかし、それ以上に家の雰囲気が暗いのだ。その家の中に、リビングのドアを閉める音が虚しく響く。
廊下を数メートル歩いて脱衣所へ着いた悠生は、
「はぁ……」
と、ため息を吐く。さらに体調が悪くなったような妙な感覚を抱きながら、悠生は脱衣所で制服を脱ぎ始める。
脱衣所に設けられている洗面台の鏡に、悠生の顔が映りこむ。覇気のないその表情は、虚ろそのものだ。
（さっさと寝よ……）
制服を脱いだ悠生は、そのまま浴室へと姿を消していく。鏡には誰も映り込まない。

電球が一つも点いていない家は恐ろしいほどに暗く、生活感を感じることができない。

悠生の家もそうと言えるほどに、家の中に明かりがなかった。それは悠生が朝起きたときには家に一人だったから、というわけではない。日常的に電気が点いていることのほうが少ないのだ。
母親も父親も仕事で家を空けていることのほうが多いのは、悠生が子どもの頃から変わらない。だから、近所のお婆さんが面倒を見ていてくれた。そのことに悠生は並々ならぬ感謝の気持ちを持っている。お婆さんがいてくれたから、今の悠生がいる、と言ってもいいほどだ。
家を空けていることが多い両親は公務員として仕事をしている。そう聞いたことがあるだけで、どのような仕事をしているのか悠生はよく知らない。単身赴任で父親が県外で数年働くということも経験したことがあるが、それでも悠生の興味を引くことはなかった。
「暗……っ」
シャワーを浴びた悠生がリビングに行くと、先ほどよりもさらに部屋の中は暗くなっていた。太陽に雲でもかかっているのだろうか。
あまりにも暗いと思った悠生はリビングの明かりを点ける。悠生が明かりのスイッチを押すと、ずっとほったらかしにされていたかのように電球は鈍い反応を見せて明かりを灯す。
リビングに明かりが点くと、おもむろにテレビのスイッチを点ける。家に一人でいると話し相手もおらず、声が聞きたいがためにテレビを点けるのだ。
「……あ――」
昼のワイド番組を写しているテレビが置かれているテレビ台の端にこそっと置かれている家族の写真に不意に目が行く。まだ悠生が幼く、幼稚園にも通っていない頃の写真だ。幼い悠生は母親に大事そうに抱かれている。
写真には悠生と両親の他に、もう一家族写っていた。その家族の母親も当時の悠生と同い年くらいの子どもを胸に抱いている。
（……誰……だっけ――？）
ずっと気にもしていなかった写真を見て、悠生は写っている子ど

もに意識を向ける。しかし、その子どもが誰だったのか思い出すことができなかった。
「まぁ、いっか――」
写真の子どもにそれほど執着しなかった悠生は、リビングのソファに横になってテレビに映っているワイド番組をただ見る。その番組では、『地域観光探訪』と題した観光コーナーを今はやっていた。
うとうとと視界が霞んでいき、意識は次第に現実から遠のいていく。このまま寝そうだなぁ、とおぼろげに思いながらも悠生はソファから動こうとはしない。
（あ……薬飲んでないや……）
そのことに気付いた時にはもう夢心地の状態で、ソファのふかふかとした感触に悠生は全身が襲われていた。
（まぁ、いいや）
リビングの端の壁にかけられている時計の時間をみて、悠生はそう思う。朝飲んだ薬の持続効果はまだあるはずだ。
そう判断した悠生は、今度こそ夢の中に落ちていく。

序章　交わりの始まり　†

太陽も沈んだ夕方は、この季節ではようやく過ごしやすい時間帯になってきたな、という印象を与える時間である。昼間では歩いているだけで汗をかくということが日常茶飯事だが、太陽が沈めばそれもいくらか治まる。

「ふぅ……」

その穏やかになってきた気温の中を、一人の少女が帰宅しようと歩いている。少女が歩いているのは閑静な住宅街の中だ。他に通りを歩いている人も見当たらない。ずっと先に見える十字路までずっと一軒家が続くような通りは、見栄えの良い景色もなくただ歩いているだけでは退屈でしかない。学校が家から近い、という理由だけで通っている高校を受けた少女は、帰り道の平淡さにとても飽き飽きとしていた。

そこに、四軒先の家から犬の吠える大きな声が聞こえてくる。

（今日は、あそこの犬吠えてるのね）

普段は吠えることのない犬が今日は大きく吠えていることに、少女は疑問を持つ。吠えることもないおとなしい犬として近所で小学生たちから人気のある犬なのだ。その犬が吠えていることは珍しいというよりも、初めて見ることに等しかった。

（何かいるのかしら……？）

そのように疑問に持った少女は、そのまま吠えている犬がいる一軒家まで行ってみる。一軒家が近づくほどに、犬が吠えている声は大きくなってくる。

一軒家が近づいてくると、少女は近くの電柱の陰に何かが隠れていることに気付く。

「……？」

（なんだろ――）

電柱の陰に隠れている何かに気を引かれた少女は、恐る恐る顔をのぞかせる。そこにあったのは、
「……っ！？」
気を失っている少年だった。
（ひ……っ！）
そのことに気付いた少女は悲鳴を上げそうになる。しかし、その直前で、
「あれ、上村くん――？」
少年の顔が、見知ったものであることに気付く。慌てた少女は、気を失っている少年の真正面へと移動する。
（やっぱり――）
少年の顔を真正面から見て、少年が自分の見知っている人物だと少女は再認識する。
（でもどうしたのかしら？　上村くんは、体調が良くないって早退したはずじゃ――）
そう。
学校のお昼休みには調子が悪いと言って、帰ろうとしている少年の姿を少女は目撃している。体調不良と言い、数時間も前に早退した人が今さら外出をするなんてことはないだろう。
それよりも、少女は少年が電柱に寄りそうようにして倒れていることを不思議に思う。
「上村くん、だいじょう――」
意識があるのか確認するために肩を叩いて声を掛けようとしたところで、少女は気絶している少年の着ている制服が赤く染まっていることに気付く。
「……っ！？」
なんで赤く染まっているのだろうと顔を近づけ、
（血……？）
そう認識した瞬間に、吐き気を覚えて口元を右手で覆う。
（な、なんで――！？）

大量の出血で倒れているのだと理解して、少女の頭の中で様々な疑問が一瞬のうちに駆け巡る。しかし、それらの疑問はここで考えて分かることではない。

とりあえず少女は少年をこのまま放置しておくのは駄目だと判断して、少年の手を肩に回して家まで連れて行く。

少年の意識は、戻らないままだった。

第一章　世界が交わった時　？

ふわふわとした感覚が悠生（ゆうき）の全身を包む。
それはとても気持ち良くて、いつまでもその感覚を味わっていたいと思えるようなものだ。しかし、ずっとその感覚を味わっていることが出来ないと分かるような感覚でもある。
「……ん――」
吐息が自然とこぼれる悠生は、やわらかい感触のベッドに横になっている。その感触が悠生の感覚を誘導しているようだ。
ふと目を開けると、悠生がいたのは白を基調とした部屋の中だった。
「眠ってたのか……」
意識がまだはっきりしない悠生は、虚ろな目で部屋を見渡す。すると、その部屋が見慣れた高校の保健室だと気付く。
（あれ、なんで俺、保健室なんかに――）
状況が理解できない悠生は、記憶を辿ろうと思考を巡らせたところで、鈍い頭痛を感じた。
「……っ！」
不意に感じた頭痛を抑えようとするように左手で頭を押さえる。
そこに、
「大丈夫か？」
悠生を心配するような声が聞こえてきた。
「……？　拓矢……それに葵も……」
声をかけてきたのは、クラスメートである『吉田拓矢（たくや）』だった。
その隣には、同じくクラスメートの『飯山葵（あおい）』もいる。
「どうしたんだ、俺？」
「覚えてないのか！？」
悠生の発した言葉に、拓矢は驚いたような声を上げた。

「？　あ、あぁ……」
「授業中に急に倒れたんだよ、お前……！」
「……倒れた……？」
少しずつ覚醒していく脳で、悠生は拓矢の言った内容を理解する。
しかし、自分が倒れた、ということには疑問を覚えた。
（俺が、倒れた……？）
「全くびっくりさせやがって。先生は貧血だろうって言ってたけど」
「ほんとだよ～。すっごい心配したんだからねっ」
拓矢と葵は、それぞれ悠生の身を案じてくる。そのことに悠生は感謝しながらも、目が覚めたら保健室で横になっていたという状況を必死に整理しようとする。
（おかしい……よな――。体調が悪くて、昼には早退したんだし……）
保健室の壁にかけられている時計をみると、針は夕方になろうとする四時過ぎを指している。
（四時……っ！？　俺が家で寝ようとした時間と――）
悠生は体調不良で授業を午前だけ受けて早退したことと家に帰ったら早めにベッドに横になったことをはっきりと覚えていた。その時間が記憶の中では、四時だったのだ。
（これはどういう――）
自らの記憶と現実が一致しないことに、悠生は困惑した。
「どうした？」
そこに、悠生の様子がまだおかしいと感じた拓矢が心配そうに言った。しかし、その拓矢の表情ですら、困惑した悠生には恐く感じてしまう。
「い、いや――」
目覚めた自分の状況が未だに飲み込めない悠生は、歯切れの悪い返事を返すことしか出来ない。はっきりと覚えている記憶が、今の現実をさらに困惑したものへと変えている。
「ほんとに大丈夫か？　どっか頭打ったとかじゃないよな？」

「いや、そうじゃないけど――」
身を乗り出して心配してくる拓矢の表情は悠生のことを心から心配しているかのようだが、状況が把握できない悠生にはその混乱を助長させるものでしかない。
「私、先生呼んでくるねっ」
その拓矢の横に座っていた葵が、悠生が目覚めたことを保健の先生に報告しに行こうと立ち上がった。
「あぁ、任せた」
そう言って、葵が保健室から出ていくところを拓矢は見とどけて、もう一度悠生のほうへ向き直る。
「五時間目の現文の授業の時に倒れたんだよ。ほんとに覚えてないのか？」
「あ、あぁ……」
「まぁ、あんな倒れ方じゃ無理ないかもな。もうちょっと安静にしてろよ。その内、葵が先生連れてくるだろうしさ」
起き上がろうとしている悠生に対して、拓矢はまだ横になっていろと言う。たしかに頭痛はまだするとはいえ、悠生はそれほど深刻な状態ではない。そもそも現在の状況を把握したいがためにベッドから起き上がろうとしているのだ。
（学校で間違いはなさそうだな……二人とも制服だし――）
けど、と悠生は思う。悠生の記憶では学校には午前中までしかいなかった。それは間違いのないことで、今が午後四時過ぎであることが理解できない。誰かのいたずらかとも思うが、家に帰ったことも覚えているので、いたずらはあり得ないだろう。
（となると、考えられるのは――）
そこまで考えたところで、保健室のドアが開けられる。
「先生呼んできたよ！」
開けられたドアからは先ほど保健室を保健室を出ていった葵と白衣を着た腰まで届きそうな長い髪が特徴的な化粧でしっかりと作られている顔の『真田佳織（かおり）』先生が入ってくる。佳織先生は保健の先

生だ。
「真田先生！」
「どう？　上村くんの容体は？」
拓矢の声に気付いた佳織先生は、悠生の身体の調子を尋ねた。
「さっき目覚ましたんですけど倒れるまでのこと覚えてなくて、まだ調子悪いのかなって思って――」
「そう……」
拓矢から悠生の容体を聞いた佳織先生は保健室の壁に設置されているロッカーから、薬の瓶を取り出す。
「拓矢、だから俺大丈夫だって――」
「そう無理すんなって！　今日はもうこのまま授業もここで休んでろよ」
依然としてベッドから起き上がろうとしている悠生に、拓矢は授業も欠席することを勧めてくる。
「そうね。あんまり無理しちゃいけないわよ」
それに、佳織先生も同調した。
「とりあえず、はい」
そう言って、佳織先生は薬とコップに入った水を差しだしてくる。
「？」
「頭痛薬よ。頭痛いんでしょ？」
「あ、ありがとうございます」
（なんで分かったんだ……？）
疑問に思う悠生だが、差し出された薬をとりあえず水と一緒に飲みこむ。
「それ飲んで、もう一回寝なさい。次起きた時は身体もすっきりしてるでしょ。あなたたちも看病してくれてありがとうね」
「い、いえ」
「私たちは悠生が心配で……」
佳織先生に感謝の言葉を言われて、拓矢と葵はそれぞれ恐縮する。
二人のその表情を見て、悠生は小さくため息を吐いて、ベッドに横

になる。
（どっちにしろ、二人が心配してくれてるのは本当か――）
「あなたたちもそろそろ教室に戻りなさい。次の授業が始まる時間でしょ？」
「はい。それじゃ悠生、俺たち教室に戻るから」
「あ、あぁ。ありがとうな」
「気にすんなよっ」
二カッと笑顔を見せて拓矢は葵と一緒に保健室から出ていく。その拓矢と葵を見て佳織先生が、
「いい友達ね」
「え、えぇ。ずっと二人が看病してたんですか？」
「ん？　そうじゃないけど、休憩時間とか私が少し席を外してる時は二人があなたのそばにいたのよ」
「そう……ですか……」
そう言って、悠生は飲んだ頭痛薬の効用か自然と眠りについていく。
再び訪れる眠りは先ほどと同様にふわふわとした感覚を全身にもたらしていき、安堵感に満ちた幸福な眠りへと誘(いざな)う。
意識がある、どの世界が現実なのか分からなくなるほど、それは深くゆっくりとした速度で悠生を導いていく。

第一章　世界が交わった時　？

「……い――。……め……よ」
悠生（ゆうき）の意識の遠くの方で、誰かの声がする。
そのようにぼんやりと感じて、悠生の思考がだんだんと回復していく。重たい瞼（まぶた）をゆっくりと開けていくと、そこは知らない景色が広がっていた。
（さっきのは、夢――？）
「おいっ、目を覚ませよ！」
「やめてって……！　こっちに飛ばされたばかりで、きっと身体が疲れてるのよ」
「そんな悠長に構えてられないんだぞ？　こいつには早く起きてもらわねえと――」
目が覚めた景色の中で、遠くから少年と少女の声が聞こえてきた。意識が戻る寸前に聞こえていた声に間違いない。
（こ、ここは――）
悠生は見えているこの景色がどこなのか判断できない。見える範囲のもの全てが煤（すす）けたような暗い色合いの空間だった。目が覚めても、悠生の脳が覚醒するまでにもう少し時間がかかりそうで、悠生はそこが部屋であることに気付かない。しかし自分がベッドに横になっていることだけは分かった。
そこに、
「お！　ようやく目覚ましやがったな」
「ちょ……っ！？　そんな荒っぽく言っちゃダメだって！」
先ほどから言い争いをしていた少年と少女が声を掛けてきた。自分に掛けられた声を聞いて、悠生は顔だけを声が聞こえてきたほう

へ向ける。そこに立っていたのは、
「拓矢……っ！？」
「あん？」
急に返された言葉に、少年は戸惑いの声をあげた。
しかし、悠生にはその顔に見覚えがある。というよりも、クラスメートの拓矢で間違いがない。その隣にいる――先ほど少年と一緒に声をかけてきた少女の顔は見覚えがなかったが、クラスメートの顔を忘れる悠生ではない。しかし、その少年が着ている制服は、悠生が通っている高校のものとは違っている。
「ど、どうしてここに――。ていうか、ここはどこだ……？」
そう言って起き上がろうとした所で、不意に鈍い鈍痛が走る。
「痛……っ」
急に感じた頭痛に、悠生は不思議な感情を抱く。
（あ……れ……、この感じ前にも――）
「何言ってんだ、おまえ？」
悠生が言いようのない疑問を抱いているところに、少年は意味がわからないというかのように言ってきた。
（……？）
少年の言葉を聞いて、悠生は困惑してしまう。
現状を確認すると、悠生はベッドのようなものに横たわっている。気付いたら、ここに寝かされていたという感じだ。そして悠生がいる空間は、悠生が見たこともない部屋である。壁や床、天井が全て煤こけた暗い印象を与えてくる硬質感が溢れる空間だ。
そして、その部屋には悠生の他に、三人の男女がいた。一人は先ほど悠生に声を掛けてきた少年であり、悠生が拓矢と声をかけた少年だ。さらに二人いる少女の内、一人は少年と言い争いをしていた少女であり、言葉から悠生の身体の心配をしているようだ。最後に残った少女は部屋のドアの辺りに佇んでいる。
「あれ、葵（あおい）じゃないか……！？」
周囲をゆっくりと確認するように見て、そのことに気付いた悠生

はまたしても驚いた声をあげた。部屋のドアに佇んでいる少女の顔がやはり見知った顔であったからだ。その少女も少年と同じ制服を着ていて、デザインから同じ学校のものだろう。
（拓矢と葵がなんでここに――？　それよりもここは部屋……？　どこの部屋だ！？）
悠生の頭に、次々と疑問が浮かんでくる。なぜ自分はベッドに横になってるのか、この部屋はどこなのか、拓矢と葵がなぜいるのか、その二人が着ている服がなぜ悠生が通う高校のものと違うのか。
それらの答えを求めるように、横になっている悠生のそばにいる少女へ視線を向ける。
「全てを話して、あなたは信じてくれる？」
意味深にそう言う少女の表情は悠生の身を案じているようで、さらに質問に対する真剣な答えを求めているようだ。
「……」
その少女の表情を見て、悠生はすぐに言葉が出てこない。
（全てを話して――？　どういうことだ……？）
少女の言っていることが理解できなかった、ということもある。
悠生の疑問はここがどこなのかであり、自分はなぜ横になっているのか、そして拓矢と葵がなぜここにいるのか、ということだけだ。しかし、少女の言葉からはそれ以上の何かがあるような気がする。そう悠生は自然と思った。
ベッドに横になっている悠生は上半身だけを起こして、少女の顔を真正面に見据えて尋ねる。
「全て――ってのは、どういうことだ？」
「言葉のままよ。あなたがここにいる理由、私たちがあなたといる理由、この部屋がどこのなのか、この世界がどこなのか」
（この世界……っ！？）
少女の言葉に不可解なワードがあったことに、悠生は気付いて訝(いぶか)しんだ。この世界、とはどういうことなのだろうか。ただ考えているだけでは分からない。何よりもこの現状を知りたい、という一心

で、
「わかった、信じる……っ」
と、返事をした。
「そう。その返事が聞きたかったわ」
少女は一拍おいて、深く深呼吸をする。これから話すことがとても大事なことであるかのように、悠生の理解が間に合うように。
「まず私はミユキって言うわ。あなたの名前は悠生で間違いないわよね？」
「？　あ、あぁ」
何の確認か分からないが、悠生は少女――ミユキの質問に頷く。
「じゃあ悠生、私はこれから話すことについて、何を聞いても驚かずに信じてほしいと思ってるわ。これから話すことは全て真実で事実だから」
「わ、わかった……っ！」
さらに念をおしてくるミユキに、悠生は大きく頷いた。
「今、あなたがいる世界はあなたが暮らしている世界とは全くの別ものよ」
「……？　え――っ？」
ミユキが言ったことが理解できないで、悠生は素っ頓狂（とんきょう）な声を出してしまう。
「驚かないで、とりあえずそのまま私が言ったことを信じて――！！」
「あ、う、うん」
「そうね。仮にあなたが暮らしている世界を現実世界――『リアルワールド』と言ったら、あなたが今いるこの世界は並行世界――『パラレルワールド』、ということになるわ」
「並行世界（パラレルワールド）……？」
言っている意味が分からない、とでも言うように悠生は聞き返した。
「そう。あなたが暮らしている世界とは別の時間を辿ってきた世界

のことよ」
　驚いた表情のまま固まっている悠生に、ミユキはなるべく優しい声で説明する。
「な、なんで……俺がそんな世界に？」
「まぁ、そう疑問に思うでしょうね」
　悠生が抱いた疑問も、当然のようにミユキは理解した。
「おい、説明にそれほど時間をかけてられないぞ」
　言葉を選ぶようにゆっくりと話しているミユキに、部屋のドアの傍に立っている少年が急かしてくる。
「分かってるわよ。でも、誤解させるような説明もできないでしょ」
　横槍を入れてきた少年を一蹴して、ミユキは話を続けていく。
「あなたが、こちらの世界に来た理由は後で説明するわ。まず平行世界（パラレルワールド）から説明させてもらうわね。あなたは世界が一つしか存在しない、と証明できるかしら？」
「世界が一つ……？」
「そう。世界が、あなたが暮らしている世界だけだと、どうして言い切れる？　そんなこと証明できる人はいないはずよ。世界が二つ以上存在するということも証明できないけれど、そう考えた人たちが昔いたの。その人たちは、複数存在する世界を移動する手段を確立させようと何年も研究を続けてきたわ。あるかも分からない世界のために――ね」
　ミユキが話す内容のことは、とてもいきなり信じることが出来るものではなかった。並行世界という概念が存在することは悠生も知っている。しかし、それは作り物の世界において、だ。現実に存在すると思ったことは一度もない。
　だが、先ほどから部屋の隅にいる拓矢だろう少年と、葵だろう少女の様子が、悠生を友達だと認識しているようには見えないことに、悠生は不安を抱いていた。
「世界が二つ以上存在するのか、それを確証することもせずに、その人たちは時間軸を移動する手段を確立してしまったわ」

「それはどうやって――？」
当然のように疑問に思った悠生は、ミユキの話を中断させるように疑問を口にする。
「……、これがその答え――よ」
少し躊躇する様子を見せたミユキだが、観念したように肩に掛けていたバッグから手鏡ほどの大きさの丸い機械を取り出した。
「お、おい……っ！？」
そのミユキの行動を見て、部屋のドアを見張るように控えていた少年が止めようと口を開くが、
「構わないわ。全部を理解してもらうためよ」
ミユキは自分たちの秘密を打ち明けることに躊躇（ためら）わない。
「それは？」
「これは『時空扉（タイム・ドア）』。時空を飛ぶための機械よ」
「……？」
ミユキの口から発せられた言葉はそれまでの何よりも理解し難いものだった。手の平に収まるようなサイズの機械が、本当に時空を飛ぶことができる万能の機械というのだろうか。悠生にはとてもじゃないが、その話が信じられない。
「まぁ、そうでしょうね。でも、これを見たら、あなたもこの世界があなたが住んでいる世界と違うことを信じるしかないでしょう？」
そう言って、ミユキは部屋に一つだけ設けられている窓のカーテンを開ける。
そこに広がっていた景色は薄暗く、しかし分厚い雲が空を覆うどんよりとした雰囲気の街の全貌だ。見える街の景色も硬質感漂う様々な建造物が建ち並んでいるが、そのどれもが半壊状態だった。建造物の外壁が崩れ落ち、その中が容易に視認できるほどだ。まともに人が暮らしている街の様子には見えない。
「こ、これは――！？」
「信じてもらえたかしら？　まだ夜明け前だから空は暗いけれど、街の景色はもう何年もずっとこのままよ。あなたが暮らしている街

はこんな景色？」
　ミユキのその一言で、悠生は窓から広がっている景色の中に見覚えのある建物があることに気付く。
「あのホールは……」
「そう、『市立スポーツ文化ホール』よ。昔はあそこでよくイベントが開催されていたのにね……」
『市立スポーツ文化ホール』、それは悠生にとっても思い出が詰まっている場所だった。そのホールが見るに堪えない状態であることに、悠生は驚く。
「そ、そんな……。先週だって、あそこで試合があったのに――」
「それは、あなたの世界での出来事でしょ？　私たちの世界では、あのホールはもうずっとあのままよ……」
　今じゃ人が立ち入ることもないわ、という一言を飲みこんでミユキは寂しそうな表情を見せた。その表情に悠生はズキンとした胸の痛みを覚える。
（な、なんだ今の――！？）
　自分の反応に戸惑っている悠生に気付かずに、ミユキは話を続ける。
「どうかしら？　私の話も信じてくれる？」
　話は全て信じろ、と言っていたミユキだが、悠生が信じているかどうかの確認を再度行ってくる。それは、悠生に目の前の事実を理解してもらい、全てを信じてもらうためだ。疑心があるままで話しても、肝心の伝えたいことを理解してもらえないかもしれなかった。
「こ、こんな街見せられたら、信じるしかないだろ……」
　そう言う悠生は、顔面を蒼白させている。それは目の前の光景が信じられないという感じではなく、なぜこうなってしまったのかという疑問によるものだ。
「良かったわ。ここまで話して信じてもらえないなんてなったら、大問題になるところだったからね」
「大問題？」

「えぇ。でも、そのことについてはこれからの話を理解してからね――」
ミユキは、そこで一拍置く。
今すぐにも壊れそうな木製の椅子から立ち上がった彼女は、先ほど取り出した手鏡ほどの大きさの機械――『時空扉(タイム・ドア)』を部屋の壁にセットする。
「？」
ミユキの行動の意味が分からない悠生は、はてなマークを頭に浮かべている。
「さっき、この機械が時空を移動する手段だと話したわね。つまり、あなたはこの機械によってこちらの世界に運ばれてきたことになるわ」
悠生への説明を再開した少女は、壁にセットした機械の中央に設けられているボタンを押す。すると機械は眩しい光を放ちながら、その丸い淵を円状に広がらせていく。
「な、なんだ……っ！？」
起動した『時空扉(タイム・ドア)』は直径二メートルほどの大きな円を作り、その内部は薄暗い霧が渦巻いている。先ほどまで放っていた強烈な光も、起動が終わると治まり、元の鈍い銀色の光沢だけが残っていた。
「これが『時空扉(タイム・ドア)』。この中に入れば、並行で存在している世界へ飛ぶことができるわ」
「こ、これが……」
部屋の天井にまで届きそうなほどに広がった『時空扉(タイム・ドア)』を見て、悠生の開いた口が塞がらない。その視線は真っ直ぐ『時空扉(タイム・ドア)』の円の中に向けられている。
（まるで漫画かアニメの世界のような――）
単純な感想しか思い浮かばない悠生は、その円の内側をじっと見つめて、そこで気が付く。
「……っ！　これが時空を飛べる機械なら、俺がくぐれば元の世界へ戻れるんじゃないのか！？」

それなら帰れる、と強い期待感を込めて悠生はミユキのほうへ振り向く。しかし、
「……残念ながら、それはできないわ……」
「……！？　な、なんで――？」
当然のような悠生の疑問に、ミユキは答えづらそうに口を閉ざす。その顔は先ほどよりも暗い。
「なんでだよ！　目の前に時空を超えられる機械があるんだろ！？　俺だってこの世界のことを信じたんだ。世界が二つ以上あることは分かった。なら、この機械使えば世界を超えられることも実証済みじゃないか！！」
「そ、それはそうなんだけど……」
ミユキの返事は歯切れが悪い。そこに、
「全部をちゃんと話せよ。ここまできたら話さないほうが、後味が悪い。追手はまだ来なさそうだ」
じっと立っている少年が口を挟んだ。その顔はカーテンが開けられた窓に向けられている。窓の外の街を見ているようだ。
「タクヤ……」
その少年に部屋のドアの前に控えている少女が「口を挟んじゃいけない」と忠告する。しかし、その前の単語に悠生は敏感に反応する。
「拓矢……？　やっぱり拓矢なんじゃないか！！」
「あ……」
悠生の言葉を聞いて忠告をした少女がしまった、というような表情を見せた。
「バカ。せっかく黙ってたのに――」
「ご、ごめん」
「こうなったら仕方ない。おい、お前、一つ言っておくぞ。俺はお前が知ってる拓矢とは違う。こちらの世界とあちらの世界をごっちゃにするんじゃねえよ」
「え……？」

少年――タクヤの言ったことに、悠生は驚いた。
「困惑しても無理ないでしょうね。私が一番に説明すればよかっただけなんだけど……、そこにいるタクヤはあなたの世界にいる拓矢とは別人なのよ。全く同じ顔をしてるけどね」
驚いている悠生に、ミユキが補足を加えた。そのミユキの言葉に、悠生はさらに混乱する。
「ど、どういう――？」
「世界が二つ存在しているのよ。それぞれの世界に同一人物が存在していても不思議じゃないでしょう？　というよりも、あなたの世界にいる人はこちらの世界にもいるって言ったほうが正しいかしら」
「同じ人物がそれぞれの世界に存在する……？」
「そうよ。何を疑っているの？　現に目の前にいるタクヤは、あなたの世界の拓矢とはＤＮＡレベルで同じだけれども、辿ってきた記憶は全く違うわ。あなたも違和感を感じなかった？」
そう言われれば悠生は拓矢と葵と同じ顔をしている二人に対して、知っている二人と違うというような妙な感覚を抱いていた。
「たしかに、そうなんだな？」
ミユキが言っていることを確認するように、悠生はタクヤへ問いかける。
「あぁ、そうだ。俺はユウキは知ってるが、お前は知らない」
「ユウキ……？」
タクヤの口から出た言葉に、悠生は眉をひそめる。
「はぁ……。俺がこちらとそちらの世界にいるように、お前と瓜二つの奴がこちらの世界にいたとして不思議はないだろう？」
「……っ！！」
鈍感な悠生にため息を吐きながらもタクヤは教えた。その可能性を考えなかったわけではないが、改めて言われると悠生は複雑な気持ちになる。急に自分には双子の兄弟がいるのだと言われたような気分だ。
「そういうことよ。そして、あなたがこちらの世界に来た最大の理

由は、こちらの世界にいたユウキが、この『時空扉（タイム・ドア）』を使ってあなたの世界へ時空を飛んだから」
「……！？」
さらに打ち明けられる事実に、悠生の反応が追い付かない。しかしミユキは話を止めない。最初に言った「そのまま信じて」の言葉の通りに。
「あなたは、ユウキがこちらからあなたの世界へ飛んだ代替としてやってきたの」
「な、なんで……？」
「この『時空扉（タイム・ドア）』は未完成で、誰もが使えるというわけではないの。唯一使える人物が、こちらの世界のユウキだけ。彼が持っている能力とこの『時空扉（タイム・ドア）』を合わせて、ようやく世界を超えることができるの」
「能力？」
ミユキの口から不可解なキーワードが出たことに、悠生は気付いた。その言葉を反芻（はんすう）すると、ミユキは何かに気付いたように言いだす。
「そういえば、そちらの世界には『覚醒者』はいないのね」
（『覚醒者』……？）
「こちらの世界では、『覚醒者』と呼ばれる人たちがいるわ。その人たちはみな、それぞれに人知を超えた能力を備えているの。私も『覚醒者』なのだけれど、私は風を操ることができるわ」
こんな風にね、と言ったミユキは右手の人差指を立てて、無造作に部屋の中に風を生み出す。その風は緩やかながらも、悠生の目にかかるほどの前髪を持ち上げる。
「な……っ！？」
不意に風が起こったことに悠生は驚いた。
部屋は悠生が目覚めた時から、ドアも窓も閉め切っていて風が起こる状態ではない。もちろんエアコンなどの風を送る機械などもこの部屋にはなかった。

「わかった？　私は自由自在に風を操ることができる。そして、タクヤは――」
「俺はパソコン等の電子機器あるいはネットワークにアクセスすることができる能力を持っている」
　ミユキの言葉を引き継ぐようにタクヤが言った。大した能力でもない、といった感じの口調だが、悠生には能力差の度合いが分からない。
「私は、他人の視界を共有することができる能力を持ってるわ」
　そして、先ほどからずっと部屋のドアの前に立っている少女――アオイが口を開いた。
「共有……？」
「実演するなら、今あなたの視界にはミユキの胸の谷間が入り込んでいて、あなたはちらちらと盗み見ているわね」
「な……っ！？」
「ぶ――っ！」
　アオイの言葉に、ミユキと悠生がそれぞれ違った反応を見せる。
「な、なんで分かって――」
「どこ見てんのよ！」
　悠生の視線に恐怖を感じたミユキが着ているタンクトップの胸元をカーディガンで隠す用にして、悠生をどつく。
「痛……っ！　ご、誤解だって！！」
「何が誤解よ。アオイの能力は絶対なのよ！」
　声を荒げるミユキは頬を赤くしながら、さらに悠生を掴みかかろうとするが、悠生が危険だと判断したタクヤがミユキを止める。
「おい、それくらいにしとけって」
「ちょ――っ！　私が真剣な話してるのに、エロい目してたのよ！？」
「殴るなら後にしろよ。お前が全部話すっていうから、こっちは付き合ってんだぞ？」
「ぐ……。わ、わかったわよ！」

しぶしぶとタクヤの言葉に従うミユキだが、その目は先ほどよりも鋭くなっている。
（うわあああ、しまったな……）
ミユキに睨まれた悠生は、萎縮したようにベッドの上で縮こまっている。
「ま、まぁ、これで私たちの能力は分かったでしょう」
先ほどまでの調子を取り戻そうと軽く咳払いをしたミユキは再び説明を始める。しかし、赤くなった頬はそのままだ。
「あ、あぁ……」
頷く悠生も気まずそうで、声が小さい。
「そ、それで、こっちの世界の俺もその『覚醒者』なんだな？」
「えぇ、そうよ。そして、この『時空扉（タイム・ドア）』ももともとはユウキの能力を含めた機械と言うべきかもね。どういうカラクリで時空を飛べるのかは私たちは分からないけど、研究者たちは自信を持ってたみたいよ」
「あんたらがそれを作ったんじゃないのか？」
「何を言ってるの？　さっきも言ったけど私たちはただの『覚醒者』よ。これを作ったのは、ユウキの両親が所属している研究グループよ」
「両親……？」
「あなたのじゃなくてね――」
「それは分かってるよ！　でもカラクリが分からないってのは？」
それを一度使っていながら、仕組みも分かっていないことに悠生は疑問を抱く。仕組みも分からない機械をよく使う気になったもんだ、と。
「私たちは時空を飛べるわけじゃないからね。知らないでもいいかってスタンスなんだけど、ユウキの『空間移動』――『座標移動』とも言えるかしら――の能力とセットで使うことで初めて世界を超えられるらしいのよ」
「『空間移動』……」

どうやらユウキの能力はそういうらしい。言葉の意味から、悠生は瞬間移動するような能力なのだろう、と判断する。
「それで、ユウキがなぜ、この『時空扉（タイム・ドア）』を使ったのかというと――」
そこでミユキの言葉は止まる。
その瞬間に、窓の外の街の建物から大きな爆発音が響いてきたのだ。
「……っ！？」
「な、なんだ――！？」
不意に起こった爆発は周囲に衝撃波をまき散らす。それは悠生たちがいる部屋にも届き、窓がガタガタと揺れ、部屋全体が鈍く振動する。
「追手が来たんだ！！」
いち早く反応したアオイがいきなり大声を上げる。
「追手！？」
「ち……っ！　もうここがばれたか――！！」
悠生は不穏な言葉に驚き、タクヤは追手が来たということに驚愕する。
「相手はどこだ？」
慌てたように窓を開けたタクヤは、身を乗り出して周囲に目を配らす。
「数ブロック先の複合ビルよ。しらみつぶしに探してるようだけど、こちらに確実に近づいてるわ」
慌てているタクヤを落ち着かせようとアオイはそう報告する。
「数ブロック……。あと数分でこちらに来るでしょうね。場所を移すわよ！！」
アオイの報告を受けて、ミユキは部屋から出ると言う。その表情はタクヤ同様に慌てているように見える。
「移動するってどこに――？」
部屋から出ようと起動させていた『時空扉（タイム・ドア）』を仕舞おうとしてい

るミユキに悠生は尋ねた。
「私たちの『家』に――よ！」

第一章　世界が交わった時　？

陽が昇る前の空は次第に明るくなっていく様を如実に表していて、生物が起きる前の静けさを一段と感じさせてくる。

しかし、その静けさは今はない。

半壊した硬質感の漂う建造物の一つに、黒から灰色に変わろうとしている空を一部燃えたぎるほどの赤に染めているビルがある。そのビルは勢いを止めない炎に飲みこまれている。黒い煙が空高くまで上がり、周囲に焦げた匂いを捲き散らかしているビルの中で、一人の少年が立っていた。

「ここも違うみたいだな」

ぽつりと呟く少年の目は、目の前に広がっているビルを燃やしつくそうとしている炎に注がれている。

その炎を見て、少年は不敵な笑みを浮かべる。

少年の背丈はそれほど大きくはない。少年の歳の平均身長よりも低いだろうか。全身黒い服装に身を纏(まと)った少年は鋭い目つきで、じっと燃える建物を睨(にら)んでいる。

「おい、トモヤ。それくらいにしとけ、次行くぞ！」

その少年――トモヤに、男が後ろから声をかけた。その男はさきほどまでユウキを捕まえようとおいかけていたスピーカーの声の男だ。

「なんだよ、ここはもう終わりか？　俺は足りねえぞ？」

「それは次の場所でやればいいだろ？　こちらはすぐにでも追いかけたいのだがね……」

「ちぇ――っ。しゃあねえな」

スピーカーの声の男に言われて、トモヤは燃え盛る炎に背を向ける。

「そのユウキってやつは、少しは骨がある奴なんだろうな？」
「あぁ、我々の手から何度も逃れている奴だからな」
「それ、単にあんたらの力が足りないだけなんじゃないか？　大体さっきの追走戦から俺を出しておけばよかったんだよ」
　スピーカーの声の男の言葉を胡散臭そうに思うトモヤは、気だるそうに言う。その表情はとてもつまらなそうだ。
「そう言うな。向こうも『覚醒者』だという確証がなかったからな。たしかに我々の力不足はあるだろうが、お前を出し惜しみしたわけじゃないさ。相手が『覚醒者』だと分かれば、こちらも同じ土俵で臨むだけの話だ。
「ルールが決まってるリング上での殴り合いじゃないんだぜ？　初めから全力で狩ればよかったんだよ、ライオンみたいにな」
　スピーカーの声の男の話にトモヤは食ってかかる。相手のレベルに合わせている、とでも言うような言葉遣いにいらついているようにも見える。
「たしかにそうだな。それは我々の意識不足が招いた結果だ。相手はお前と同じ『覚醒者』、いくら束になっても、我々一般人には敵わないということか。悔しいことだな」
「初めっから負け犬根性満載じゃねえか。そんなんじゃ勝てる勝負も勝てやしねえよ。こっちが有利だっていう要素をいくつ作れたかが重要なポイントだろうが。それが力の差だろうが、精神的な気持ちだろうが、何ら変わりゃしねえよ」
　軽く言ってのけるトモヤは男の言葉をさして気にしている風ではない。それよりも『覚醒者』でるユウキと相対することを待ち望んでいるようだ。
「はっは――。簡単に言ってくれるな。そう言ってくれるお前がいてくれれば、こちらも百人力だ」
「はっ！　俺が百人力？　そんな程度だと思うなよ？」
　ニヤリと笑うトモヤの顔は、強敵を求める貪欲な狩人のものだった。

その目を見て、男はドキリとする。
（威圧感からして、我々と違うな……。これが『覚醒者』という人種か――）
トモヤの表情を見た男は足をすくませてしまう。それに気付かないトモヤはさっさと歩いていく。その背中は、異様な威圧感放っていた。
空へと上る黒煙は、その勢いを止めず、ビルを燃やす炎は依然として強烈な光と熱を新しい一日が始まろうとしている街に放っている。

第一章　世界が交わった時　？

太陽が昇る前の街を悠生（ゆうき）は必死になって走っていた。その前をミユキとタクヤ、アオイの三人が走っている。
「はぁはぁはぁ……」
乱れる呼吸を無理矢理整えながら、悠生はそれでも足を止めない。いや、止めるわけにはいかなかった。
「追手は……っ？」
「まだ距離はある。けど、こっちが移動したのに気付いたのかも――っ！　車使いだした！！」
「ち……っ！　車――」
（装甲車かしら……？）
アオイの報告を聞いて、ミユキは一瞬考える。悠生を捕まえるまでに追われていた男たちが追手だとしたら、その考えは間違いではないだろう。
「おい、車ってどうすんだよ！？」
「どうするもなにも――。向こうがそれだけ本気ってことよ！」
「けどよ、このまま真っ直ぐ逃げても追いつかれるだけだぞ！？」
走りながら会話をしているミユキたちの足はとてつもなく速い。油断をするとみるみる悠生との差がひらいてしまう。だから、悠生は疲れても走る足を止めるわけにはいかない。
「はぁはぁ……」
（なんだよ、こいつら。めっちゃ足速いじゃねえか――っ）
必死に追いかけている悠生だが、その差は詰まらない。真っ直ぐな平坦の道で、女の子にも走ることで負けてしまう悠生は少しいらつく。
（だいたい追手ってなんなんだよ――。なんで俺はこっちの世界に飛ばされたんだ！？）

「はぁはぁ……はぁはぁ……、わけわかんね――っ」
状況が理解できない悠生はわけも分からずに、ミユキたちの後を追うように走っているのだ。
（もう少しで聞けるとこだったのに……）
ビルが爆発する前に聞こえていたミユキの声が頭をよぎる。彼女は間違いなくユウキが『時空扉（タイム・ドア）』を使った理由を言おうとしていた。その言葉は爆発が起こったことで途切れたが、何か深刻なことが起こっていることは悠生にも想像がつく。しかし、それに自分が巻き込まれていることが理解できないのだ。
「なんだってんだよ……っ！」
煮え切らない怒りがふつふつと湧き上がってくる。それは放出する方向も定まらない怒りで、悠生自身もどうしようもなかった。
なぜこの世界に飛ばされたのか、なぜ追いかけられているのか、誰が追いかけられているのか、なぜミユキたちと一緒に逃げなければならないのか。悠生には分からないことがいくつもある。
しかし、頭にはミユキの「そのまま信じて」の言葉が何度も反芻（はんすう）される。
「くっそぉおおおおおっ！！！　速すぎだろ、おまえらぁ！」
その全てのうっぷんを晴らすように、悠生は大声を上げた。
「……？」
「？」
背中にかけられた大声で、悠生の前を走っていたミユキたちが立ち止まる。
「はぁはぁ、速すぎるってお前ら……」
立ち止まったミユキたちに追いついた悠生は膝に手を当てて、肩で息をしている。その顔にはびっしりと汗が流れていた。
「なんだよ、お前が遅いんだろ」
「ちょ、タクヤ――っ！」
口調が悪いタクヤをたしなめるように言うミユキだが、タクヤは口を閉じない。

「だって、そうだろ？　こっちは必死こいて逃げてんのに」
「そうだけど、言い方ってものが……」
「なんだよ、トロトロしてるのは事実だろうが！　何のために俺らがこうして――」
「だから、やめなって！」
さらにいらだつように口調を荒げるタクヤをミユキは必死に止める。
「こうしてる今もあいつらは近付いてきてるのよ！？　ここで言い争いしてても仕方ないでしょ？」
（あいつら……？）
まだ中腰で呼吸を整えようとしている悠生は、ミユキの言葉に敏感になる。
これも何度目だろうか。悠生は自覚がないが、この世界のことは分からないがミユキの話には重要なことが隠されていると思っている。
「だとしたら、もっと先を急ぐべきだろ？」
「そうだけど、私たちだけが先を急いでも仕方ないでしょ？」
「だけど――」
引き下がろうとしないタクヤだが、そこに悠生が割って入る。
「な、なぁ！　一つ教えてくれっ。追手が来てるって言ってたけど、誰が追われてるんだ？　それに追手ってなんだよ。それを最初に説明してくれてもいいだろ？」
意味も分からずにただ走るのはごめんだ、と状況の説明を悠生は求める。
「……」
「おまえ――」
「頼む。俺には並行世界（パラレルワールド）ってだけでも頭がパンクしそうになってるくらいなのに、追手が来てるだとか頭がついてけねえよ」
身ぶり手ぶりを大きくして、悠生は必死に訴える。
半壊の建造物が均等にブロックに分かれている街並みの通りのど

真ん中で、悠生たちは立ち止っている。そこからも、今も燃え盛っているビルが見える。悠生はそのビルのほうへ視線を向けて、
「あれと俺たちが逃げていることは間係あるんだよな！？」
「……」
「なぁ？　教えてくれよ！　なんで逃げてんだ！？　誰が、なんで追われてんだ！？」
一向に自分の疑問が解消されない悠生もタクヤ同様に声を荒げる。その言葉にタクヤはさらにいらいらしてしまう。そして溜まった怒りを放出するように、
「ほっんとおまえ頭悪いな！　追われてんのはお前に決まってんだろうが！！」
「え……っ？」
タクヤの言葉に、悠生は驚いた。その表情は時間が止まったように顔が凍りつく。その表情を見て、タクヤも驚く。
「ほんとに気付いてなかったんだな――たく……っ。こっちの世界のユウキが『時空扉（タイム・ドア）』を使って世界を超えたのも、追われてるからに決まってんだろ！　お前が代替としてこっちの世界に来たのも、そのことを奴らに知られないためにだよ！　俺らがこうしてお前を匿（かくま）って、こっちの世界のことを教えて助けようとしてんのも、まだ奴らがユウキが時空を越えたことも知らないからだ！　つまり、奴らはお前がこっちの世界のユウキだと思って今も追いかけてきたんだよ！！！」
「な！？」
（俺が狙われてるって――）
立て続けに言われる事実に、悠生はさらに驚愕（きょうがく）する。顔面を蒼白にさせている悠生は、その事実に言葉を紡げない。
自身のいらつきを吐きだしたタクヤはすっきりとしたようで、ミユキのほうに顔を向ける。
「はぁ――」
（言っちゃった――か……）

その視線の意図を汲(く)み取るように、ミユキはタクヤの言葉を引きとるように話を続ける。
「話してなくてごめん……。というよりも、その前に追手が来ちゃったんだけど。あなたがこちらの世界に来た理由は、半分はタクヤの言う通りよ。事後報告みたいになっちゃってごめんなさいね」
申し訳なさそうにミユキは言う。その声色に、悠生は憤(いきどお)りをぶつけただけのことに気付く。それは仕方のないことだったが、それが助けてくれようとしている人たちへのひどい所業に思えたのだ。
「い、いや――」
それまでの勢いを失ったような、小さな声で悠生は返事をする。
「教えてくれてありがとう……」
そう小さく言うことしか出来なかった。
（俺は代替品……）
その一言が悠生の胸を抉(えぐ)る。
それは、この世界での悠生の存在意義だ。悠生の知らないところで行われた時空移動は、悠生を大きな時空の流れに巻き込んでいる。そこに悠生の意思は汲み取られていない。あくまでも受け身でしかない悠生はその流れに身を任せるだけであり、流れに逆らうことができない。それを悠生は自ら証明してしまっている。
「……」
その悠生に対して、ミユキはかける言葉がみつからない。
無理矢理巻き込む形で悠生をこちらの世界に連れてきてしまったことには、無論申し訳ない気持ちがある。ユウキの時空移動は最終手段だったとしても、その代価は同じＤＮＡを持つ人物をユウキの代わりに危険な目に合わせることだ。その人物――悠生の意思も気持ちも考えずに。
「あなたにはどれほどの償いをしても許されないことは私も理解している。無理矢理こちらの世界に連れてこられた怒りをあなたが抱いても不思議ではないし、私たちが信用できないことも分かるわ」
それでも、とミユキは言葉を続ける。その声に万感の思いを込め

て。
「あなたは私たちが守る。あなた――いえ、あなたとユウキが生きていることが私たちの世界の未来になるかもしれないの」
真摯（しんし）な目は真っ直ぐと悠生の目を捉える。
「世界の未来……？」
そして、その言葉の重さを悠生は何となく理解する。説得や同意を得るために、そのような言葉を使う人はいないだろう。そこには何か、もっと大きな理由があるはずだ。その理由が、先ほど感じた――こちらの世界で起こっている何か深刻なことと繋がっているような気がした。
「えぇ。私も全てを知ってるわけじゃないんだけど……。それについては逃げきってから話すわ。タクヤも言ったように、今は逃げることが最優先よ。あなたが捕まることだけは避けないと――」
そう言って、ミユキは先を急ごうとまた前を向く。ゴールがあるかも分からないマラソンに向かうようで悠生は少し嫌な顔をするが、追われているのが自分と分かった今はいやいやと愚痴も言うわけにはいかない。
「さぁ、行くわよ――」
悠生の決心したかのような表情を見て、ミユキは掛け声をかける。そしてミユキを先頭にまた走りだそうとしたところに、
「おっと、どこに行くんだ――？」
血の気に飢えたような、貪欲な声が聞こえてきた。
「……っ！？」
「なんだ――？」
不意に聞こえてきた声に、ミユキとタクヤがそれぞれ驚きながらもすぐに構える。声が聞こえてきたのは、これから行こうとしていた方向からだった。
聞こえてきた声と同時に、目の前の壊れた信号機が大きな音と強烈な炎にまかれながら倒れていく。そして、あっという間に周囲は燃え盛る炎に囲まれてしまった。

「やっと見つけたぜ、ユウキよォ。ここでお前を殺しても文句はねえんだろうなァ！？」

その炎の壁の中から、獲物を見つけた狩人のように、また血肉に飢えたライオンのように鋭い眼光を飛ばして一人の少年が姿を見せる。

第一章　世界が交わった時　？

空気を焼きつくすような炎が、今にも枯れ果てようとしている街路樹の命をさらに縮めようと盛んに燃えている。その炎は全壊あるいは半壊した建物ばかりの街の大通りを走っていた悠生（ゆうき）たちを、これ以上どこにもいけないように囲っている。

その炎に囲まれた悠生たちは苦虫を潰すように周囲を囲っている炎を睨（にら）んでいる。その炎の壁から現れた一人の少年――トモヤがさらに口を開く。

「…ったく。あっちこっち逃げてくれてよォ。こっちの労力をこれ以上割かせないでくれよな」

貪欲な目をしているトモヤの表情は、血肉を求めている肉食獣でしかない。そのトモヤの身体は、地上二メートルも燃え上がっている炎の中を歩いたにも関わらず火傷を負ったわけでもなく着ている服も燃えていない。

（『覚醒者』か――）

その服と身体を見て、悠生を除いたミユキたちはトモヤが『覚醒者』だと気付いた。

「おい、ミユキ……」

「うん、分かってる。向こうが雇った『覚醒者』でしょうね」

タクヤの耳打ちに、ミユキは頷いて答えた。『覚醒者』を出してきたということは、さらに本気になったということだろう。

「さて、俺の狙いは分かってるよなァ？　そっちがユウキを差し出すなら、他の奴は見逃してやってもいいぜ？」

交渉を行ってくるトモヤだが、それに乗るミユキたちではない。無論トモヤもそれを理解しているだろう。それでも、それがトモヤのやり方なのだ。その形式あるいはルーティンを崩したくないのだろう。

「おい、何勝手なことを言っている？」
そこに、スピーカーを介した声が聞こえてきた。その声は、やはり先ほどからユウキを追いかけている男の声だ。
聞こえてきた声に驚いたミユキたちはどこから話しているのかと周囲を見渡すが、どこにもスピーカーの声の男の姿は見当たらない。
「すでに、我々の存在と計画の一端を知ってしまったのだ。ユウキ以外は殺せ」
「……っ！？」
スピーカーを介して聞こえてきた言葉の内容に、悠生たちは目を開いて驚いた。その声はあまりにも平淡で感情がないものだった。
（本気で殺す気か……）
その本気を受け取ったミユキは、この状況が危機的だと改めて認識する。『覚醒者』の数では圧倒しているが、まともに正面からぶつかったとしても必ず勝てるという算段があるわけでもない。
「なんだよ……ったく――。俺なりのやり方ってのも認めてくれてもいいんじゃねえのか、シンジの奴はよォ」
スピーカーから聞こえてきた声を聞いてトモヤはシラけたとでも言うように、声のトーンを落とした。
（シンジ？）
トモヤが言った名前にミユキたちは眉をひそめる。その名前が指しているものをうっすらと考えるが、それを確認し合う時間すらもトモヤは与えない。
「しゃあねえ。さっさと仕事を終わらせてもらうぜ――っ！」
「まず――っ！」
トモヤは一度の跳躍で数メートルの距離を一気に縮めてくる。その動きを見て、ミユキはその狙いを思い出すが、それよりもトモヤの突撃の方が速かった。トモヤあるいはスピーカーの声の男たちの狙いはあくまでもユウキである。ユウキがすでに時空移動したことを知らないトモヤの突撃も真っ先に悠生を狙ったものだった。
「がっは――っ！？」

そのタックルと呼ぶにはあまりに衝撃の多い突撃を受けた悠生は、為す術もなく吹っ飛んでしまう。
「一発で終わると思うなよ！！」
一撃目を悠生に与えたトモヤはさらに追撃をかけようと右手の中にテニスボール大の火球を作りだす。手のひらに作りだされた火球を見たミユキが、悠生を守るために二人の間に割って入る。
「……っ！　まずお前から殺ってやろうかァ！！」
割って入ったミユキにもトモヤは動揺を見せない。それどころか、さらに獰猛な表情を見せたほどだ。
作りだした火球を悠生に対してではなく、ミユキに対して放つ。その火球は鳥が飛ぶような速さでミユキへと一直線に飛んでくる。
自身へと飛んでくる火球をミユキは風で押し返そうと、手のひらから風を作りだす。しかし、火球はその風に煽られて、さらに肥大化していく。
「……っ！？」
自身が放った風が火球を押し返すどころか、火球への助力になったことにミユキは驚いて身動きが固まる。
「ミユキ――っ！」
飛んできている火球をかわすための行動が出来ないでいるミユキを、タクヤは横っ跳びで地面へと押し倒すことで回避させた。地面へと倒れたその二人の上を肥大化した火球が飛んでいく。
「あ、ありがと、タクヤ」
「意識を集中しろよな。ぼうっとしてるんじゃねえよ！」
火球を自力でかわすことが出来なかったミユキにタクヤは叱咤(しった)した。それは戦闘の意識が低いミユキの意識を取り戻させる。
「ご、ごめん……」
「謝ってる場合じゃないだろ！」
さらにタクヤはミユキに対して激しく言った。その言葉を受けたミユキは眼に力を取り戻して、もう一度トモヤを睨む。
「『風』系の『覚醒者』か――」

そのやり取りをじっと見つめていたトモヤは言葉遣いから受ける印象とは打って変わって、冷静にミユキの力を分析していた。そしてミユキの力を『風』系のものと判断した。
（『風』の力はやっかいじゃあない。ユウキの前に立ちはだかるなら、すぐ殺して――）
そのように考えたトモヤだが、その考えに反してミユキは全く別の行動を取る。
悠生を守るためにトモヤの前に立ちはだかるのは同じだったが、その口から出た言葉はトモヤにとって意外なものだった。
「ここは任せて！！」
眼に力を取り戻したミユキはそう言って、一人でトモヤの前に立ったのだ。
「でも……」
ミユキの力強い言葉でも、悠生は逡巡（しゅんじゅん）してしまう。『炎』系の『覚醒者』であるトモヤが強いことは悠生にも分かる。そのトモヤをミユキ一人で戦わせることに罪悪感を抱いているのだろう。
「いいから！　先に行って――っ」
そう言って、ミユキは身体全体で風を生み出し、周囲の炎の熱を利用して上昇気流を作りあげる。
「……！？」
（ユウキをここから逃がすつもりか――っ！）
ミユキの行動の真意に気付いたトモヤは、させまい、とミユキに突撃を行うが、それもトモヤが作った炎の壁と同様にミユキが作った竜巻の壁に阻まれる。
「くそ――っ！！」
竜巻の壁に阻まれたトモヤは、その先にいるミユキを強く睨みつける。しかしミユキは涼しい顔をしているだけだ。
「いいんだな？」
そのミユキの言葉を聞いたタクヤは確認の言葉を告げた。
「うん。今大事なことは何か分かってるでしょ？」

「わかった」
強いミユキの意思を確認してタクヤは任せろ、と頷いた。そして、ミユキが作りだした上昇気流に乗る。
「お前も来るんだよ！」
そう言って、上昇気流に乗ったタクヤは悠生も手を引いて、同じように上昇気流に無理矢理乗せる。その後をアオイも続いていく。
「こっちは任せて。悠生は必ず守るから」
「うん。信じてるよ、アオイ――っ！」
ミユキとアオイは固い約束を交わした。それぞれが為すべきことをしっかりと実行するために。それが、これからの世界のためになると信じて疑わずに。
「ちょ……、ちょっと、あんたら――」
上昇気流に乗った後も悠生は何かを言おうと口を開くが、それすらもタクヤは無視して、上昇気流を利用して高く高く飛びあがっていく。その勢いは止まることを知らなくて、気付いたら半壊状態の建物の屋上まで飛びあがっていた。
「建物の屋上へ飛び移れ！！」
その高さまで上昇気流で飛びあがったことを確認したタクヤが、悠生とアオイの二人に言った。
「こ、この距離を……？」
しかし、アオイは躊躇（ためら）いの声を上げた。
見ると、上昇を続ける風に乗っかっている状態の悠生たちから、建物の屋上までは間に二メートル近い距離があった。助走もなしに、その距離をジャンプすることはアオイにはあまりにも難しい。
「くそ……」
（どうする――）
間にまたがる二メートルほどの距離を見て、タクヤは下唇を噛みながら、何か良い方法はないかと考える。
男であるタクヤはこの距離を飛ぶことに、それほど苦は感じていない。それは、下の状況を見つめている悠生も同じだろう。ミユキ

に、悠生のことを任せろ、と言ったタクヤはここで立ち止まっているわけにはいかない。
「悠生、お前は飛べるよな？」
「え？　あ、あぁ……」
いきなりタクヤに聞かれた悠生は、意味が分からないなりにも頷いた。
「それなら先に飛べ！」
頷いた悠生に、タクヤはそう言った。
「？　どういう――？」
「先に飛んでそこで待ってろ。俺がアオイを投げ飛ばすから、それをお前が受け止めるんだっ！」
そう言ったタクヤの言葉に、
「……っ！？」
「た、タクヤ……！？」
悠生とアオイがそれぞれ驚いた。
しかし、タクヤはいたって平然としている。アオイが無事に建物の屋上に飛び移るにはそれしか方法がないと踏んだのだろう。
「このままここでじっとしてることもできない。上昇気流は今も空へと上っていってるし、ここは建物から格好の的になる。相手はあの『覚醒者』だけじゃないんだ！　ここで迷ってるわけにはいかないだろ――っ」
その言葉にアオイも「そうだね」と同調する。二人のその決意を聞いた悠生は、まだ決断できずにいた。
「で、でも……」
「今が危険な状況だっていい加減分かれよ！！　ここでぐちぐちしてる時間はほんとにないんだよ」
そのような悠生に対して、タクヤがきつく言った。その目も次第に鋭くなってきている。
「わ、わかったよ……」
そのタクヤの視線を受けて、悠生はしぶしぶといった感じで返事

をした。そして、その場で勢いをつけるように大きく両手を振って、建物の屋上へと飛び移る。
「痛っ……！？」
なんとか建物の屋上から建物の屋上へと飛び移った悠生は、着地の際についた両足にジーンとした痛みが走り、痛みに顔を歪めた。
その痛みに耐えた悠生は、まだ上昇気流に乗っているタクヤとアオイへ振り返る。
「い、いいぞ」
「わかった。絶対にアオイを受け止めろよ！」
悠生が建物の屋上へ飛び移ったのを見て、タクヤはアオイの腰を持って身体を持ち上げる。不意に身体を持ち上げられたアオイは恥ずかしそうに頬を赤く染めて、顔を背けている。
「上手くいくと信じてろ……！」
「う、うん」
アオイの返事を聞いたタクヤは、アオイの身体を持ち上げている腕にさらに力を振り絞る。そして、ハンマー投げよろしく大きく振りかぶってアオイの身体を空中へと投げ飛ばす。
「き、きゃぁあああああああ――っ！！！！」
タクヤに投げられたアオイは、その反動から大きな悲鳴を上げた。
その身体は、高さ一〇メートル以上はあるだろうという空中に投げだされている。そしてふわりとした絶叫マシンで感じる特有の浮遊感がアオイの全身を包み込む。
（こ、こい――っ！）
こちらへ向けて飛んできているアオイの身体を受け止めるために、悠生は両手を大きく開いて構えている。しかし、その足は柵もない建物の屋上ぎりぎりの所にあるため、がくがくと震えていた。
「絶対に受け止めろよ！」
その悠生の反対側で、アオイを空中へと投げ飛ばしたタクヤは大声を上げて悠生に言っている。
二メートルほどの距離をアオイは間違いなく飛んでいる。あとは

悠生が上手くアオイの身体を受け止めるだけなのだ。しかし一歩でも踏み外せば、悠生もアオイも地上へ向けて真っ逆さまである。その恐怖に打ち勝て、とタクヤは暗に言っているのだ。
その声を聞いて、悠生の眼にも真剣さが宿る。その目は真っ直ぐアオイの視線へ向けられていた。
そして、アオイの身体が悠生のもとへと飛んでくる。
「ぐふ――っ！？」
アオイの身体を受け止めた悠生は、腹部に強い衝撃を受けて息が詰まってしまう。その衝撃で力が緩みそうになるが、それも悠生は震えながら立っている足を踏ん張ることで、なんとか踏みとどまる。
いくら少女の体重でも二メートルほどの距離を飛んできているので、その衝撃はやはり大きい。その衝撃を受けた悠生の足は緩みそうになる力を踏ん張っても、悠生の身体の重心をぐらつかせる。
「や、やば――」
足が前後にぐらついたことに、悠生は最悪の事態を想像して蒼白した表情になった。そこにタクヤの声が届く。
「そこで踏ん張っとけよ！」
聞こえてきたタクヤの声を悠生は意識した瞬間に、悠生の目の前に影が差す。それはタクヤの身体だった。タクヤもすぐに上昇気流から飛び移ってきたようだ。建物の屋上へ飛び移るために、上昇気流から飛んだタクヤは、建物の屋上の端でアオイを抱えたまま身体をぐらつかせている悠生を、後ろへと押し倒す。
「ぐ……！？」
「がっは――」
アオイを抱えた悠生とタクヤは衝突して、そのまま建物の屋上へ倒れた。アオイとタクヤの二人が圧(の)し掛かるかたちに倒れた悠生はさらに呼吸が詰まってしまうが、地上へ落ちていくことだけは免(まぬが)れた。
「はぁはぁ……。ほら、上手くいったろ？」
立ち上がりながら、タクヤは結果オーライといった感じで調子良

さそうに言った。
「ま、まぁそうだけど――」
それにはアオイも頷くが、空中に投げだされるという恐怖は簡単には拭えない。建物の屋上から地上を見下ろすとかなりの高さだった。この高さで二メートルも飛んだのだと思うと身体がすくんだ。
アオイとは逆に、悠生たちが無事に飛び移れたこと地上から確認したミユキは、やった、というような笑顔を見せている。
（これで後は無事に逃げてくれるのを祈るだけ――ね）
そして、自身は目の前にいるトモヤへと視線を戻す。
そこに、
「何をやってる、トモヤっ！！」
炎の壁で囲っておきながら、みすみす悠生たちを逃がしてしまったトモヤに、スピーカーの声の男が激昂（げっこう）した。その怒りは声の質からもはっきりと分かる。
「あ～、うっさいなァ……。逃がしちまったのは俺が悪いが、こっちは取り込み中だ。こいつを速攻で殺してから、追いかければいいだろ？　それまではそっちが勝手においかけとけ」
その怒号を聞いても、トモヤの表情は揺らがない。目標の相手を瞬時に悠生から、ミユキに変えているのだ。
その目は先ほどまでの獰猛さを再び見せつけてくる。
「……わかった。そいつは任せたぞ、ここで始末しろ！」
「はいはい、了解したぜ」
当初の計画が上手くいかなかったことにいらだちを見せているスピーカーの声の男を放っておいて、トモヤはミユキに対して牙をむく。
それは炎で生物を容易く殺す――人知を超えた力だ。

第一章　世界が交わった時　？

またしても悠生（ゆうき）は廃れた半壊状態の建物ばかりの街を走っている。絶え絶えになっている呼吸を整える暇もないほどに走り続けている。その視線は何度か走ってきた道を振り返っている。

「何度も後ろを確認しない。あなたが今心配することは自分の身の安全だけ――よ」

何度も振り返っている悠生に対して、その後ろを走っているアオイが注意する。アオイのその顔はどこか焦っているようで、悠生は自分の世界の葵が見せたことのない表情だと、不謹慎にも思ってしまった。

「でも……」

「でも、もなし。今は走ることに集中して。ゴールなんてあるかも分からないんだから――」

アオイの、その表現の仕方に悠生は戸惑（とまど）う。

「ゴール？」

「えぇ。無事にゴール出来るといいね」

走りながらもアオイはニッコリと笑顔を見せる。その時、一瞬だけアオイの真剣な表情が和らぐ。

その表情を見た悠生は照れたように振り返っていた顔を再び前へと向ける。しっかりと前を見据えて、ゴールというただ一つの終着点へ向けて走るために。

「アオイ！　奴らは追ってきてるのか！？」

その二人の前を走っているタクヤは、一番後ろを走っているアオイへ大声で尋ねた。

「ちょっと待って」

タクヤの質問に、アオイはそう答えた。そして、彼女は片目の瞼（まぶた）を閉じる。それがアオイの『覚醒者』としての力の発動条件なのだ。

片目を閉じたアオイは視界を共有できる対象を半径三〇〇メートルの中から探し出す。
数秒後、その範囲内にいた鳥にアオイは視界共有を行う。そうすると、閉じたアオイの片目に鳥が見ている視界が映し出される。
「……追いかけてきてるっ！　距離は正確にわかんないけど、左後方から、数は一〇人程度。二台の装甲車に乗ってるわ――！！」
鳥の視界を共有して、発見した追手の数と方角をアオイはそのように報告した。
「ち……っ、また向こうは車かよ」
その報告を受けて、タクヤは苦いような表情で反応した。その反応は先ほどのミユキのものと同じだ。それは二人とも本気で逃げることを考えているからだ。
「向こうは車が通れる幅がある道しか通れないんだから、こっちは建物に隠れるとかは？」
走りながら逃げる道を探しているタクヤに、アオイはそう提案をした。
それは妥当な判断だ。装甲車と言え、それが整備された道であれ砂利道であれ、走れる幅がある所しか走ることはできない。その装甲車が走ることができない幅の道や建物内に逃げることは最良の手だろう。
「それしかない――か……」
きょろきょろと十字路にさしかかるたびに左右の道を遠くまで見ているタクヤは、アオイの提案を受けいれる。
「なら、こっちだ！」
アオイの提案を受けたタクヤは二人を先導しながら、左の路地へと急に方向転換をした。そのまま走っていくタクヤを、悠生とアオイは必死に追いかける。
（なんで……俺、起きてから走ってばっかり……）
前を走っているタクヤを追いかけながら、悠生は再び同じような疑問を抱いた。もう一度現状の理解を求めたい悠生だが、タクヤの

走る速度が速すぎるためついてくのが精一杯で尋ねることが出来ないでいた。
「はぁはぁはぁ……ったく――」
（だいたいミユキを置いてきたのだって、なんで――）
自分一人では何も決断あるいは行動できないでいる悠生は、それらの真意が分からない。それらの困惑が解けないまま、悠生は指示されたまま走っている。それは、こちらの世界で目が覚めてからの悠生の状況と何ら変わっていなかった。
それまでの大通りから左の路地へ入ったタクヤはそのまま数十メートル走ったところで、一つの建物の中へ入っていく。
「この建物に一時隠れるぞ」
そして、悠生とアオイに言った。
「うん」
「わかった」
それぞれ頷いた悠生とアオイも、タクヤに次いで建物の中へ入っていく。
悠生たちが入った建物はかつて企業のオフィスが設けられていた複合オフィスビルのなれのはてだった。その一階には、まだオフィスビルとしての名残のように各階に入っている企業名が書かれたインフォメーション板が廃（すた）れながらも残っていた。
「どこに隠れる？」
そのインフォメーション板を見ているタクヤにアオイが尋ねた。
「……どこかに鍵がかかってない部屋があるかもしれない。そこに身をひそめよう」
インフォメーション板を見ながら言ったタクヤは壊れたエレベーターではなく、その隣にある非常用の階段で上の階に上がっていく。その後を悠生とアオイも追いかける。
複合オフィスビルは電気が通っていないため、建物内がかなり薄暗く、太陽が昇ろうとしている街の明かりも建物内には入ってこない。この複合オフィスビルも半壊状態であり、廊下の壁はところど

ころ壁が剥(は)がれ落ちていたり、廊下に瓦礫が落ちていた。そのため手探りでゆっくりと歩くしかなかった。
（ビルがこんな状態になるなんて……）
その建物内を歩いている悠生は、悲惨な状態になっている建物内部を見て驚いていた。悠生がいた世界ではこのような状態の建物を生で見ることはなく、地震や戦争のニュースをテレビで見ることくらいしかなかったのだ。
二階に上がってきたタクヤは廊下を歩いているうちに見つけた一つのドアの前に立っていた。タクヤに追いついた悠生とアオイもドアの前に立つ。
「ここのドアが開いてる、というよりも壊れてる。ここに隠れていよう。あまり上の階に行っても、見つかった時ビルから出るのに苦労するからな」
「うん」
タクヤの言葉に二人とも賛同して、壊れたドアから部屋の中に入っていく。
その中は小企業のオフィスとして使われていたようで、機能を失った今も様々なものが残されていた。企業の書類が無数に入っているだろうファイルがまとめられているロッカーや複数並べられているオフィス机も壊れて使い物にならなくなっているだろうが、そのまま残されている。
「争いが起こったときに、身一つで逃げたんだろうな……」
その状況を見て、タクヤはぽつりと呟く。その声は悠生とアオイには届かなかった。二人ともオフィスの残骸を見て、そのまま残された椅子に腰を落としている。
「ここで一息つこう」
その二人にタクヤは、休憩だ、と言った。
「追ってきてる奴らが俺たちが隠れたことに気付かなければ、また出発だ。少しでも早くここからは出たほうがいい」
「う、うん」

タクヤが言ったことにアオイは頷いたが、悠生にはもやもやとした感情が依然として渦巻いていた。その感情は、冷静にこれからのことを話しているタクヤに自然と向けられる。そのタクヤはアオイと何らかの話をしている。

（もう我慢できねぇ……）

ふつふつと煮え切らない思いが滾（たぎ）ってきている悠生は座っていた椅子から立ち上がって、タクヤの前まで歩く。

「どうした？」

悠生の突然の行動にタクヤは不審を感じて、尋ねた。

「あんたはここから少しでも遠くに行くことしか考えてないのか！？」

「？　そうだが――？」

だからどうした、とタクヤは再度尋ねる。その言葉に悠生の引鉄が引かれる。

「なんで、ミユキだけを置いてきたんだよ！！」

ミユキだけをあの場に置いて逃げるという手段を取ったタクヤに悠生は激昂（げっこう）して、タクヤの胸ぐらを掴む。

「……」

その悠生の行動を見ても、タクヤは何も言わない。鋭い視線で睨んでいる悠生の目を真っ直ぐ見つめているだけだ。

「なんとか言ったらどうなんだよ！」

何も喋らないタクヤに悠生はさらに突っかかる。その強い口調でもタクヤは動じない。

「ちょ、あなた……」

その悠生を見てアオイがなんとか止めようと恐る恐る声をかけるが、それでも悠生の怒号は止まらない。

「葵は黙っててくれ。こいつの決断が気に食わねえんだよ」

「ちょ、ちょっと――」

一向に血の気を抑えようとしない悠生に対して、アオイはもう一度落ち着かせようと声をかけようとするが、

「アオイ、いい」
と、タクヤがそれを止める。
「……？」
アオイはタクヤの真意が分からずに首をかしげた。アオイの言葉を遮ったタクヤは、悠生に負けないほどに鋭い視線で悠生を睨みつける。その視線を受けて、悠生の勢いもいくらか削げる。
「な、なんだよ……」
その声もタクヤの視線を受けて、少し震えている。それまでの怒号も急に熱を失ったようだ。
「俺たちがあの場に残って、何の役になった？」
「……え？」
ぽつりと呟いたタクヤの言葉が上手く聞き取れなくて、悠生は素っ頓狂な声をあげた。その顔からも鋭い視線が消えている。タクヤの胸ぐらを掴んでいた手も離されている。
一方で、タクヤの顔は次第に恐さを増していっている。
「だから！　俺たちが残って何が出来た！？　俺とアオイはたしかに『覚醒者』だが、戦闘向きの力じゃない！　けど、あいつは違った……っ。お前も見ただろう！？　あいつは手から炎を出してたっ。身体中から火を吹けるんだ！！」
その言葉は止まらない。
「そんな奴相手に、何の力も持たないお前に何が出来るんだ！？　同じ『覚醒者』の俺たちも殴り合いじゃ歯が立たないんだ！　そんな奴相手にしてるミユキの所に残ったって、俺たちはミユキの足手まといにしかなんねえんだよ――っ！！！」
止まらないタクヤの言葉は窓ガラスがなくなり吹きさらしの部屋の中で響きわたる。反響しそうなほどの声に圧倒された悠生は言葉を発することができない。
「……」
悠生に負けず劣らず大声を出したタクヤに、悠生は何も言えなかった。

「分かれよ！　なんでミユキが俺たちだけ先に逃がしたのか、なんで一人だけあの場に残ったのか――っ。その意味も理解してない奴が、意気がったこと言ってんじゃねえ！！」
　タクヤの言葉が、強く悠生の脳を揺さぶる。ミユキの思いを悠生はその全てを理解していなかった。いや理解していないわけではない。ミユキの、必ず守る、という言葉を悠生は聞いて、悠生はミユキのことを少しは信じている。
　強い相手を前にして、一人で残ったことが理解できないのだ。
「俺もアオイも、あの場にミユキを残したことを何とも思ってないと思うなよ――！！　俺だって出来るならあの場に残って一緒に戦いたかったさ。それが出来るならな！」
（……！）
　止まらない怒号を上げているタクヤの声が震えていることに、悠生は気付いた。そこにタクヤの思いが込められている。
　その思いはアオイも同じなのだろう。アオイもじっと悠生を見つめている。
「私たちはミユキに、あなたを守ることを約束した。狙われているのはあなたで、一番危険なのはあなただから。その約束を反故（ほご）にすることはできないわ。私たちの決断も理解してほしいの」
　アオイは、その思いをしっかりと言葉で伝えようとしている。その言葉を受けた悠生は俯いてしまう。
「ご、ごめん……」
　そして、小さく言った。
「分かってくれれば、それでいい。俺たちは何よりもお前を守らなければいけないんだ」
　俯（うつむ）いた悠生に、タクヤはそう言った。
　その言葉にも、アオイと同様に自身の思いを言葉で伝えようとしている意思があった。それに気付いた悠生はそれまでの自分の意識の低さあるいは理解の弱さを思い知る。それはこれから、悠生がこの世界にいるためには重要なものだった。

第一章　世界が交わった時　？

空へと上っていく暖かい風はすでに消えてなくなり、再び辺りには赤々と燃えている炎を除いて、静寂が訪れていた。
風の音も、虫や鳥の声も、人が生活している音も聞こえてこない。聞こえてくるのは二人の『覚醒者』が対峙している緊迫感からくる呼吸音だけだ。先ほどまでこの場にいた悠生たち、およびスピーカーの声の男――シンジとその部下たちもいない。
「仲間を逃がして、お前だけ俺とぶつかる……か。そんなに大事なんだな、ユウキってやつが」
日の出前の澄(す)んだ独特の空を見上げて、トモヤはミユキに対してそう言った。その視線は悠生たちがいた建物の屋上にも向けられている。
「あなたに教える必要はないわね」
じっと視線を上に向けているトモヤに、ミユキはきっぱりと言った。そんな話をしてる場合じゃないぞ、と。
「そうだな。……しかし、俺には重要なことだ。大事にしてる男が目の前で燃えカスになるのをお前に見せてやりてえんだよ」
「外道な趣味ね。それを見た私の表情でも見たいのかしら？」
トモヤの言葉を聞いたミユキはブルッと身体を震わせる。トモヤの口調や態度を見ていれば、それを平然とやりかねないという予想がたつ。
「当り前だろう？　ただ殺すことに何の意味がある――？」
しれっとトモヤは言った。
「……あなたは命を絶やすことに意味を求めているの？」
「当然だ！　殺戮(さつりく)衝動でヤってるわけじゃねえぜ？　まぁ、昔はそうだったがな――。今はそれじゃ飽き足んねえだよ。そいつの大事

なモン奪ってやった表情(かお)見て、悲痛な叫びを聞きながら殺してえんだ」
大きく口を開けながら、興奮したようにトモヤはまくしたてる。
その声と言葉を聞いて、ミユキはさらに身体の震えを大きくさせる。
「最低な人間なのね、あなた。人を殺すことに何の罪の意識もないの？」
見下したように言うミユキだが、
「そんなもん持ってどうなんだ？　人を殺すことに抵抗感を覚える、とでも？　そんな綺麗事なんて聞きたくもねえよ！！」
トモヤは一蹴する。そして、我慢ならないというようにミユキに対して再度突撃をしかけた。
「……っ！？」
しかし、予知していたかのようにミユキはあっさりとそれをかわす。未だに震えている身体のそれは、恐怖に対するものではなく武者震いだったのだ。
「どういう動機であなたが人を殺すのかは知らないが、私は死ぬわけにはいかない――っ。ここで倒れるのはあなたのほうだ！」
ミユキは強くそう宣言した。
「ほざけ、女ァ！！」
それを聞いたトモヤは吠えて、両手に作りだした火球を放ってくる。
トモヤが放った二つの火球は先ほどと同じテニスボール大のものだが、その速度が今までよりも断然に速い。
（速い――！？）
火球の速度が先ほどのものより速いことにミユキは回避行動が遅れる。
「もらった――っ！」
ミユキの反応が遅れたことに、トモヤは勝利の声を上げた。
「まだ、よ！！」
しかし自力での回避ができないと判断したミユキは、自分が立っ

ている地面に上昇気流を生み出す。その風に乗ったミユキは一瞬のうちに三メートルほどの空中まで上がり、火球をかわす。
「な……！？　逃がすかァ！」
空へ飛んでかわしたミユキにトモヤは一瞬驚くが、すぐに追撃の火球を放つ。
その火球も速度とサイズは先ほどのものと同じだ。トモヤは力をセーブしていたわけではないだろう。しかし、ミユキには最初の火球よりも速度が上がっていることに疑問を覚える。
追撃の火球も、さらに空高く上昇することで難なくミユキはかわす。
（火球が主力攻撃なら、それほど脅威じゃない……っ！）
火球をかわしたミユキはそのまま反撃に出る。両手を広げて周囲の風を集め、それを胸の前で細く長く収束させていく。
（風の槍！？）
トモヤがそう思ったように、ミユキの手に集められた風は周囲の埃や落ち葉などを纏い、その形が槍だと分かる。風の攻撃は風圧によるものだ。風の槍の先端は周囲の風を集めてさらに凝縮されている。その攻撃力は身体が打撃で済むようなものではないだろう。
「くらえぇえええええっ！！！」
作りだした風の槍を、ミユキは投擲（とうてき）のように投げつける。
風が壁として襲ってくるのではなく一本の槍として襲ってくるのだ。しかし、それはやはり風であり、風速二〇メートル近い強風だった。
「くそ……っ」
自身が放った火球をはるかに超える速度で迫ってくる風の槍を、トモヤは地面を横っ跳びで転がってかわす。
標的を失った風の槍はそのまま地面へと衝突した。その衝撃は凄まじく、風の槍が衝突したコンクリートは簡単に陥没し、地面と衝突した風の槍は余った力を周囲へ衝撃波として放つ。
「な――っ」

その衝撃波が、地面を転がったトモヤを襲った。
衝撃波を受けたトモヤは、その衝撃でさらに数メートルも吹き飛ばされ、背中を電柱にぶつけることで止まる。
「やったか……」
会心の一撃を与えた、とミユキは判断し、慎重に地上へと降りてくる。その視線はいまだトモヤへ向けられているが、警戒はいくらか弱める。
（向こうはちゃんと逃げれてるかな……）
そう思いを馳せるように、どこまでも空高く昇っている炎の黒煙を見上げた。

第一章　世界が交わった時　？

明かりが点いていないかつての企業オフィスは、壊れた窓ガラスから微(かす)かに入ってくる月や星の光で照らされているだけで薄暗い。
もう何年も使っていないだろうオフィスは悲惨な状態であり、何個も並べられているオフィステーブルは荒れ果て、壁際に配置されているロッカーからは異臭までもしてくる。そのロッカーの中には、ずっと放置されていた取引先かどこかの会社名がずらっと記載された書類が束になって置かれていた。一方のオフィステーブルには誰かがここに座って仕事していた名残が残っており、テーブルの上に置かれたマグカップの汚れは経過した時間の長さを如実に表している。
そのような複合オフィスビルのワンフロアに悠生(ゆうき)、タクヤ、アオイの三人はいた。
「……」
「……」
悠生たちは誰も声を発しようとしない。
先ほどの言い合いで、ずっと走っていた体力をさらに消耗させたということもあるが、ユウキを追っている防護スーツに身を包んだ男たちが今も追いかけてきているのだ。その男たちに見つからないように、なるべく声を上げないようにしている。
窓ガラスがなくなった窓から、遠くのほうで鳴り響いている爆発音が聞こえてくる。それは、恐らくトモヤといっていた『覚醒者』とミユキが戦っている音だろう。聞こえてくる爆音にも炎によって焦げた匂いが混じっていそうで、悠生はただじっと自分を守ると言ってくれたミユキの安全を祈る。
（エンジン音は聞こえてこないな）
悠生がミユキの身を心配しているなか、タクヤは通りに面した窓

から視線だけを出して、じっと外の様子を窺っていた。
アオイの報告では追手の男たちは装甲車二台で追いかけてきているとのことだった。遠くから爆発音が聞こえてくるほど周囲は静かなのだ。それよりも近くにいるだろう装甲車の駆動音が聞こえてこないことにタクヤは疑問を抱く。
（どこか見当違いの所を走ってるのか？）
そう考えるが、確証はなかった。
タクヤの目は窓の外の通りに向けられており、とてつもなく速く目線はあちこちへと動いている。一刻も早く追手の男たちの場所を把握しようとしているのだが、上手くいっていないのだ。
そんなタクヤの行動に気付いてか、悠生の近くのオフィスチェアに座っているアオイも目を閉じて『覚醒者』としての力を使って、装甲車を探している。しかし成果はなかった。
「……」
（居づらい……なんだ、この空気）
タクヤもアオイもじっとしていて声を上げないため、同じ場にいる悠生は先ほどの言い合いによる気まずさを強く感じていた。
普段ならしないような相手の胸ぐらを掴むということまでしてしまった悠生は、タクヤやアオイの顔をまっすぐ見ることができないでいる。二人の様子をちらちらと横目で見ているだけである。
その視線に気付いているのか気付いていないのか、二人は悠生のことを今は放っている。それが悠生の気まずさを余計に助長しているのだ。
「……はぁ――」
（これからどうなるんだろ……）
時間も持て余している悠生は、ぼうっとこれからのことを考えてみる。
こちらの世界へ飛ばされてから一日どころか半日も経っていないのだが、ゆっくりとする時間すらなかった。眠気はないが、身体の疲労は随分と溜まっている。この廃れたオフィスがオアシスに感じ

られるほどだ。
（俺一人じゃ何もできない――か）
考えてみたこれからのことは、最悪な結果ばかり浮かんで、自分一人じゃどうしようもないことを悠生は実感した。
「な、なぁ！」
そう感じた悠生は、思い切って二人に声を掛けた。
「……？」
「どうした？」
目を閉じていたアオイはぱちっと目を開けて視線を向けてきて、窓の外を見ていたタクヤは振り返って尋ねてきた。
「いつまでここにいるんだ？」
「言っただろ。奴らが通りすぎるのを待ってから、だ」
悠生の質問に、タクヤは何度も言わせんなと呆れた。
しかし、このオフィスに身を潜めてからすでに三〇分近く経っている。追手の男たちが装甲車で移動しているのなら、とっくに通り過ぎているだろう。それなのにまだ隠れている必要があるのか、悠生には疑問だった。
「もう行ったんじゃないか？」
その疑問を率直に口にした。
「それは分からない。爆発音は聞こえてるのに、エンジン音が聞こえてこないんだよ。安全が確認できないと移動はできない。こっちは無力に等しいんだから――」
タクヤは冷静にどうするべきかを説明した。
タクヤもアオイも『覚醒者』としての直接的な戦う力はミユキや先ほどのトモヤよりもないのだ。銃を持った相手にはミユキのように真正面から立ち向かうなんてことはできない。
「あと一〇分待つ。それでも現状が変わらないなら、ここを出て、裏地を通って逃げよう」
「……あ、あぁ、分か――」
タクヤの判断に悠生が頷こうとしたところで、ずっと黙っていた

アオイが声を上げる。
「追手がビルに近づいている――っ！！」
声を上げたアオイは、先ほどと同じように両目を閉じていた。
「……！？」
「そ、そんな――！？」
アオイの言葉に、悠生とタクヤはそれぞれ驚いた。
特に、タクヤの驚きは大きい。ずっと窓の外の通りを見ていて、追手の男たちの気配をまるで感じなかったのだ。
「途中で車を捨てたみたい。歩いて私たちを探してる！」
驚いている二人に、アオイは続けて追手の様子を伝える。おそらくこの周囲を飛んでいる鳥と視界共有をしているのだろう。その視野は人間のものよりもはるかに広い。
「最初に装甲車で追ったのはフェイントか！？」
「私たちが路地に入ったからかも――」
どちらにせよ悠生たちがビルに隠れてから三〇分以上も時間が経っている。もうすぐそこまで追い付かれているだろう。
「どうするんだ？」
二人の会話を聞いていた悠生が尋ねた。
「このビルから出るしかないだろうな。俺たちがここに入ってからかなり経ってる。奴らも俺たちのだいたいの位置を把握したかもしれない。とりあえず『ルーム』までは辿りつかないと」
アオイの報告を聞いたタクヤは頭を掻きながら、しまった、というように答えた。
追手が装甲車に乗っているという最初の報告で、タクヤは追手の男たちは移動速度を優先したのだと判断した。
その判断は間違いではないだろう。ミユキの力で先に逃げることに成功した悠生たちに追いつくためには、悠生たちよりも速い移動手段でなければならない。この街のことを知らなければ尚更である。
しかし、追手の男たちはタクヤの思惑通りには動いていない。
（『ルーム』……？）

タクヤの言葉の中に、悠生は気になる単語を見つけた。
会話の内容から言葉の意味を考えると、今悠生たちが向かっているところの名前なのだろうが、それが一体どこでどのくらい時間がかかるのか悠生には分からない。
「……そうね。じっとしてるだけじゃいけないわよね」
タクヤの考えにアオイも頷いた。
アオイもタクヤと同様に『ルーム』まで逃げることができれば、大丈夫だと考えている。そして、それは間違いではないだろう。今居る場所よりも『ルーム』の方が安全であることは間違いないのだから。
「そこに行くまでにはどれくらいかかるんだ？」
二人の会話を聞いているだけだった悠生が、間に割って入って質問した。
「そうだな……、どれだけ急いでも小一時間はかかるだろうな」
「そんなに！？」
「あぁ。今、居る場所は街の外れにある『眠る街（スリープタウン）』だ。そこから俺たちが向かっているのは街の中心により近いところにある『ルーム』だ」
悠生に、タクヤが短く説明を行った。それを聞いた悠生はまたしても聞き慣れない単語に疑問を抱くのだが、それをさらに追究している時間はなかった。それまで座っていたタクヤとアオイが立ちあがったのだ。
「移動するぞ。ここにはもういられない」
立ち上がったタクヤは、壊れた窓から外の景色を見つめる。
そこから見える空は白んでいっていた。

第一章　世界が交わった時　？

ここは全壊半壊の状態の建物ばかりの街の、ある通りだ。
その通りをスピーカーの声の男――シンジは歩いていた。シンジの周囲には防護スーツに身を包んだ五人の男が同様に歩いている。五人の男はそれぞれ手にアサルトライフルを持っており、こまめに周囲へ視線を配っている。
「反応は？」
シンジは、隣を歩いている部下に尋ねた。尋ねられた部下は手に持っている機械のディスプレイをじっと見つめている。
「先ほどの地点よりかなり移動した地点で、新しい反応がありました」
「そうか」と部下の報告を聞いて、シンジは短く唸った。
（こちらが近づいていることにやっと気付いたみたいだな）
シンジは冷静に悠生たちが動いたことを分析する。そして、悠生たちにも感知タイプの『覚醒者』がいるのだろう、と踏んだ。
「向こうには、『風』の女以外にも『覚醒者』がいるみたいだな。我々の動きに気付いたのもそいつだろう。こちらも手を打つぞ」
周囲をついてきている五人の男たちに、シンジは指示を出す。その指示を受けた男たちは、それぞれ散り散りに走りだしていく。
散り散りに走りだした部下の男たちを見て、シンジはニヤリと笑う。

第一章　世界が交わった時　？

悠生（ゆうき）たちは隠れていた廃墟と化した複合オフィスビルから出て、目指している『ルーム』へ向けて、廃墟の街を東へと走っていた。

複合オフィスビルで休憩も兼ねて隠れていたことで、体力はだいぶ戻っている。しかし、小一時間もかかる『ルーム』までずっと走りっぱなしというわけにはいかない。追手をどこかで撒（ま）かなければならなかった。

「アオイ！　ここらへんで入り組んだ地形のとこあるか？」

先頭を走っているタクヤが、後ろを走っているアオイを振り返らずに尋ねた。

「入り組んだ？」

タクヤの質問の意味が分からずにアオイは聞き返したが、『覚醒者』としての力を使ってすぐに探し始める。

「ここから北へ数百メートル行ったところに、ショッピングモールがあるけど？」

「ショッピングモール……」

（使えるか？）

アオイの報告を聞いて、タクヤは一瞬の間に判断する。

「このままずっと走りっぱなしってわけにもいかない。そこで奴らを撒くぞ！」

そう言って、大通りを走っていたタクヤは急に北へと進路を変えた。その急な方向転換に後ろをついていっていた悠生とアオイは驚くが、タクヤに倣って北へと進路を変える。

大通りから北へと続く道路へ曲がると四、五ブロック先に、かつてのショッピングモールの建物が見えた。先ほどまで隠れていた複合オフィスビルよりも敷地も広く、入り組んでいる建物である。追手を撒くには有効だろう。

曲がった通りの先にショッピングモールがあることを確認したタクヤは、さらに走る速度を速めた。
「ちょ――！？」
急に一段階ギアを上げたように速く走り始めたタクヤにアオイは声を出して驚くが、そのさらに後ろで銃の発砲音が響く。
「な、なんだ――！？」
「？」
聞こえてきた発砲音に、悠生とアオイは驚いて振り返る。すると、悠生たちを追いかけていた防護スーツに身を包んだ追手の男の一人がそこにはいた。その手にはアサルトライフルが握られている。どうやら、そのライフルを撃ってきたようだ。
「な、あいつ――」
「追いつかれた！？」
追手の男がそこまで追いついてきたことに悠生とアオイは驚いて、走っていた足を止めてしまう。そこに、
「走れ――！！！」
急に速く走ったタクヤは、後ろを振り返った二人に大声で言った。
「う、うん」とその声に我に返った悠生とアオイは再び前を向いて、ショッピングモールへと全速力で走る。
「逃がすか！」
振り返ってきた悠生とアオイが再び走りだしたのを見て、追手の男も追撃の射撃を行うのを止めて追いかけていく。
（逃げ切れるか――）
悠生とアオイが追い付いてから再び一緒に走りだしたタクヤは、ちらっと追手の男の位置を確認して下唇を噛んだ。
目の前に見えるショッピングモールは数百メートル先にある。その距離がキロを越えるような途方もない距離に感じてくる。一直線であるため少しでも走る速度を緩めれば、ライフルの射程圏内に入ってしまう。それだけは避けなければならない。
追い付いてきた悠生とアオイとともに走りだしたタクヤは、

「ショッピングモールはさっきのビルと違って、出入り口が無数にある。中に入ったら二手に分かれるぞ。アオイはそいつと行け」
と言った。
「いいの？」
無茶な作戦だと感じたアオイは尋ね返した。
「目的地は決まってる。そこで合流するんだ！」
「……わかった。君もそれでいいよね？」
タクヤの決意を聞いたアオイは頷いて、悠生にも確認を行う。
「あぁ。俺は構わない」
悠生も、タクヤの言葉に賛同する。今の自分じゃ最良の選択ができない、と分かっているのだ。
追いかけてきている男よりも、悠生たちは百数十メートル前を走っている。このままの距離でショッピングモールに入ることができれば追手を撒けるだろうと、タクヤは安心する。追手の男もアサルトライフルを構え直しているうちに射程距離から逃げられると判断して、そのまま追ってきていた。
悠生たちの目の前に見えているショッピングモールは、六階層でかつては二〇〇店ものショップが入っている地域最大のショピングモールだったが、今では壊れたショップの看板や立体駐車場、瓦礫ばかりの敷地内に変わっていた。
その廃れたショッピングモールに、悠生たちは入っていく。
後ろから追いかけてきている男の姿は、通りの二ブロック先に見える。安全な距離とは言い切れないが、すぐにアサルトライフルで狙われることもないだろう。
「汚いな……」
ショッピングモールの敷地内は遠くから見えていた以上に瓦礫が散乱しており、今もなお強い異臭を放っている。
フロントガラスどころか天井がなくなった自動車、水やジュースなどが溢れ出て汚くなっている自動販売機、泥にまみれたポップコーン等のスナックを販売していた屋台。そのどれからも人がいた気

配を感じられない。
「もうずっと、このまま放置されてたから――」
呟いたタクヤに、アオイもうっすらと悲しそうな声を出す。
二人がこの光景を見て何を感じているのか、何を抱いているのか、分からない悠生はただただ自分がいた世界と違う光景に目を見開くばかりだ。
「いったん建物の中に入ろう。そこから分かれるぞ！」
「うん」
気を取り直して、三人はショッピングモールの建物へと再び走りだす。後ろを追いかけてきている男ももうすぐショッピングモールの敷地に入るころだった。
このショッピングモールの廃墟は複数の建物に分けられているわけではなく、一つの大きな建物にまとめられている。
悠生たちはその建物へ、一番近い入り口から入っていく。
ショッピングモールは六階まで吹き抜けの通路が曲がって先が見えなくなるまで続いており、その左右に数多くのショップが入っている形になっていた。活気があったころは連日多くの人で賑わっていただろう建物内も、今は照明もついておらずもの静かである。
「どっちに別れる？」
そのショッピングモールの建物一階に入ったアオイは、隣にいるタクヤに尋ねた。
「アオイはそいつを連れて『ルーム』の方角へ走れ。俺は反対方向へ走る」
「……わかった。でもタクヤは？」
タクヤの提案に、アオイは短く聞く。
「俺ならなんとかするさ。奴らの目的があくまでもそいつであることは変わらないんだ」
タクヤの心配をするアオイだが、タクヤは大丈夫だ、と言うだけだった。
そこへ、

「追い詰めたぞ！」
悠生たちを追いかけてきた男が、同様にショッピングモールの建物へ入ってきた。会話をしている間に、距離を縮められたみたいだ。
「行け――っ！」
追手の男がアサルトライフルをしっかりと構えているのを見て、タクヤは叫んだ。
それを合図に悠生とアオイ、タクヤはそれぞれ別の方向へ走りだす。不意に二手に分かれてことで、向けていた銃口を動かしてしまった追手の男はどちらを追うか、一瞬迷ってしまう。その間にも悠生たちは一気に距離を広げていく。
『奴ら、二手に分かれました』
戸惑った追手の男は防護スーツを全身に纏ったまま、右耳に手をあてて話し出す。
その行動を振り向きざまにちらっと見たタクヤは、一人しか追手来ていなかったことを思い出して気付く。
（通信……？　奴らバラバラになって探してたな！　――ってことは広範囲で包囲されてるのかもしれない）
追手の男が味方に通信で状況を報告していることに気付いたタクヤは、相手も散り散りになって捜索していることに気付く。そして、すでにショッピングモールの建物内に各方面から追手が入り込んでいるかもしれない。そうであるならば、二手に分かれた意味がまるでない。
先ほどまで悠生たちを追いかけていた男は通信を終えると、アオイと一緒に逃げた悠生ではなくタクヤの方を追いかけ始めた。
「……！？」
（くそ――っ！　俺の方を追いかけさせようとしたのは上手くいったが、他に追手がいたらアオイたちも捕まっちまう）
最悪のケースも考えたタクヤは戻って悠生たちと合流しようと立ち止まったタクヤに、追手の男が襲いかかる。
アサルトライフルの銃口が火を吹き、けたたましい発砲音が、静

かな建物内に響きわたる。その銃撃を、タクヤは左手にあった廃れたショップに飛び込むことでかわす。
「ち――っ、外したか！」
銃弾が当たらなかったことを確認した追手の男はさらにタクヤとの距離を詰めてくる。
追手の男が近づいていると気付いたタクヤは床にうつ伏せになった状態から起き上がって、周囲を確認する。
（まずい――っ！　出入り口が一つしかない）
タクヤが飛び込んだ廃れたショップは、かつては洋服店だったようで、それほど広くない部屋内に多くの棚が並べられており、数えきれないほどのハンガーが散らばっていた。そして部屋内がそれほど広くないために、出入り口が一つしか設けられていなかった。
タクヤはその廃れたショップの入り口付近で起き上がる。
後ろからは今も追手の男が追いかけてきている。この位置はすぐに狙われると判断したタクヤはひとまず廃れたショップの奥の棚に背を預けて隠れる。
その後すぐに追手の男が廃れたショップに入ってきた。
「どこに隠れた……？」
それほど広くないショップ内だが、かつては洋服がたくさん並べられていただろう棚がさらにショップ内を狭く見せている。
カシャという機械音を響かせてアサルトライフルを構え直しながら、追手の男は慎重に歩を進める。
（こっちの武器は何もなし。制服で来たのがそもそも間違いだったか……。さてどうする――）
棚の陰に隠れているタクヤはじっと棚のすき間から、追手の男の様子を窺っている。近くにあるのは錆びたハンガーや、洋服としての体をなしていない布きればかりだった。これらのモノが役に立つとは到底思えない。
じりじりと距離を詰めてくる追手の男に、タクヤは背筋が凍る思いをしながら、どうするかの算段を立てる。

（あっちの隙をついて、出口まで逃げるしかない――か）
最も単純で、且つ最も難しい方法を取るしかない、とタクヤは腹をくくる。
一つ一つ棚の陰などをつぶしながら、タクヤが隠れている棚へ向かってきている追手の男の足取りはゆっくりである。そのため自然と流れる一秒一秒が恐ろしく長く感じられ、必死に押し殺している呼吸も何かの拍子に大きな音になりそうだった。
どうせ見つかるなら早くきてくれ、と心の内で思うタクヤだが、追手の男はその願いまで汲み取ってはくれない。追手の男は必ず仕留めるという気概でゆっくりと慎重に歩いていた。
（……）
チャンスは一度きり。
失敗すれば、それは自身の死を意味する、とタクヤは己の集中をさらに高めようとする。
たっぷりと時間を使ってこちらへ近づいてくる追手の男との距離を正確に測る。あと数歩でタクヤが隠れている棚にやってくるだろう。
（一歩……二歩……三……）
タイミングを合わせるように、タクヤは心の中で相手の足音を数える。さらに床に落ちていたハンガーを一つ手に取り、着実に近づいている追手の男の胸より上の位置を想定して構える。
（……六、今だ――っ！）
追手の男の身体が、棚から現れた所を狙って、ハンガーの尖ったフック部分を相手の首元へ押しつける。
「な……っ！？」
いきなりタクヤが現れたこと、そして針金製のハンガーの先が向かってきていることに驚いた追手の男は無意識に身を仰け反らせる。
そのスキをタクヤは逃さない。追手の男の重心が移動したのを見て、さらに足払いをかけて床に倒す。
「ぐ――っ」

背中を打った男は一瞬身体が硬直してしまう。その間に、タクヤはたった一つしかない出口へ向かって走りだしていた。

「……くそ、　逃がすかぁ！」

走り去ろうとしているタクヤを見て、追手の男は仰向けに倒れた状態で、アサルトライフルを構える。そして、その銃口をタクヤの後頭部に向けた。

次の瞬間には、タクヤの脳天めがけて、ライフルの引鉄（ひきがね）が引かれる――。

第一章　世界が交わった時　??

一方、タクヤとは別の方向へ逃げていた悠生(ゆうき)とアオイは、追手の男が追いかけてこないことに気付いてから、慎重に移動をしていた。
「銃声が聞こえなくなった……？」
「そうみたいね」
それまで聞こえていた銃声が聞こえてこなくなったことを不思議に思い、二人ともタクヤの無事を祈る。しかし、今は立ち止っているわけにはいかない。先へ進まなければならなかった。
悠生とアオイはすでにショッピングモールの別の出口付近まで来ていた。何度も周囲を確認したためそれなりの時間がかかってしまったが、ショッピングモールから無事に出られれば追手を撒(ま)けたことになる。
そう信じている悠生はアオイの前を、先が見えないほどに曲がっているショッピングモールの通路を、注意を払いながら歩く。
「この街を抜けられたら、本当に安全なんだろうか……」
不意に悠生の口から、不安な気持ちが零れた。
まだこちらの世界のことを右も左も分からない悠生は、この現状を打破しても本当に安全なのだろうかと不安に思っている。その気持ちは簡単には拭(ぬぐ)えない。
「……」
そのような気持ちを抱いている悠生に、アオイは何の言葉もかけてあげられない。悠生の感じている不安を思ってみても、その解消はアオイには叶わない。
「……そ、それは――」
「いい。口に出して、不安を吐きだしたかっただけさ。たぶんどこに行っても、完璧な安全なんてないんだろ？」
何かを悟ったように悠生は尋ねた。

『ルーム』へ向かっているのはここよりも安全であり、その単語の差す意味からもそこがミユキたちの家だからだろう。そこが完璧な安全を保障できる所とは限らない。
そう分かったような口調だった。
「……」
アオイは何も言葉を返せない。
その沈黙が肯定であるということも分かっていながら、悠生を少しでも安心させられるような――声に出して言える言葉を持っていなかった。
再び無言になり、二人はただただ歩く。
緩やかに曲がった通路では、先が見えない。それはゴールのない道程を走っている悠生の現状を端的に表しているようだった。
そのまま歩いていると、天井の吹き抜けが一段と高くなっているホールのような丸いスペースに出てきた。見上げると六階建ての建物の一番高い階まで吹き抜けになっているようだ。その階を繋げるようにいくつものエレベーターがあるが、今はどれも稼働していない。
一階部分を歩いていた悠生とアオイの前には、休憩用に設置されていただろうベンチが幾つも並べられている。しかし壊れていたり、錆びていたりととても座れるような状態ではなかった。
「あ、出口だっ」
そして、通路側のホールの反対に、開きっぱなしになった自動ドアがあることに悠生は気付いた。
これで外に出られる、これで少しは安全になる、と思った悠生は出口へ向けて一直線に走る。その後をアオイも追いかけようとして気付いた。
「待って――！！！」
走りだした悠生の足元に、耳をつんざくような音とともに銃弾が撃ち込まれた。
「なっ！？」

銃弾が飛んできた方向を見上げると、ホールが見えるショッピングモールの二階の通路に、追手の男と同じ防護スーツを纏った男が数人、アサルトライフルを構えていた。
（増援……っ）
不意に現れた追手の男たちを見て、アオイは一瞬そう判断する。
しかし、
（いや、最初から追手は一〇人だった。ばらばらになって包囲するように追ってきてたってことね）
タクヤと同様にアオイも気付く。
「そこでおとなしくしてもらおう！　君の命までは取らない」
包囲された悠生は、ギリッと唇を噛む。
追手の男たちは二階だけではなく、悠生が向かっていた出口の自動ドアからも現れて、さらに包囲を強化してくる。
その数は六人。
（二階に四人、出口前に二人。どうやってこの状況を抜ければ――）
囲んでいる追手の数を、顔を動かさずに視線だけでアオイは確認する。
打開策はないに等しかった。
このままでは悠生は男たちに捕らわれ、計画を知られた者としてアオイは抹殺されるしかない。アオイは、どうにかして悠生だけでも逃がせられないか、と考えを巡らせる。しかし、良い案は浮かばない。
（私にもっと使える力があれば……）
そう思ってしまった時点で、アオイが取れる行動はなかった。
ショッピングモールの自動ドアから現れた追手の男たちは悠生を捕まえようと近づき、二階でアサルトライフルを構えている男たちはアオイを殺そうと照準を合わせている。
もはや為す術がない。そうアオイは視線を俯（うつむ）かせてしまい、悠生は近付いてくる追手の男たちを前に立ちすくんでいた。
そこに――、

「何、希望見失ってんだ？」
と声が響きわたった。
「……？」
「――っ！？」
聞こえてきた声に悠生とアオイは驚いて、それぞれ声のした方へ向くと、新たに現れた男が一瞬の間に悠生を捕まえようとしていた追手の男二人を気絶させた。
「な、なにが――」
何が起こったのか、と脳の理解が追い付く前に、男は何もない空中で手を振ると、二階にいた追手の男たちが音もなく床に倒れていく。
その光景を悠生もアオイもただじっと見つめていただけだった。
そして、何事もなかったかのように追手の男たちを無力化した男は、
「わりぃな～、遅くなっちまった」
とニカッとした笑顔とともに、言った。
「カツユキさん！」
その男にアオイは助かったという表情を見せて、駆け寄る。どうやら、アオイの知り合いらしい。
（ってことは味方か――）
悠生はほっと胸をなでおろす。
「どうしてここが？」
「タクヤだよ。あいつが知らせてくれた」
『カツユキ』と呼ばれた男はすらっと高い身長から滲み出る威圧感がまるでなく、のんびりとした口調が柔らかい印象を与えてくる。しかし清潔感はなく、ぼさぼさの茶髪はところどころでハネており、服装もだらんとしたものだった。どうやら成人しているようで、口には煙草が咥（くわ）えられている。

「タクヤが？　いつの間に――」
タクヤの知らせを受けたというカツユキは、倒した追手の男たちをちらりと一瞥して、
「とりあえず今は逃げよう。タクヤの方も俺がさっき助けた。タクヤももうここから離れてる。いつまでもぼうっと突っ立ってるのはよくない」
「うん。走れる？」
カツユキの言葉を受けて、アオイは悠生へ確認を取る。
「あぁ。一刻も早く安全な場所に行きたいからな」
それまでただ指示された通りに行動するだけだった悠生の目に力が宿っている。ミユキの願いもタクヤやアオイの思いも、全てを理解して自分が生き残るための力が――。

第一章　世界が交わった時　??

「……全員やられているな」
目の前に広がっている光景に、シンジはため息を吐く。
シンジの目の前に広がっているのは、ショッピングモールの無数にあるうちの一つの出入り口前の広場で、散り散りに先に悠生たちを追わせていた部下の男たちが無残に倒れている光景だった。
「おい、何があった！？」
倒れている男の一人に、シンジの脇に控えていた部下の男が駆け寄って尋ねた。駆け寄っていった先に倒れている男はまだ意識があるようで、小さく途切れ途切れの声を出している。
「たい……うに……ぞうえ……が……」
「なんだ？　何があった！？」
必死に情報を得ようとしている部下の男を見ずに、シンジはこの状況をじっと見つめている。その視線は鋭く、周囲に残っている水たまりに向けられている。
「それ以上はいい。ここで撤退しよう。トモヤの所へ戻るぞ」
「しかし――」
シンジの命令に部下の男は反論しようとするが、
「相手に援軍が来たようだ。おそらくそいつも『覚醒者』だろうな。反応はまだあるか？」
「は、はい！　能力を使用した反応は出ています」
「そうか……」
シンジはしばし考える。
（ディスプレイに表示された地点は恐らくここが最後。ユウキはその援軍とともに逃げていった。その後を追うにしても相手に戦闘タイプの『覚醒者』が加わったのでは分が悪い――か）
悠生たちを追いかけていたシンジは迎え撃たれなかったことから、

あの三人は戦闘タイプの『覚醒者』ではないと断定していた。しかし、ショッピングモールで相手を包囲するようにばらばらに散らした部下がやられているということは、そのタイプの『覚醒者』が現れたと判断するのが妥当である。

「まだ反応がありますが、撤退ですか？」

思考を繰り返しているシンジに、先ほどの部下の男が尋ねた。

「あぁ、そうだ。これ以上は不毛な追走になりかねない。我々の目的のもう一つはあの女が所持していることも予想はついている」

それを奪いに行くのだ、とシンジは鋭くなっている視線をそのままに、未だ空高くへと昇っている黒煙を見据える。

そこに、今もトモヤが戦っているはずだ。

第一章　世界が交わった時　??

焦げたような匂いが依然として周囲の空気を汚している。
ミユキの周囲を囲うようにして燃え盛っていた炎の壁は、トモヤの意識が途切れたと同時に消えていたが、燃えカスがその匂いを放っているのだ。
「……ひどい空気ね」
その匂いを嗅いだミユキは手で鼻を押さえる。鼻につく異臭はあまりにも嫌悪感を与えるものだった。
その焦げた匂いから離れるように、ミユキはこの場を離れようと歩きだす。
そこへ、声が届けられる。
「やってくれるじゃねぇか……。さっきのはマジで効いたぞ」
その声は、風の槍の衝撃波を受けて意識を失っていたトモヤのものだった。
声がした方向へ見ると、トモヤは電柱に寄り掛かるようにして、ゆっくりと立ちあがろうとしていた。その視線はまっすぐミユキを睨んでいる。
（仕留めきれなかった！？）
トモヤが意識を取り戻し、立ちあがったことにミユキは驚愕した。
風の槍はミユキの上級の攻撃技と言える。直接食らうことはなくても、そこからばらまかれた衝撃波を受けただけで骨が折れ、内臓を簡単に潰すのだ。それを受けたトモヤが立ちあがったことが信じられなかった。
「……ぷ――っ」
トモヤは口に溜まった血を吐きだして、キッとミユキを睨む。
「よく立ち上がれたわね」
風の槍を受けて立ち上がったトモヤを見てミユキは驚愕の表情を

見せるが、ここで怯(ひる)むわけにはいかない、と再度構える。
「身体は頑丈なほうなんだよ。さすがにあばら何本かイっちまったけどなァ――！！」
立ち上がったトモヤは間髪入れずに、ミユキへと迫る。一瞬で数メートルの距離を跳躍してくるトモヤだが、彼が踏んだ地面には軽く燃える炎の跡があった。
「……っ！？」
迫ってくるトモヤの速度が急に増したことにミユキは驚いて、反応が遅れる。トモヤのその速度は彼が放っていた火球の速度が上がったのと同じように、何の前触れもなかった。
反応が遅れたミユキは、今度は回避行動が取れなかった。そして、トモヤの突撃をまともに受けて吹き飛んでしまう。
「ごふ――っ！！」
突撃の衝撃で、ミユキの呼吸が止まる。一〇メートルほども吹き飛んで、街路樹の枝にぶつかることでミユキの身体は止まった。
「はぁはぁはぁ……」
（……なんて、速さなの――）
突撃の衝撃も相当なダメージでミユキの身体の反応を鈍らせているが、それよりもトモヤの足跡に残った炎にミユキの目を見開いている。
「……アフターバーナー」
「なんだァ、知ってるのか？」
ミユキが呟いた単語を聞いて、トモヤはニヤリと不気味な笑みを浮かべる。
ＡＦＴＥＲ（アフター）　ＢＵＲＮＥＲ（バーナー）。
それは本来、ジェットエンジンの排気に対して、再度燃料を吹きつけて燃焼させ、高推力を得るシステムである。主に戦闘機や音速爆撃機に搭載されているタービンエンジンが為せるものだが、トモヤはそれをやってのけた。
「どうして、それを……」

トモヤがアフターバーナーを使用した突撃を行ってきたことに、ミユキは驚愕している。
「俺がただ炎を出すだけの『覚醒者』だと思うなよォ。使い方さえ工夫すりゃ、力はいろんなことに使えるんだよ」
ミユキに一撃与えたトモヤは何てこともないように言ってのけた。その顔には再び貪欲に、血に飢えたが表情が戻ってきている。
トモヤは準備運動のようにコキコキと首を鳴らして、ミユキを一直線に見据える。
（また来る――っ！）
その表情を見たミユキがそう判断したように、トモヤはアフターバーナーを使った高推力で一気にミユキに迫ってくる。
「何度もくらわない！」
予測していたミユキは再び上昇気流で、空へと逃げる。しかし、
「簡単に振り切れると思うなよォ！！！」
トモヤは一瞬の間に突撃の方向を変えてくる。
「な……っ！？」
簡単に突撃の方向を変えてきたトモヤに、ミユキは息を飲んだ。上昇するだけのミユキは、それを避けることができない。
炎が燃える跡を残したトモヤの高速の突撃がミユキの身体を違わずに捉える。
「ぁあああああ――！！」
上昇気流の下から突撃をしてきたトモヤの体重を乗せた攻撃に、ミユキは叫びながらさらに空へと吹き飛ばされる。
吹き飛ばされたミユキは、さらに数メートルも空中へ飛ばされて、そのまま地面へと重力に従って叩きつけられる。
「がっは――っ」
叩きつけられたミユキは胸を強打して、再び呼吸が止まってしまう。強打した胸は肋骨が数本折れてしまったほどだ。
地面にたたきつけられたミユキを追うようにして、トモヤも地面へ降り立つ。

「俺が受けた痛みをそのまま返してやったぞ。どうだ？　痛いか？」
冷徹な言葉が、うつ伏せに倒れているミユキにかけられる。
肺の呼吸を全て失うほどの衝撃を受けたミユキは立ち上がることすらままならない。横目でトモヤのことを睨むのが精一杯だ。
「おォ、恐い恐い。けどよ、あの高さから落ちたんだァ。普通なら即死だぜ？」
「……」
「何も返せない――か？　ま、当然だろうな。……ちっ。やっぱ、お前じゃ俺の相手は無理だったなァ」
残酷なまでの事実を、明確な結果とともに、トモヤは告げる。しかし、それは事実であり目の前に突き付けられた結果であるために、ミユキには反論もできない。ただ、強い敗北感が溢れ出るだけだった。
「さて、向こうはどうなったのか」
地面に倒れたミユキには目も向けずに、トモヤは黒い服のポケットから携帯電話を取り出して、どこかに電話をかけ始める。一瞬の間に敗れたミユキへの関心はもうなくなったかのように。
倒れたミユキは抱いた敗北感がそのうち冷たい涙へ変わるのを感じて、気を失っていった。

第一章　世界が交わった時　??

トモヤが電話をした十数分後。
スピーカーの声の男とその部下の男数人が、最初に悠生たちを囲んだ場所へ戻ってきていた。
「どこほっつき歩いてたんだよ、シンジ」
ミユキを倒したトモヤは後からこの場に現れたスピーカーの声の男に対して、呆れたとでも言うように軽く突っかかった。
「何を言う？　お前がその女を対処するから、こちらはユウキを追いかけるという算段だったろう。速攻で倒すんじゃなかったのか？」
「あ～うっせえなァ。ちょっと手間取っただけだっつの」
スピーカーの声の男の指摘にもトモヤは何食わぬ顔で返した。
ミユキを倒すのに時間がかかったことをそれほど気にしていないトモヤは、地面に倒れているミユキに近づく。そのミユキは地面に倒れたまま気絶しているみたいで、ぴくりとも動かない。
「なぜ殺さない？　あれほど殺意を剥き出しにしていたのに」
「心変わりだっつの。大した理由はねえよ」
そう言い訳をしたトモヤだが、スピーカーの声の男はそれで納得しない。戦闘前は残虐なまでの殺意と敵意を剥き出しにしておきながら、相手が気絶したら殺さないというのは、大した理由があったからだろう。
そのことに気付いていながら、スピーカーの声の男は追及することはしない。
「まぁ、我々は構わないが――」
「それでそっちはどうなったんだ？」
会話の話題を変えるようななんてことのない素振りで、トモヤは尋ねた。
「君から電話を受け取った直後に逃げられた」

「はァ？　何やってんだよ。俺がいないと何もできないってのか？」
「……予想外のことが起こった故だ。ユウキを取り逃がしたことは大きいが、まだ打つ手はある。それよりも――」
その後の言葉はトモヤが引き継ぐ。
「それよりも、欲しかったものの一つはこれだろ？」
そう言って、トモヤは倒れて気絶したミユキのバッグから鈍い銀色の光沢を放っている円盤状の機械――『時空扉（タイム・ドア）』を取り出す。トモヤが取り出した『時空扉（タイム・ドア）』を見て、スピーカーの声の男はニヤリと微笑む。
「よく分かってるじゃないか」
トモヤが差しだした『時空扉（タイム・ドア）』をスピーカーの声の男は受け取って、言った。
「こいつが鞄を必死に守りながら戦ってるのは最初から分かってた。何か大事なモンが入ってるんだろうなってのは気付いてたさ」
「そう。これが我々の悲願の実現への第一歩になる」
「……あんたら何を考えてるのか俺は知らねえが、給料くれるならそのために戦うだけだ。その結果で、誰がどうなろうが知ったこっちゃねえよ」
スピーカーの声の男たちが企てている計画を、トモヤは知らない。金で雇われてユウキあるいは、この『時空扉（タイム・ドア）』を手に入れるようにと命令されただけである。それ以上のことを知りたいとも思っていなかった。
トモヤの契約を実行するだけだ、という言葉を聞いて、スピーカーの声の男は鼻で笑う。
（素直に命令に従う奴じゃないが、これだけの強力なカードだ。そう簡単に手放せれるものか。支払う金額に見合うよう、みっちり働いてもらうぞ）

街路樹の木々や周囲の建物から焼き焦げた独特の匂いが漂っている。
それらの匂いは緩やかに吹いている風に乗って、遠くまで運ばれていく。その匂いを嗅いだミユキは、ゆっくりと意識を戻していく。
「……」
瞼(まぶた)を開けると、世界が横になった形で廃れた街の景色が広がっていた。
（……気絶してた……？）
意識を取り戻したミユキは、それまでトモヤという『覚醒者』と戦っていたことを思い出す。トモヤに敗れたことを思い出したミユキは、なんとか立ち上がろうと両腕に力を入れる。
「ぐ……っ」
歯を食いしばるミユキだが腕に力を入れようとすると、プルプルと震えて上手く力が入らない。膝を立てるだけで精一杯だった。
「……ふぅ――」
ミユキは深呼吸をして、呼吸を整えた。そして、上半身を一気に起こした。その時にビキビキという身体が軋む音が耳に届く。
（だいぶ骨がやられてるな……）
そのことに気付いたミユキは、身体を支えるように腰へ手を当てる。そこで腰元にあった鞄の口が開いていることに気付いた。
「……！？」
戦闘中――いや、逃げている時からずっと閉じていたバッグの口が開いていたことにミユキは驚いた。無論、自分が開けたわけではない。
慌てたミユキは、開けたバッグの中を漁りだす。そして、気付いた。
「そんな、『時空扉(タイム・ドア)』が――」
口が開いていたバッグからは『時空扉(タイム・ドア)』が無くなっていた。気絶した後にトモヤが奪ったのだと、ミユキはすぐに気付く。

（『時空扉（タイム・ドア）』を奪われるなんて、私は何をやってるんだ……！）
『時空扉（タイム・ドア）』を奪われたことに、ミユキは自分の弱さに激怒する。また愚かさも呪う。相手の狙いがユウキだと思っていたばかりに、『時空扉（タイム・ドア）』をタクヤたちに託すことをしなかった。いや、思い付かなかったのだ。
トモヤに敗れた今、それを嘆いていても仕方がなかった。しかし、ミユキは自分の無力さや甘さを痛感せずにはいられない。これでは何のために悠生（ゆうき）をタクヤたちに任せて逃がした意味がなくなってしまう。
（そうだ！　悠生は無事に『ルーム』まで着いたのかな……）
悠生をタクヤとアオイに託したことを思い出して、悠生たちが目指していた『家』――『ルーム』に無事に着いたのだろうか、とミユキは心配になる。
『時空扉（タイム・ドア）』は失ったが、ユウキの時空移動によりこちらの世界へ来た悠生がまだいる。彼がいる限り、スピーカーの声の男もトモヤも再度狙ってくるだろう。
「まだ、ここでゲームオーバーじゃない――！！」

強烈な日差しが雲一つない晴天から届けられている。
歩いているだけで汗が滴り落ちそうな気温の中を、悠生は必死に、ミユキが言った『家』――『ルーム』に向けて歩いていた。その隣にはカツユキ、アオイ、そしてカツユキが助け出したタクヤが同様に歩いている。
すでに太陽は昇っており、それまでの静かな夜の気配は全く見えない。
周囲には、これから会社へ出勤するというサラリーマンや学校に向かっている学生の姿もちらほらと見える。

彼らにとっては、新しい一日は今始まったばかりである。
「はぁはぁ……」
しかし夜中の間走り回っていた悠生たちには、それらの人のような元気さがなかった。疲労困憊な表情が全てを物語っている。
その悠生たちの前に、一つの建物が見えてきた。
「これが？」
「あぁ、そうだ。これが俺たちの家、『ルーム』だ」
尋ねた悠生にタクヤは『ルーム』を見上げながら、答えた。

振り返ると、手で太陽を覆いたくなるほど強い日差しが差している。
その日差しに照らされている通りを遠くまで見通すが、ミユキの姿は見えない。ずっと先にある大きな高層ビル群が見えるだけである。
「ミユキ……」
悠生の口から零れた言葉は、誰にも届くことなく風に掻(か)き消されていく。

第二章　時空を越えて　？

緩やかな風が吹いている。その風は花や草の匂いを遠くまで運んでいく。

ユウキは、その風を顔に浴びるようにベッドに横になっている。

暖かい風は網戸にされている窓から部屋に入り込み、布団から出ているユウキの顔の上を通っているのだ。その風を受けてユウキは夢から覚めるように、次第に意識を取り戻していく。

「ん……」

何十時間も閉じていたかのような重くなった瞼をゆっくりと、それこそ眩しい光に目が壊されないように慎重に開ける。

（ここは……どこだ――？）

開けた目にはまっすぐに光が当てられている。眩しそうに目を細めたユウキは、その光が薄い黄色のカーテンが開けられた窓から降り注いでいることに気付いた。太陽の光を浴びているユウキは、外の景色を見ることができない。

「あ、起きた？」

そこに声が掛けられた。

声がしたほうへ振り返ると、一人の少女がドアを開けて入ってきたところだった。

ふわっとアイロンか何かで巻かれている茶色の髪で、くっきりとした二重の目と高い鼻が特徴的な少女は、どこかの学校の制服を着ている。

「君は――」

声をかけてきた少女を見てユウキはおもむろに尋ねようとするが、その寸前で思い出した。

（……っ！　俺は『時空扉（タイム・ドア）』の内側に無理矢理落っことされたんだった――っ）

「見つけた時はびっくりしたんだからね！」
部屋に入ってきた少女の手には、包帯や消毒液などの簡易的な医療セットがたくさん抱えられていた。
（そういえば……）
起きたばかりのユウキは記憶があいまいだが、男たちに追われて逃げきれなくなったところでミユキが起動させた『時空扉（タイム・ドア）』を無理矢理通されたのだ。そして気が付いたら、この部屋のベッドに横になっていた。
（俺は世界を越えたのか……）
人類初の出来事を体験したというのに、ユウキの感想や反応はとても鈍い。それはそのことへのうれしさよりも懐疑的な思考が大きくあったからだ。
（立証実験も行っていないのに、無理矢理俺を飛ばしやがって――）
と、ミユキに対する憤りが、記憶が戻ってくるにしたがってふつふつと湧き上がってきているユウキに、
「気は失ってるし、なんかお腹は出血がひどいし――。早退したって聞いてたからびっくりしたよ～」
てきぱきと包帯の準備をしている少女が話しかけてくる。
「わ、悪い……」
少女が助けてくれたのだと理解したユウキは、とりあえず謝った。
（マキ……だよな……？）
ユウキは、自身を助けてくれた少女の顔が見知っているものであることに気付く。しかし目の前にいる少女は、ユウキが知っている人物とは違うことにも気付いていた。
（いや、俺が世界を越えたのだから、こちらの世界の真希ということか……）
悠生が気付かなかったことに、ユウキはすぐに思い当たる。それは自身が時空移動をしたことを理解しているからであり、世界を越えたという実感があるからだ。
その実感はユウキがいる部屋を見れば、一目瞭然である。

「はいっと。包帯変えるから、上着脱いで」
「え？　あ、あぁ……」
少女――『岩井真希』に言われて、ユウキは怪我をしていたことに思い出す。『時空扉（タイム・ドア）』を使う前に、追っていた連中の火炎放射器の炎をもろに受けて吹き飛んでいたのだった。
上着を脱ごうとベッドから起き上がったところで、ユウキは身体の痛みが引いていることに気付く。さらに着ている服装は自身が時空移動をする前に着ていた制服ではなく、カジュアルなTシャツに変わっていた。
（ミユキの肩を借りなければ歩けないほどだったのに……）
「俺はどれくらい寝ていたんだ？」
そのことに気付いたユウキは上着を脱ぎながら、包帯を準備して待っている真希に尋ねる。
「ん？　ん～と、一日とちょっとくらいかな？　なかなか目覚まさなかったからほんと心配したよ～」
（……！？　一日！？）
カレンダーを見ながら確認した真希の返事に、ユウキは目を見開く。そんなにも長い間眠っていたことに驚いているのだ。
（俺が一日以上も目覚めないなんて……）
「はい、ばんざいして」
考え事をしながらも真希に言われた通りに、起き上がってばんざいをするユウキ。脱いだ上着の下には、お腹の辺りに何重にも包帯が巻かれていて、所々血で滲んだ痕があった。しかし、やはり痛みは感じず、炎をまともに受けたのにやけどもしていないようだ。
「な、なぁ。一日以上も起きなかったのなら、病院に運んだほうが良かったんじゃないのか？」
「？　何言ってんの、上村（かみむら）くん。ここ一応病院だよ？」
ユウキの身体に巻かれている包帯を取り外しながら、真希はびっくりしたように言った。
真希に言われたユウキは窓のほうへ視線を移す。部屋の窓からは、

『岩井内科』と書かれた小さな看板が見えた。
「私ん家は実家経営の小さな診療所だからね。主に内科だし――。今晩意識が戻らなかったら、さすがに総合病院へ移送しようってお父さんが話してたよ」
「そ、そっか……」
（どう説明すれば……）
ユウキは怪我していた理由をどう説明しようかと思案を巡らせていると、包帯を取り終えた真希がユウキの傷口を見ながら、
「でも、その前に目が覚めて良かったね！　何があったかは聞かないでおくよっ」
ユウキの心配に気付いているかのように、真希は言う。
「うん、だいぶ治ってきてるねっ」
「あ、あぁ……。ありがとう」
「それは、お父さんに言ってあげて。私は看病くらいしかしてないからね」
「いや、それでも俺は助かった。ありがとうな――」
お礼をちゃんと述べるユウキは、少し安心した表情を見せている。
「そっか。じゃあ、どういたしまして！」
ユウキのお礼の言葉を聞いて、真希は照れたような笑顔を見せる。その表情は、ユウキが見たことがないものだった。
「……はいっ！　包帯の交換終わったよ」
包帯を巻き終わった真希は、さきほどまで巻いていた包帯を持って立ち上がる。
「それじゃ、私はさきに下に降りてるね。たぶん、お母さんが晩ご飯作ってるだろうから」
「ご飯……？」
「そうよ。起き上がれそう？　無理ならご飯持ってくるけど？」
「いや、俺は――」
そこまで世話になるのが億劫（おっくう）なユウキは躊躇するが、
「何言ってんのよ。何時間もご飯食べてないんだから、何かお腹に

入れないと！」
　ユウキの心配をしている真希は、ちゃんとご飯を食べるように言う。その表情は真剣そのもので、ユウキは気圧される。
「あ、あぁ、分かった……頂くよ」
「ん、それでよし！　で、起き上がれそう？」
「それは大丈夫だ。身体の痛みはもうないし、じっと寝てるってのは性に合わないからな」
「……？　そっか。じゃあ、ご飯できたらまた呼ぶよ。それまではゆっくりしててていいよ」
　不可解な表情を一瞬見せた真希だが、すぐ笑顔に戻って部屋を出ていく。その様子を見て、ユウキはもう一度部屋を見渡す。
　階段を下りるガタガタという音が聞こえる中で、ユウキは小さなデジタル時計が部屋のタンスの上に置かれていることに気付く。
（……午後の六時四〇分、――か）
　半袖のTシャツで過ごしやすいことを考えれば、季節は夏に入ったばかりのころだろう。さきほど真希が見ていたカレンダーも七月のページが開かれている。
（季節……いや、日にちは向こうと変わらないみたいだな）
　ユウキはそう判断する。そして、ベッドから立ち上がろうとする。
「ぐ……！？」
　立ち上がろうとした時に腹部に鈍い痛みが走る。横になっていた時は痛みを感じることもなかったが、体勢を変えるとまだ痛むみたいだ。
（完治、とまではいってないか――）
　自分の身体の状態を把握しきれていなかったことにユウキは甘さを覚える。しかし、今は自身に対する憤りを感じている場合ではなかった。
　痛みを耐えて立ち上がったユウキはそのまま窓のところまで歩いて、鍵が閉められている窓を開ける。そして、外の景色を一望する。
（これがこの世界――）

窓の外に見える景色は、ユウキが普段見ている景色と一八〇度も違うものだった。見える全ての建物が綺麗に見え、街を歩いている人の姿もどのような表情をしていても全て楽しそうに見えた。
もっと遠くを見れば、大きなビルが建ち並んでいるのがはっきりと目に映る。
「この世界は争いをしていないのか……？」
街の平和そうな面を見て、ユウキはぽつりと呟く。
ユウキたちの世界では『覚醒者』と呼ばれる人知を超えた能力を有している存在が多数いる。その『覚醒者』たちによる抗争が長く起こり、その結果『眠る街（スリープタウン）』と呼ばれる都市機能が完全に停止した街も多く見られるほどだ。
（『覚醒者』もいないのだろうか……）
時空を越えてやってきた世界のことを全く知らないユウキは、見える全てのものが新鮮に思える。その感想とともに抱いた疑問は今すぐに解消することはできない。
窓の外を眺めていたユウキは次に、自分がいる部屋の中を軽く見て回る。
デジタル時計が置かれているタンスの上には、さらに何枚かの硬貨が無造作に置かれている。その硬貨には『日本国』という文字が記されていた。
「……」
その硬貨を見つめたユウキは、その隣に一枚の写真が飾られていることに気付いた。
「この写真――」
写真は多くの学生が笑ってピースサインをしていたり、肩を組み合って写っている。何かのイベントの後のクラスの集合写真といったところだろうか。その写真に先ほどの真希の姿が写っている。
（文化祭か何か……か）
真希の姿に気付いたユウキはその真希の視線がカメラ目線でないことにも気付いた。

「？」
その視線を辿ると、そこに写っていたのはユウキと全く同じ顔の少年だった。
「上村(かみむら)く～ん、ご飯できたよーっ」
そこに真希の声が届いてきて、ユウキは写真から視線を外す。

第二章　時空を越えて　？

ユウキがベッドで眠っていた部屋を出たら、白い壁紙が印象的な廊下だった。
（診療所ってのは嘘じゃないんだな――）
その壁を見て、ユウキは単純な感想を抱いた。
どうやら、ここはこの家兼診療所の建物の三階のようだ。さきほど真希（まき）が「下に行く」と行っていたので、居住区は二階とこの三階になっているのだろう。
階段はどっちにあるのだろうとユウキは一瞬迷うが、
「部屋から出て右だからねーっ」
という真希の声が聞こえてきて、廊下を右に歩く。
白い壁紙が貼られている廊下を歩いていると、階段の前に部屋が一つあった。その部屋のドアには『マキの部屋』と書かれた札がぶら下げられている。
その札を見て、ユウキは先ほど自分がいた部屋のドアを振り返る。しかし、そのドアには何も掛けられていなかった。
（これは……？）
ユウキは疑問に思ったが真希が下の階から呼んでいる声がまだするので、深く追求することはしないで階段を下りていく。
二階まで階段を下りるとそこは三階のように廊下があるわけではなく、すぐにドアがあった。
「……？」
建物の構造がよく分からないユウキだがとりあえずそのドアを開けて、中へと入っていく。
すると、そこはリビングとダイニングが合わさった大きな部屋だった。
部屋の中央にはテレビ台と大きなデジタルハイビジョンのテレビ

が置かれており、そのテレビを家族で見られるようにL字のソファがかなりの面積を取っていた。そして、そのソファの横に家族三人が容易に座れる大きなテーブルが並べられている。
「あ、きた！」
ドアが開いた音を聞きつけて、キッチンにいただろう真希が姿を現す。
「もうちょっと待ってね！　今並べてるとこだから」
そう言った真希は、持っていたお皿をテーブルに置く。そのテーブルにはすでに様々な料理が運ばれていた。そのどれもがユウキにはおいしそうに見える。
「……」
「どうしたのかしら？」
そのままじっと突っ立っていると真希から遅れて、真希の母親がキッチンから顔を出してきた。
「い、いえ……。こんなにおいしそうな料理久しぶりに見たので……」
いきなり尋ねられたユウキは、真希の母親の顔を直視することもできずにもじもじと答えた。
「あら、そう？　そう言ってくれるとうれしいわ」
口元に手をあてて、真希の母親は本当にうれしそうに微笑む。その表情がユウキの胸をぎゅっとわし掴む。久しぶりに感じる陽だまりのような家庭の温かさだった。
真希の母親が再びキッチンの方へ戻っていくと、それと入れ替わるようにして先ほどユウキが入ってきたドアが開いた。
「おう、目が覚めたか？」
ドアを開けて入ってきたのは真希の父親だった。
先ほどまで診療でもしていたのだろうか、真希の父親は腕に綺麗にたたまれている白衣を持っていた。その表情も何処か気疲れしているように見える。
「はい。こ、こんばんは……。それと、助けて頂いてどうもありが

とうございます」
　リビングに入った真希の父親を見て、ユウキはまず挨拶とお礼を述べた。
「おう、なに気にせんでえぇ。怪我人病人見つけたら、救うのが医者ってなもんじゃよ。それに真希のクラスメートってなりゃ、もっと放っておくわけにはいかないしな」
　がははは、と高笑いをしている真希の父親は、どこかで聞いたような決まり文句を言ってくる。その態度を見て、陽気な人だなぁ、と当たり前の印象をユウキは抱いた。
（この人なら安心できそうだな――）
　そう思いながらユウキはご飯までご馳走になるということで、申し訳なさそうにテーブルにつく。
「ささ、君も食べろ。ずっと寝てたから、腹減っとるじゃろ？」
　そう言って、真希の父親は真希がついだご飯をユウキの前に差し出す。
「あ、ありがとうございます……」
「えぇてえぇて。そんな改まわんでも。昔から真希とは仲良くしてもろうとるみたいじゃし」
「は、はぁ……」
　豪快な口調の真希の父親にユウキは気圧されるが、受け取ったご飯を自分の目の前に置く。テーブルにはユウキも含めて四人分の料理がすでに並べられていた。テーブルに広げられているその光景を見てユウキは唖然（あぜん）としている。
「嫌いなモノとかある……？」
　心配そうな表情で真希が尋ねてくるが、
「いや、こういうのが久しぶりだから、ちょっと驚いてただけだ……」
「あ、そっか。上村くんの両親は共働きで忙しいんだったね」
　ユウキの神妙に言う話を聞いて、真希は思い出したように言った。
「なんじゃ、そうなのか！？」

真希の話を聞いて、興味を持った真希の父親がさらに話を広げようとしてきた。
「え？　……あ、は、はい」
「いつも一人で飯を食べておるのか？」
「いつもというわけじゃないですが、一人のことが多い……ですかね」
ユウキが話しているのはユウキの世界でのことであり、こちらの世界でのことではない。しかし話がかみ合わないということもなく、話は繋がっていく。
「ほぁ～、真希じゃ考えられないことだらけじゃの」
「ちょ……っ！？　お父さん――！！」
「ほんとのことじゃろうが」
「そうだとしても、上村くんの前で言わなくていいでしょ！」
真希と真希の父親のやり取りを見て、ユウキは自然と微笑ましくなる。それは自分が絶対に体験できない親子の会話だった。羨ましいという気持ちまではいかないが家庭に父親がいることが当たり前であれば、自分もこのような会話をすることがあったのだろうかと、ユウキは思う。
（だとしても、あの世界じゃ無理か……）
「どうかしたんか？」
「いえ、仲がいいんだなって思って――」
そう言いながら、ユウキは真希に笑顔を向ける。
「そ、そんなことないよ……。それにこれくらい普通だって――」
「普通……。そっか――」
その単語が出てくることが、ユウキには驚きでしかない。家庭事情はそれぞれ違うのが当たり前だが、このやり取りが普通であるならばどの程度が仲の良い親子になるのだろうか。
「あ！　ご、ごめん……」
ユウキではなく悠生の家庭のことを思い出して、真希はすぐに謝る。しかし、ユウキは全く嫌な気持ちになっていない。

「いや、気にしてないさ。それよりも、それが普通って言えることが素晴らしいことだと思うくらいだし」
「……そ、そう？」
ユウキの言葉に真希は自然と照れる。それを隠すように目の前にある料理を見て、威勢よく「いただきます！」と言った。
「あらあら、普段はそんなことも言わないくせに。何、動揺してるのよ」
その真希の仕草を見て、それまでキッチンに立っていた真希の母親が自分の娘をからかう。
「ちょ……っ。お母さんまで！」
「慣れないことはしないものよ。料理だって、普段はそんなに手伝ってくれないでしょ？」
真希の母親のからかいは父親のそれよりもはるかに真希へのダメージが大きかったらしく、真希は母親にからかわれて激しく動揺している。
「そ、そんなことまで言わなくてもいいじゃない……」
「ふふっ。可愛い反応も見せるのね」
「ちょ――、お母さんっ！？」
一度だけでなく、何度もからかってくる真希の母親に、真希は、これ以上何も言わないで、ときつく睨む。
「あら、怒られちゃったわね。それじゃ、お母さんはもう少しキッチンに隠れてましょうかね」
年齢以上の若々しさを見せてくる母親は、またしてもキッチンへと姿を戻していく。
真希の母親がキッチンに戻った後も、真希は頬を真っ赤にしたまま食卓に並べられた料理を食べている。その様子を微笑ましく思いながら、ユウキも目の前に並べられた料理に箸を伸ばした。

岩井家での晩ご飯はあっという間に終わった。
まだ時間は八時を回る前だが、この時間帯に晩ご飯を食べ終えるというのが、この家では当たり前のようである。突然の夜間患者のためにも、早めにご飯を済ますのだそうだ。
晩ご飯を食べ終わったユウキは、そのままテーブルで真希の父親と会話をしていた。
「怪我の具合や体調のほうは？」
「体勢を変えたときにまだ少し痛みますが、それ以外はもうどうってことは――」
「そうか。一日でここまで治るとは、すごい回復力じゃな」
ユウキの身体の調子を聞いた真希の父親は素直に驚く。医者の目にも一日で立てるほどに回復できるとは思えないほどの怪我だったのだ。
「む、昔から怪我とか治るの早かったんですよ」
真希の父親の指摘に、ユウキは慌てて言い訳をした。
「そうなのか。でも、回復力があるよりも怪我しないように注意する方が大事じゃぞ？」
「は、はい。これから気をつけます」
「うん、そうするのがえぇ。今日も入院するか？」
「……いえ、一度家に帰ります」
真希の父親の質問に、ユウキは少し考えてから返事する。
「？　そうか？」
「はい。歩けるほどには回復しましたし、ご飯までご馳走になってこれ以上お世話になるわけにはいきませんから」
まだ居てもいいんだぞ、とでも言うような表情を見せている真希の父親に、ユウキは礼儀正しくお礼を述べる。
真希がユウキを発見した時はけがの状態は酷かったが、一日眠っていたことで立って歩けるほどに回復している。そのため本来ならまだ入院しておくべきなのだろうが、ユウキは家に帰ると言った。

「ほんとに大丈夫なの？」
その隣で、真希がユウキの心配をする。
「あぁ。明日も学校あるんだろ？　制服とかも全部家にあるし、どっちにしても家まで帰らないといけないから」
「そ、そっか……」
残念そうにしょげる真希だが、ユウキの言うこともっともだ。今日は意識が戻らなかったため学校を休んだことになっているが、ユウキの懸念が当たっていれば学校にも行かなければならない。
「それじゃ仕方ないな。その服はおっさんの私のものだが、とりあえずそれを貸しておこう。君が着とったのは、ひどい汚れがついとったからクリーニングに出さなぁならん。クリーニングはすでに出しとるが、引取は明日以降になりそうじゃ」
「そうですか……。わざわざすみません。この服も明日には洗濯してお返しに行きます」
「いやいや、いつでも構わんよ」
今着ているTシャツやズボンなどをすぐ返したほうがいいと判断したユウキはそう言うが、真希の父親は服のことはそれほど気にしていない。
「そうですか？」
「あぁ。こっちが君の制服をクリーニングから受け取ったら連絡するから、その時にでも返してくれたらええ」
「わ、わかりました――」
そしてユウキは家に帰ろうと椅子から立ちがある。これ以上、この家族にお世話になるわけにはいかないという気持ちが増しているのだ。そのユウキの気持ちを理解してか、真希も真希の父親もこれ以上説得しようとはしない。
「家まで送っていこうか？」
「いえ、大丈夫です」
最低限の配慮として真希の父親が家まで自動車で送るというが、ユウキはそれすらも断った。

「そうか……。それじゃ真希、見送りくらいはしないと――」
「あ、う、うん」
父親に言われて、真希は慌てて立ち上がる。
「いや、そういう心遣いは――」
この場でお礼を言って、立ち去ろうとしていたユウキは見送りをするという真希と真希の父親に悪い気がした。
「そう遠慮するな。押しつけがましいが、こちらの礼儀と受け取ってくれ」
「は、はぁ……」
そこまで言われてはユウキも断ることはできない。真希の父親と母親にその場でお礼の言葉とお辞儀をして、真希に連れられて一階へと階段を下りていく。
一階は全て診療所の病室となっているようで、より白を基調とした内装が際立っている。その廊下を歩いて、ユウキと真希は病院の受付から出る。
「家もここが入り口なのか？」
「ん？　そうだよ。あんまし坪面積が大きくなかったから、家の入り口を作る余裕もなかったんだって。前に言わなかったっけ？」
「そ、そうだったか……？」
真希の言葉にユウキは慌てる。
無意識に出た質問だったが、悠生と真希の間係を知らないユウキは、二人がどれほどの仲だったのかを知らない。
岩井内科の入り口前は、どこにでもあるような住宅街の通りだった。虚しく、それでも周囲を必死に照らしている街灯のみが存在をアピールしている。まだ八時前だが、周囲には人の歩いている姿が見えない。
「ここでいい」
岩井病院の入り口前で、ユウキは真希に言った。
「ほんとに？」
「あぁ。これ以上お世話になるわけにはいかないさ。ここまで助け

てもらったんだからな」
そう言って、笑顔を見せる。
「そっか。これ、薬ね。まだ痛むようなら飲んで」
ユウキの笑顔を見て、真希は寂しそうに薬が入った袋を渡してくる。もう少し入院してればいいのに、という言葉が小さく零れる。
「ありがとう」
しかし、その言葉はユウキには届かない。
薬を受けとったユウキはもう一度お礼を言って、岩井内科から立ち去る。
その後ろ姿を、真希は見えなくなるまで見送った。

ユウキを玄関で見送ってから、真希は再び二階のリビングに戻っている。
リビングに戻った真希はまっさきに気になることを尋ねようと真希の父親が座っているソファの隣に座る。
「お父さん……」
そして、小さく話かける。真希には恐くてユウキに尋ねることが出来なった質問があった。
「あぁ、分かっとるよ。彼が着ていた制服は真希の高校のものじゃなかった。それに血がついとるということは襲われたということじゃろう。大病院に移送したら、そこらへんは警察が事情聴取するじゃろうな。彼は自分から言わんかったが、何か事件に巻き込まれとるのかもしれんのぉ」
「事件？」
その推測を聞いて、真希は疑問に満ちた声を上げる。
「まぁ、何も確信はないが……。彼――悠生くんはあんなにしっかりとした子じゃったか？」

「え……？」

一つ、真希の父親は気になることを言った。その一言が真希の胸のうちに深く残っていく。

第二章　時空を越えて　？

真希（まき）の家から出たユウキは、悠生（ゆうき）の家を探し始める。
家に帰るとは言ったものの、こちらの世界での悠生の家は全く知らないのだ。真希から悠生とは中学から同じ知り合っているということを聞いたため、家はそれほど遠くないのだろう。
しかし同地区の中学校へ通うとしても、その範囲はかなり広い。一軒一軒家の表札を見て回るというのはナンセンスだ。
（そもそも一軒家かマンションかも分からないんだよなぁ……）
ユウキはこちらの世界の悠生が一軒家に住んでいたのか、それともマンションに住んでいたのか、それすら知らない。
そのため家を探すこともすでに無理難題に近い。それでもこちらの世界のことを知るためにも一度悠生の家には行き、確かめなければならない必要がある。
「とりあえず歩くか」
ぼうっと立ち止まっているだけでは何も解決しないと思い、ユウキはおもむろに当てもなく歩き始める。
歩いている街並みはすっかり太陽が落ちて暗くなっているが、それでも強い恐怖を与えてくることはない。等間隔で建てられている電灯が、通りを先まで見えるように明るくしているためだ。
通りを歩いているとすれ違う人も様々な装いであり、表情も多種多様だが、それでもユウキが今まで見てきた緊迫感は見受けられない。
（やはり『覚醒者』はいないみたいだな……）
『覚醒者』が放つ独特の気配――『覚醒者』としての力の使用の痕跡を、こちらの世界で感じることはなかった。だからといって安心できるわけではないが、ユウキの足取りはどこへ向かえばいいのか

も分からないのに自然と軽くなる。そこに、この世界に対する不安感は見当たらない。
（だとしたら、力を使うことは極力避けたほうがいい）
どこかに地図か住所が分かるものはないかと辺りを探しながら歩いているユウキはそう考えた。
（それよりも問題はこちらの世界でどうするか――だよな）
これから自分はどうするべきなのか、ユウキは悩み、迷ってしまう。確かめなければならないことのために、とりあえず悠生の家を目指しているだけだ。その後どうするかは、まだ決めていなかった。
閑静な住宅街には、驚くほどに周囲から音が聞こえてこない。時々、近くの家から団欒している家族の笑い声が聞こえてくる程度で、それ以外の生活音はほとんど響いていない。ユウキの意識がそこに向いていないということもあるが、耳が慣れてしまったあの音たちがまるっきり聞こえてこないことにユウキは、妙な感覚を覚える。
「……っと、まずが家を探さないと何も始まらない――か」
気を取り直して、ユウキは悠生の家探しを再開する。
歩いている通りの風景は先ほどからとそれほど変わらない。住宅街の中で、一軒家が多く建ち並ぶ横にぽつんとアパートや時々大型マンションがあるくらいだ。
見える風景が同じようなものばかりであるため、ユウキは自身がどこ歩いているのか分からない。
（真希がどこで俺を見つけたかくらい聞けばよかったな）
通りの左右に並んでいる住宅やアパートを眺めながら、どうやって探すかと考える。その様子はぼうっと歩いているように見え、傍から見ればふらふらと歩いているようにしか見えない。
そのまま数分歩いていると、夜道を向こうから歩いてくる一人の影があった。
何てことのない通行人だろうと判断したユウキは気にすることもなく、そのまますれ違おうとしたが、
「あら、あなたは――」

と声をかけられた。
「……っ！？」
不意に声をかけられたユウキは声を上げて驚きそうになるのを堪える。そして、尋ねてきた通行人――お婆さんに聞き返した。
「あなたは？」
「あら、その余所余所しい言葉は何かしら。私のことも忘れたの？」
急に話しかけてきたお婆さんは、ユウキの言葉を聞いて驚いたように言った。
（まず――っ！　悠生の知り合いか）
まさか、このお婆さんが知り合いだと思いもしなかったユウキは、お婆さんの返事に身体を震わせる。
「ごめんなさい。暗がりだったから、よく見えなくて……」
「あら、それじゃ仕方ないわね。悠生ちゃんは、ここで何をしていたの？」
なんとか絞りだした言い訳をお婆さんは疑うこともしないで、気にしないで、と答えた。
（ちゃん……。結構前からの知り合いってことか）
お婆さんの呼び方が、ちゃん付けであることからユウキはそう判断した。
男子がちゃん付けで呼ばれるのは、幼少時から知り合っていたということが多い。長年からの付き合いがあるのだとユウキには容易に想像できたのだ。
「ちょっと怪我して、友達の病院で診てもらってたんですよ」
「怪我？　大丈夫なの！？」
お婆さんはユウキが怪我をしていると聞いて、慌てたように驚いている。
「えぇ。それほど大きな怪我でもないですから。消毒して包帯まいてもらってますし」
大袈裟に驚いているお婆さんを落ち着かせようと、ユウキは怪我の程度を説明する。その説明を受けてもお婆さんは心配なようで、

「家も近所だし、途中まで一緒に帰りましょ」
と誘ってきた。
（家が近所！？　この人についていったら、悠生の家に近くまで行けるか）
一瞬の間に判断したユウキは「本当ですか！？」とさもうれしそうに答える。
「えぇ、私は構わないわよ。悠生ちゃんが心配だし、家もすぐそこの近所さんだし」
ばったりと会った当初の顔からユウキの顔が穏やかさを増していることに、笑顔を見せたお婆さんはそう言って、ユウキとともに歩き始める。
歩いていく先には、悠生の家があるはずだ。

第二章　時空を越えて　？

夜がこれからさらに更けようとしている空の中で、小さくも強く輝いている星たちに紛れるように、飛行機の明かりが移動していっている。点滅しているその光は、目で追っているととても楽しくて、星を見つめるよりも時間の経つ速度を遅く感じさせてくる。

お婆さんにつれられて『岩井内科』からの夜道を歩いていたユウキは、とある一軒家の前に来ていた。

（ここが、悠生（ゆうき）の家……）

悠生の家はマンションの一ルームではなく、住宅街にある多くの一軒家と同じような二階建ての家だった。外壁がクリーム色で、現代の匂いを強く感じさせてくる。それなりの庭もあるようで花は見当たらなかったが、一つ大きなイチョウの木が植えられてあった。その脇を緑の植物が家の周囲を囲むように植えられている。

庭の反対側にはガレージがあるがシャッターが下ろされていて、その中を窺い知ることはできない。

玄関の前の柵をキィという鈍い金属の音とともに開けて、ユウキは中へと入っていく。

そして、玄関のドアを開けようとしたユウキは、

「鍵がかかってる」

ことに気付いた。

（家に明かりが点いている様子はない。どこかに出かけているのか、それとも――）

ユウキは二つの可能性を考えるが、すでに確信を持っているに等しかった。

玄関のドアが閉まっているならば、窓もそうだろう。窓を割って侵入すれば、近隣の住居に怪しまれるかもしれない。音を立てずに入るしかなかった。

（仕方ないか）
玄関の前で立ち止まったユウキは、ここで立ち去るわけにはいかない、と考えて、庭の方へ移動する。当然、そこには窓が設けられている。カーテンが掛けられているが、そのすき間から中の様子を窺うことはできた。
「やっぱり真っ暗か」
カーテンの隙間から家の中の様子を窺ったユウキは、窓が閉められていることを確認して、一歩後ろへ下がる。
（力を使うことは極力避けたかったが――）
ユウキは眼を閉じて、意識を自分の身体全体へと集中させる。そして、その身体全体の意識をそのまま思い描いている場所、カーテンの隙間から見えた家の中へと移した。
すると、音もなくユウキの身体がその場から消える。そして、意識した家の中へと移っていた。
「……ふぅ」
ユウキの『覚醒者』としての力――『空間移動』の力を使ったのだ。自身の身体を瞬時に移動させる力で、玄関のドアや窓の鍵を開けることもなく、ユウキは悠生の家に入ることに成功した。
（ここが、こちらの世界の悠生の家）
『空間移動』で移動した先は誰かの部屋らしく、それほどの広さはない。
ベッドが一つと大きな本棚、小さなオフィステーブルの上にノートパソコンが置かれているだけだ。
ユウキは、大きな本棚に仕舞われている本を眺める。
（経済本やエッセイがほとんど……。何かの研究書があるわけでもないか）
期待していたものがないと判断したユウキはそのまま軽く部屋を物色して、部屋を出ていく。
部屋を出ると、すぐそこは廊下だった。それほど長くない廊下には、他に三つの部屋のドアと二階へと繋がるだろう階段が見える。

（物音がしない）
廊下に出たところで、ユウキはそのことに気付いた。それどころか、外から確認した時も思ったように、明かりが点いている様子もない。
「そういえば、真希（まき）は悠生の両親は共働きだと言ってたな」
そのことを思い出す。
すっかり太陽が落ちているが、この時間になっても帰ってこないのだろうか。それはユウキには分からないが、家にいないことは好都合だった。
廊下に出たユウキは、ずっと前からの確認したいことのために、家中を歩き回る。一つ一つの部屋を見て回りその都度確認するが、その度に確信は増していった。
そして、最後にリビングにやってきた。
先ほどの部屋の二つ分ほどの広さがあるリビングも同様に明かりは点けられていない。それどころかずっと誰もいなかったのでは、と思えるほど室内の空気が冷たい。ソファには鞄が一つ置かれていて、テーブルには紙切れが置かれていた。
「やっぱり――」
（こちらの世界の俺――悠生は、俺の代わりに向こうの世界に行ったんだな）
リビング、いや家全体の状況を見て、ユウキは確信を実感した。
（真希は、悠生は早退したと聞いてたと言ってた。学校を早退した奴が余程の事じゃない限り、わざわざ家を出るわけがない）
そう。真希はユウキに対して、早退したって聞いてた、と言っていた。
仮病でもない限り、早退した人が家から出かけることはないだろう。病院に行くとしても、この時間では診察も終わっているはずだ。
悠生がこの家にいないということ。それが、悠生が時空移動したユウキの代わりにあちらの世界へ行ったことを告げる。
「――となると、俺は悠生の代わりに学校に行かなきゃならないな」

ずっと前から抱いていた懸念が、現実になる。
そのことに、ユウキは深いため息を吐く。学校にはもう随分行っていないのだ。ましてや、こちらの世界の学校がどのようなモノなのか、ユウキには分からない。とりあえず通う学校は知っておこうとユウキはリビングから悠生の部屋へと行く。
悠生の部屋は二階にあった。先ほど家中を見て回った時に確認はしていて、そのことは知っている。しかし、制服や授業用の教科書など知らないことはまだまだ多い。
階段を上って悠生の部屋へきたユウキは、もう一度部屋をぐるっと見渡して、まっさきにクローゼットを開ける。思っていた通り、そこには高校の制服が掛けられていた。
（これが、制服）
あちらの世界でユウキが着ていた制服とはデザインがもちろん違っている。ブレザーとズボンが一緒にハンガーに掛けられている横に、赤を基調とした色合いのネクタイもあった。
「あとは、学校の所在と教科書類だな」
制服を確認したユウキは、それらが分かるようなものはないかと悠生の部屋を漁りだす。
ベッドの横に配置されている勉強机の引き出しの中を探したり、クローゼットの下にあった多数の鞄の中を漁るが、出てくるのは教科書ばかりで通っている高校の位置が分かるようなものはなかった。唯一分かったのは、学校用の鞄として使用していただろうリュックの中に時間割があり、そこに学校名が書かれていただけだった。
「……ったく。市立基橋（もとはし）高校なんて名前だけわかっても、場所がわかんないと通えないだろ」
出てくる教科書を次々と放り投げながら、ユウキはそう愚痴る。
このままでは埒（らち）があかないと思ったユウキは、ネットで調べてやろうとポケットに入ったままの携帯電話を取り出して、画面を開く。
その画面を見たところで、
「電波が入ってる……？」

ことに気付いた。
携帯電話の画面には電波が三本としっかり立っていた。この携帯電話はユウキがあちらの世界で購入したものだ。それなのに電波が通っていることに困惑してしまう。
だが、これで電話をかけることが出来ると活路が見出せたユウキは震えそうになる指で、ミユキの携帯電話の番号を呼びだし、通話ボタンを押して、耳に当てる。
聞こえてきたのは、
『……おかけになった番号は、現在使用されておりませ――』
という短く機械音だった。
「な……っ！？」
（繋がらない？）
何度掛け直しても、聞こえてくるのは同じ機械音のみだった。
（他の番号にしても同じか、あるいは繋がっても出るのは別の誰か――ということか）
そう判断したユウキはこの世界のことを改めて整理する。
（ミユキやタクヤたちに電話は繋がらない。けど電波は通ってるし、向こうの世界で買った携帯は使える）
そのことに気付いたユウキの思考が一気に加速していく。
携帯が使えることに気付いたユウキは、慌てて悠生の部屋の壁に掛けられている時計を見た。
「今は、夜の九時過ぎ……」
（俺がこっちの世界で意識が戻ったのは、六時三〇分過ぎ。真希に助けられてか一日――いや、正確には一日と二時間ほどが経ってたということだから）
真希の父親は、真希がユウキを運んで家に帰ってきたのは学校が終わってからだったと言っていた。
（下校時刻はだいたい五時から六時の間だろう。そして、俺が時空を超える前の時間は日が回って二時過ぎ……三時前くらいか）
そう考えたユウキは日付にそれぞれの世界で違いはないが、時間

には差があることに気付く。
「約半日、いや一四〜五時間ほど時間がずれているのか……」
ユウキの世界とこちらの世界での月日の違いはないが、ユウキが時空を超える前と後の時間の違いから、その程度の時間差があることを結論づける。
「そして……」
（真希の部屋にあったのは日本円。つまり――）
「こっちの世界での通貨も全く同じ」
ユウキが現在持っている財布の中身も日本円である。携帯電話、そして通貨が使えるということは、生活レベルはこちらの世界とユウキがいた世界は同じということになる。
（同じなら、生きることに苦労はしないか）
携帯電話、そして円が使えることにユウキはほっと安心した。あちらの世界の人間と連絡がとれないということに変わりはないが、この安心感があるとないとでは大きく違ってくる。
「あっちの世界と違うのは『覚醒者』がいないこと、街が平和なこと、同一の人ばかりではないということか」
改めて、こちらの世界とユウキの世界との違いを列挙していく。
ユウキは真希の顔を知っていた。これはあちらの世界のマキを知っていたからだ。しかし真希の両親は知らなかったし、悠生の家を探している途中で出会ったお婆さんも知らなかった。だが、それらの人はユウキ――いや、悠生（ゆうき）のことは知っていた。
このことから、あちらの世界とこちらの世界で全ての人がそれぞれ存在しているとは限らないことが分かる。
（となると、ミユキやタクヤたちもどこかにいるかもしれない。いたとしたら、悠生のことは知っているだろうから、俺の助けにはなるかもしれないな……）
そこまで考えたユウキだが、通うべき高校の場所を調べることをすっかり忘れていた。急に加速した思考につられて様々なことを考えた結果、真っ先に調べるべきことが頭からすっぽり抜けていたの

だ。
「あ……、眠……」
一気に脳を使ったために、疲れがユウキの身体にどっと出てくる。それはこちらの世界に来てからの精神的疲労と重なって、眠気を一瞬で運んできた。
眠気を感じたユウキはそれまでの思考を止めて、悠生の部屋にあるベッドにばたりと横になる。
ユウキがそれから夢を見るまでに、そう長い時間はかからなかった。

第二章　時空を越えて　？

太陽の日差しが強い。
その日差しを遮るものは何もなくて、通りには建物の影が全くなかった。そのような太陽に照らされている通りを多くの学生が歩いている。今の時刻は七時過ぎ。これから新しい一日が始まろうとしている時間だ。
その学生の中に、周囲の学生と同じ制服を着たユウキが歩いていた。
彼は昨日見つけた制服を着て高校に通うために、多くの学生に紛(まぎ)れながら歩いている。その視線は周囲をきょろきょろと見ているようで挙動不審にも見えたが、実際は周囲を同じように歩いている学生の顔を見ているのだ。
（同じ制服着てる人を追いかければいいって考えは最高だと思ったが、学年が同じとまでは限らないんだよなぁ……）
昨日、ユウキは悠生(ゆうき)の代わりとして高校に通うために、悠生が通っている高校を調べようとしていたところで疲れを感じて眠っていた。起きた時には、すでに学校へ行かなければいけない時間になっていて、朝に調べる時間もなくこうして周囲の学生と同じ方向についていっているのだ。
（誕生日も同じだとして一六歳の七月だから、今は二年生だろうけど――）
学年が分かったところで、教室や下駄箱がすぐに分かるものではない。そのことに、ユウキは家を出てから気付いたのだ。
（学校が見えてきたな。まずいぞ……）
太陽に照らされている通りを曲がったところで、鉄柵に囲まれたグラウンドが見えた。柵のすぐそばに植えられている木々の向こうには綺麗な校舎も見える。あれが、悠生が通っている『市立基橋(もとはし)高

校』だろう。
通うべき高校が見つかったことには安堵感を抱くが、さらに待ちかまえている問題にユウキは頭を抱える。
（どうしよう……）
同じように周囲を歩いていた学生は、戸惑うこともなくグラウンドを横にして、高校へと歩いている。同じように歩いていると校門が見えてきた。
校門に差し掛かったところで、その問題はより具現化する。
鉄柵から見えていた校舎は、校門から見ると想像していたよりもはるかに大きいことに気付いたのだ。校門から見ただけでも校舎が五つあるのが分かる。その一つ一つが四階を超える階層で、それだけでもかなり大きな高校なのだと判断できる。
その校舎へ向けて、歩いていた学生が続々と校門を越えていく。それらの学生をユウキはぼうっと間抜けそうに見つめている。校門をくぐってからどうするかを考えているのだ。そこに、男子生徒の声が聞こえてくる。
「おう、悠生じゃん！　何やってんの、こんなとこに突っ立って？」
掛けられた声にユウキは振り返ると、そこには拓矢（たくや）の姿があった。その後ろに真希（まき）と葵もいる。
「タク……ヤ……？」
振り返った先にいた顔が、自分が昔から知っていた顔でユウキは言葉が詰まってしまう。
「ん？　どうした？」
ユウキが驚いていることに気付いていない。いや、驚く理由に気付いていない拓矢はどうしたのかと首をかしげた。
「い、いや、なんでもない……」
真希の時も相当驚いたユウキだが、拓矢の顔を見た時のそれははるかに度合いが違った。あちらの世界でいつも一緒と言えるほどに長い時間を拓矢と葵と過ごしてきたのだ。その顔をこちらの世界で見た時の衝撃は計り知れない。頭では別の人物だと分かっていても、

どうしても信じられない気持ちが湧きあがってしまう。
「？　なんかよく分からんけど、さっさと教室行こうぜ！　もう少ししたらＳＨＲ始まるぞ」
　ユウキの反応がおかしいことに気付きながらも、それほど気にしていない拓矢はぼうっと突っ立っていたユウキを急かした。校舎の大時計を見れば、時刻は八時前であり、ＳＨＲが始まる一五分前だった。
「あ、あぁ」
　急かされたユウキは、拓矢の後を追う。その後を真希と葵もついてくる。真希がクラスメートであることは、真希の父親がそう言っていたことから知っている。最悪真希についていけば、教室が分からないということもなさそうだ。
　拓矢を追いかけているユウキは歩調を緩めて、真希のそれに合わせる。
「昨日はありがとうな」
「お礼はもういいって。それより昨日は家に帰ってから、安静にした？」
「あぁ。気付いたら、ベッドで寝てたよ」
　それは間違いではない。
　朝起きたら、悠生の部屋のベッドで突っ伏せるように眠っていた。ユウキは、眠る前の記憶がすぐに戻らなかったくらいだ。
「そっか。見る感じ元気そうね」
「もう体調は大丈夫さ。走っても問題ないしな」
　それはよかったね、と真希は笑顔で言ってくる。その真希についていくように、ユウキは校門からまっすぐ行ったところにある一際大きな校舎の入り口を入っていく。そこに、それぞれの学年の下駄箱があるようだ。
　そのまま真希についていっているユウキは、三階まで吹き抜けになっている場所に下駄箱がずらっと並べられているのを見て、壮観だと感じた。真希はその内の一つに寄っていく。見れば下駄箱に『

二年生』というプレートが貼られていた。
（真希以外も同じクラスなのか……？）
分からないユウキはとりあえずクラスメートである真希が近づいた下駄箱に、自身も近づいていく。すると、下駄箱にそれぞれ名前が記されたシールが貼られていることに気付く。
（これがあれば迷わないで済むな）
ほっとした表情をユウキは見せる。校門の前でどうしようかと突っ立っていたことが今さら恥ずかしくなる。
先に上履きに履き替えた真希は、ユウキが履き替えるのを待っていた。
「？」
真希が待っていることに気付いたユウキは何でだろう、と一瞬思うが、同じクラスだから一緒に行こう、という意味だと気付いて、慌てて自分の上履きを探す。ユウキの下駄箱は、苗字がそれほど後ではないということから、真希が近づいた下駄箱の数列後にあった。そして、急いで上履きに履き替える。
「それじゃ、教室行こっか」
ユウキが上履きに履き替えたのを見て、真希は溜めていた言葉を言う。「わかった」と答えたユウキは真希の後を追うように、階段を上がっていった。

『市立基橋（もとはし）高校』
生徒数一五〇〇人を超えるこの高校には、一学年にそれぞれ一三もクラスがある市内、いや県内屈指のマンモス高校として知られている。
住宅街の中にあるため敷地面積はそれほど広くなく、その中に四階建ての校舎――事務棟や特別教室棟も含めた――五つの校舎や体育館、講堂がきつきつに建てられている。

そのような高校に通っている悠生(ゆうき)は二年七組で拓矢、真希、葵とクラスメートだったが、今は悠生の代わりにユウキがその教室にいる。
教室では、すでに朝のＳＨＲが始められており、教壇にはこのクラスの担任の教師が立っている。
（この学校にはミユキはいないんだな……）
ＳＨＲが行われている教室をざっと見渡したユウキはそう判断した。
クラスメートの真希やこちらの世界の拓矢と葵――教室に来て同じクラスだと気付いた――の姿はあるが、ミユキ――いや、こちらの世界のみゆきの姿だけが見当たらなかった。
教壇では朝のＳＨＲを始めようと教師が話をしている。その話を軽く流しながら、ユウキは視線を動かして、クラスメートの顔を確認していく。
（他に、俺の知り合いはいない――か）
あちらの世界でも深い交友関係を築いている拓矢と葵がクラスメートだということにはユウキも驚いたが、他に教室で見知った顔はいなかった。
「それじゃ、これでＳＨＲを終わりにするぞ～。日直、あいさつを」
「はい。きょうつけ、礼！」
教室の端に座っているメガネの女子生徒の号令に続いて、クラスメートが礼をする。その行動を見て、慌ててユウキも礼をした。
朝のＳＨＲが終わると、教室には再び活気が戻ってくる。それぞれの生徒は一時間目が始まる前に、友達と談笑しながら授業の準備をしていた。
「悠生―っ、トイレいこうぜー！」
教室の光景をじっと見ていたユウキに、遠くの席から拓矢が話しかけてきた。
「あ、あぁ」
突然のことに多少戸惑いながらもユウキは立ちあがって、拓矢と

ともに教室から出ていく。
「古典の宿題もめんどくさいよな～…、なんで、わざわざノートに古文写して、訳まで自分でやってこなきゃいけないんだよ……」
ユウキと並んで歩いている拓矢は、そのように愚痴をこぼした。そういえば今日は午後に古典の授業があったな、と昨日悠生の家で見た時間割を思い出しながら、
「そ、そうだな……」
と、ユウキは話を合わせるように呟く。
「だよな！　訳なんて授業で正しいの言ってくれるんだし、俺たちがわざわざ家でやる必要もないじゃん」
「ま、まぁテストととかは自分でやんなきゃいけないんだし、それが先生たちの狙いなんだろ？」
上手く話を繋ぐことに意識を向けているユウキは、当たり障りのないことを言った。それほど拓矢の言うことが頭に入ってきていないのだ。自分がいつものように言葉を返せているのかどうか、そのことに必死になっている。
トイレは教室から出た廊下の突き当たりにあり、長い廊下にはすでにたくさんの生徒が行き来している。すれ違う顔全てをユウキはちらっと見るが、やはり知り合いの顔はなかった。
（この学校には他に知り合いはいない……のか？）
もちろん全生徒と教職員を把握したわけではないので断定はできないが、街と同様に『覚醒者』の力の気配もなく、学校も平和そのものである。
「……でさ、宿……さし……ない？」
「え？」
考え事をしていたユウキは不意に聞こえてきた拓矢の言葉が理解できなかった。そして「ごめん、聞こえなかった」とすぐに謝る。
「だから、俺古典の宿題やってきてないから、写さしてくんないかってこと」
「あ、あぁ、そういうこと」

なんだ、とユウキは自然とため息をこぼす。それはずっと緊迫した時間を過ごしてきたために、不意のことに身体が硬直してしまったのだ。
宿題を貸すことは別にユウキは構わないし、何とも思わない。しかし、悠生がちゃんと宿題をしているのかは分からなかった。
「ごめんけど、俺もまだ全部終わってないんだ」
「なんだ、悠生もなのかよ～」
ユウキの言葉を聞いて、拓矢は残念そうに嘆いている。トイレに行こうと誘ったのもおそらくは宿題を借りようとして、だろう。タクヤには随分と借りがあるユウキは、違う人物だと分かっていながらも、良心が痛くなる。
「悪いな……」
小さく、そう謝る。
「いや、いいよ。午後からだし、別の奴に借りるさ」
そう言って拓矢はトイレのドアを開けて、中へ入っていく。
その後を追いかけるユウキは、自身が悠生ではないことに罪悪感や居たたまれない気持ちを抱いた。

第二章　時空を越えて　？

『市立基橋(もとはし)高校』の校舎は生徒数の増大に合わせて、何度か増築されている。そのため教室数も開校当初よりも増え、一日の間でほとんど使用されないという部屋もいくつか存在している。

その部屋の一つに、一人の小柄な男子生徒がいた。

小柄な男子生徒がいる部屋は、数年前までは頻繁に使用されていた教室の準備室で、今は物置同然に使用されている部屋だ。部屋全体に埃(ほこり)が充満して汚れており、ずっと取り換えられていないようなカーテンは元の色を忘れたかのようにくすんでいる。

小柄な男子生徒の前には、何年も使われていないようなオフィス机に座っている女がいた。女の顔は陰になっていて、見えない。

「計画は失敗したんですかね？」

小柄な男子生徒は、埃だらけの棚に置かれている大量の小瓶から二つほど手にとって、手でくるくると弄び始める。

「どうかしらね。私の所には何の報告も入ってないわ」

「でも、ユウキがこちらの世界に時空を越えて来たという情報は入ってきてるんですよね？」

小柄な男子生徒はお手玉をするかのように、小瓶を両手で弄んでいる。その声はどことなく幼かった。

「えぇ。それがどのように転ぶからはまだ分からないわ」

聞かれた女は表情も変えずに答えている。声まで平淡で抑揚がほとんどない。

「本当にそう思ってるんですか？　あなたなら結果も予想出来てると思ってましたよ」

そんな女にも、小柄な男子生徒は怖気づかずに話を続ける。女を挑発しているようにも見えた。

しかし、やはり女は動じない。机に置かれたコーヒーを一口飲んで、さっと椅子の向きを変える。
「だとしても、今は何もできないわ」
「それは僕も理解してますよ。僕らの命令はまだまだずっと先ですからね」
小柄な男子生徒も女の言葉に同調した。
「あなたは、ひとまずユウキを監視してなさい。私も時が経てば、行動に移すわ」
女は小柄な男子生徒にそのように指示をした。
「わかりました。あなたの手を煩わ(わずら)せることのないように尽力しますよ」
「えぇ、そうしてちょうだい」
「それでは」
小柄な男子生徒は女の指示を聞いて、埃だらけの薄汚れた部屋から出ていこうとする。ドアを開ける間際に女の言葉が聞こえてくる。
「一波乱ありそうな展開ね……」
その一言を聞いた小柄な男子生徒は、女のほうへ振り返る。
するとそこには、女が不気味な微笑を浮かべていた。これからの展開を楽しみにしている、というような期待感の表れからくる微笑だ。
その顔を見て、男子生徒は初めてぞっとした。

第三章　家　～ルーム～　？

『ルーム』。
それは、ファミリーマンション二つ分の部屋の壁をくり抜き、中を改装したユウキたちが暮らしている家のことだ。四ＬＤＫの部屋を二つ合わせているため、『ルーム』はかなりの広さを持っている。この『ルーム』にユウキ、ミユキ、タクヤ、アオイたちは暮らしている。四人であれば四ＬＤＫでも十分な広さだが、二つ分も部屋を合わせているのは理由がある。
『ルーム』の、二〇畳ほどの広さを持つリビングには、『ルーム』に帰ってきた悠生たちがいる。
そのリビングの中の様子を、ドア越しに『覚醒者』の『ミホ』が見ていた。
中学一年生のミホは、腰まで届きそうな髪をツインテールにして束ねている。プリーツスカートから覗く足は軽く内股立ちになっていて、薄手のパーカーを着ている。
ミホが覗いているリビングでは、『ルーム』に戻ってきたミユキにタクヤが怒鳴っていた。
「まだ、やってんの？」
そこに、カツユキが尋ねた。
一方のカツユキはミホとは一回り以上は違うだろう風貌をしていて、口に煙草を咥えている。どうやら寝起きらしく、ぼさぼさの茶髪があちこちにはねていた。
「みたい。なんで、タクヤはあんなに怒ってるの？」
「ん～。それは、ミホは知らなくていいよ」
まだ幼いミホに、カツユキはタクヤが怒っている理由を言わない。
そしてミホと同じように、リビングの様子を窺う。
「あ～。まぁ、タクヤが怒る理由も分からないでもないけどなぁ～」
のんびりとした口調で、カツユキは言った。その目はまだ脳が覚醒

していないみたいで、半開きだ。
「だから、なんで怒ってるの？」
純粋な疑問をミホは再度尋ねた。リビングのドア越しでも、タクヤの怒鳴り声はよく聞こえてくる。そのタクヤに、ミホはびくびくと身体を震わせていた。
「知らなくていいことも、世の中にはたくさんあるんだよ。ミホは気にしなくても大丈夫、さ」
カツユキはタクヤのことを気にしているミホの頭を撫(な)でながら、優しく答えた。依然(いぜん)として気になっているミホは頬を膨らませて拗(す)ねるが、カツユキはニッと笑っているだけだ。
リビングからはまだタクヤの声が響いてきている。
「お前が、一人でやるったんだろうが！　それなのに『時空扉(タイム・ドア)』を奪われただと！？　俺たちが必死にこいつを守ったのに、お前は何をやってくれたんだよ！」
その怒号は『ルーム』に帰ってきたミユキに向けられ、声は止まらない。
同じリビングにいるアオイは茫然(ぼうぜん)とその光景を見つめている。誰も声をかけることができない。
いや、しない。
「お、おい……」
そのアオイたちを見た悠生(ゆうき)は、辺り構わず怒鳴り散らしているタクヤに対して、落ち着かせようと声をかけた。
「ご、ごめん……」
「何のためにお前は一人であの場に残ったんだよ！　俺たちを逃がすためだけだったのか！？　違うだろ――！！！」
しかし、タクヤは悠生の声が届いていないようで、変わらずにミユキに怒鳴っている。悠生が視界に入っていないようだ。勇気を出して声をかけた悠生も、無視された後は何もできずにただ怒鳴られているミユキを見つめることしかできなかった。
「……」

そのミユキは、自分がしてしまった失態を悔やんでいるようで、タクヤに怒鳴られていることも重なってシュンとしている。

時間は遡(さかのぼ)る。
ミユキが『ルーム』に戻ってきたのは、悠生たちが『ルーム』についてから数時間が経った後だった。
すでに『ルーム』に辿りついた悠生たちはとても疲れた表情をしたままミユキの帰りを待っていた。すぐに休むことも考えたが、ミユキのことが心配だったのだ。
しばらくそのまま眠らずにミユキの帰りを待っていると、玄関のドアが開く音が聞こえてきた。
玄関のドアが開いた音を聞いて、悠生たちは玄関まで走っていった。
「……ミユキっ！」
玄関まで慌ててきた悠生たちの姿を見て、『ルーム』に帰ってきたミユキは悠生の無事を確認して安心したように床に崩れ落ちる。
「遅くなってごめん……」
涙ぐみながら、ミユキは遅くなったことを謝った。
「ううん、ミユキが無事で良かったよ」
床に崩れ落ちたミユキを抱きしめるように腰を落としたアオイも、涙ぐみながらミユキの無事を喜んだ。
無事に『ルーム』に帰ってきたミユキを見て、悠生も安心してほっとした表情を見せる。ミユキだけを置いて、戦闘から逃げたことがずっと心に残っていたのだ。その顔はひどくやつれて見える。それほど疲労が身体に溜まっているのである。
「怪我してるのか！？」
アオイの肩に頭を乗せて止まらない涙を流しているミユキが、片手を脇腹に当てているのを見たタクヤは慌てる。タクヤたちもそれな

りの怪我をしているが、ミユキのはそれ以上だと服の上からでも分かったのだ。
「あ、うん。ちょっと――」
そう言うミユキだが、その顔は時々痛さで歪む。
ミユキの怪我にアオイも気づき、肩に手を回してリビングまで運ぶ。リビングにはカツユキの姿があった。その手には救急箱が抱えられている。
「……無事に帰ってきたんだな、良かった」
「カツユキさん――」
アオイの肩を借りて歩いているミユキを見て、カツユキもほっと胸をなでおろす。この場で年長者であるカツユキは誰よりもミユキの身を案じていたのだ。
「応急的な処置しかできないが、何もしないよりマシだろう。アオイ、包帯を巻いてあげてくれ」
「は、はい」
ミユキの応急処置をするため、ミユキは一度リビングのソファに座る。そして、上半身の服を脱ぎ始める。
「ほら、男どもは一度廊下に出ろ！」
その場に残っていた悠生とタクヤに対して、カツユキは背中を押して廊下へと歩かせる。
リビングから出る間際に、ちらっと見たミユキの表情は無事に帰ってこられたのに、とても悔しそうに見えた。

ミユキの応急処置が終わってから、再びリビングに戻ってきた悠生とタクヤは経緯を尋ねたのだが、そこでミユキは『時空扉（タイム・ドア）』を奪われたことを告白した。それに対して、悠生に並んで重要なモノを奪われてしまったミユキの過失を責めているのだ。

「お前が残ったのはこいつを――ユウキを狙う奴らを無力化させるためじゃなかったのかよ！　それだけの意思を見せただろうが！！」
「……」
タクヤの声は止まらない。
そのタクヤに、ミユキは謝る言葉以外は返せない。それぞれの気持ちが分かるカツユキやアオイは二人のやり取り（タクヤが一方的に責めているだけだが）を見つめているだけだ。
「任せろって言ったじゃねえか……。それなのに、なんで負けてんだよ――」
尻すぼみしていく声がまた震えていることに、悠生は気付く。タクヤが責めているのは本当にミユキなのか。それとも……。
それは悠生には分からないが、アオイたちは理解しているのだろう。だから、止めることはしない。
（ミユキを責めることは、何もできなかった自分の無力さを呪う別のアプローチ……だけとは限らないんだろうが。ま、なんとも不器用な奴だよな～）
そのようなことを考えながら、リビングのドアのガラスから様子を見ているカツユキは、ミホに部屋に戻ってなさい、と言って、リビングから遠ざける。
そして、そろそろ止めるか、とリビングへ入っていく。
「おい、タクヤ。それくらいにしとけよ。ミユキだって自分の過失を認めてんだ」
「けど――」
「『時空扉（タイム・ドア）』を失ったことはたしかに痛いが。あれ単体じゃ何もできないただの鉄くずさ。お前らが、そこの坊主を守ったことだけでも俺たちには大きな意味がある」
「……。けど、俺は――」
まだ何か言おうとするタクヤに、さらに声がかけられる。
「それ以上はやめなさい、タクヤ」
その声は新たにリビングに入ってきた大人の男のものだった。

「トモユキさん……」
大人の男――『トモユキ』は、ジーンズにカジュアルなシャツを着ていて、休日のお父さんという印象を抱かせてくる風貌（ふうぼう）をしていた。綺麗に整えられた短髪が端整な顔立ちをより際立たせている。さらに、その目には黒縁眼鏡がかけられている。
その眼鏡の奥の瞳はまっすぐタクヤを見据えていた。
「大体の事情は察した。大声で怒鳴って……。マンションの廊下からでも聞こえていたぞ」
リビングに入ってきたトモユキは手に提げていた小さめのバッグをテーブルに置いて、改めてタクヤのほうへ向き直る。
鋭い視線がタクヤに向けられる。
「君がミユキを責める気持ちも分かる。君が自分に憤（いきどお）るのも分かる。それらの感情が全くの無意味だとは私も思わない。それが後々の糧になることはあるからな。しかし、今は過去の出来事に一憂している場合ではないだろう？」
諭すように言う声だが、その内容からはその意識や感情があるのかは分からない。
「さらなる緊急事態だ。『時空扉（タイム・ドア）』が失われたのなら、奴らが次に取る行動は明白。我らもさらに対処しなければならないぞ」
その視線はタクヤだけではなくミユキやアオイ、カツユキにも向けられる。
そして、それらの人は一様に悠生へと視線を動かした。

第三章　家　〜ルーム〜　？

太陽がゆっくりと西へ沈もうとしている。
それとは逆に、緩やかな風に乗って流れている雲は東へと、その形を変えながら流れていっている。
悠生（ゆうき）は、先ほどまで騒がしくしていた『ルーム』のリビングから、ベランダへ出てきていた。
「はぁ……」
短くため息を吐く。
リビングでは、ミユキとタクヤがトモユキという男と話している。
そのリビングの空気に居づらくなって、ベランダに出てきたのだ。
悠生の視線は、何の悩みもなく、ただ風のおもむくままに流されている雲へと向けられている。
（雰囲気悪いな……）
『ルーム』では部外者とも言える悠生は、そう心中で吐露（とろ）した。
今も張り詰めた空気がリビングに蔓延っていることは容易に想像できる。その中にずっといることは絶えがたかった。そこで、ベランダで新鮮な空気を吸っているのだ。
ぼうっと眺めている雲は相変わらず、自分の意思があるのかも分からず東の空へと移動していっている。その雲が、どこか悠生の現状と被って見えた。
「すまないね」
そこへ、声が届いた。
「……？」
背中へかけられた声に悠生が振り返ると、トモユキの姿があった。
悠生にはトモユキが謝る理由が分からない。だから、
「何がです？」

と聞き返した。
「ミユキが『時空扉(タイム・ドア)』を失ったこと、タクヤがそのミユキを怒鳴ったこと、君に居づらい空気を作ってしまったこと、そして、君に多大な迷惑をかけたこと、だよ」
聞き返した悠生に、トモユキは努めて優しい声で答えた。そこには、心からの謝罪の気持ちが窺(うかが)える。
「そんな――。謝ることじゃ……」
「いや、君にはいくら謝罪しても足りないと思っているくらいだよ」
気にしていない、とでも言うように手を横に振っている悠生に、加えてトモユキは本音を伝えた。
それを聞いて、悠生は固まる。
「あいつらを怒らないでやってくれないか？」
その悠生に、トモユキは言葉を続けた。トモユキの目がまっすぐ悠生に向けられている。その視線に多少驚きながら、
「なんで、俺が怒るんですか？」
トモユキの言葉の真意がわからない悠生は、再び聞き返した。
「『時空扉(タイム・ドア)』が失われたら、君がこちらの世界に来た意味が分からなくなってしまうから、だよ。それでも、ミユキとタクヤを怒らないでやってほしい」
「そんなこと……」
悠生にはもともとミユキを責める気持ちも、ミユキに対して怒鳴ったタクヤを怒る気持ちもない。二人にはすでに助けられているのだから、そんな気持ちを抱くことも考えていない。
「俺に二人を責める権利はないですよ」
雲を眺めていた視線を地上へと落としながら、悠生はぽつりと呟く。
「本当にそう思っているのか？　こちらの世界へ無理矢理飛ばされて、わけも分からず起きたら、元の世界へは戻れないと言われ、いきなり『覚醒者』や謎のグループに追われたのに」
改めてトモユキは、悠生がこちらの世界で体験したことを列挙した。
「それについてはたしかに理不尽だと思いましたけど、もう理解し

ましたから。それに言葉や態度はアレですけど、タクヤもミユキも俺のために行動していたんだって分かりましたし」
清々しい表情を見せて、悠生はそう答えた。
その顔に、夜中走りまわっていたことに対しての疑問に満ちた表情はない。こちらの世界へ飛ばされたことに対する怒りなどはまだあるだろうが、それらも押し殺して理解した、という表情だ。
悠生の返事を聞いて、トモユキは懐かしそうな顔になる。
「そうか。君は優しいのだな」
悠生の答えた言葉の中に、ユウキと重なるモノがあったのだ。
「優しいだなんて。そんなことないですよ。わけも分からない世界で、事情を把握するために必死についていってるだけです。受け身にしかなれないことは歯がゆいですけどね」
「受け身……か」
それは、悠生がこちらの世界に来たときからそうだったことである。ミユキあるいはタクヤの説明を聞き、逃げろと言われればそれに従ってここまで逃げてきた。それだけなのだ。そこに悠生の意思は汲み取れられていない。それに悠生は従っている時点で受け身でしかないのだ。
「しかし、それはいずれ変わるだろう」
意味深にトモユキは言った。
「……？　どういうこと――」
「今は知らなくも大丈夫だよ」
聞き返した悠生の言葉を、トモユキは遮った。そして、ベランダからリビングに入ろうと振り返る。
「君にこの世界のこと、我々のことをもう少し詳しく話そう。後でリビングに来るといい」
窓を開けてリビングに戻る際に、トモユキはそう言った。再び悠生の目へとまっすぐ向けられた視線は先ほどよりも真剣さが増していた。

数分後、悠生はトモユキに言われた通り、リビングに来た。
すでにリビングにはトモユキ、ミユキ、タクヤ、アオイ、カツユキ、ミホの六人がいた。どうやら『ルーム』にいる全員が集まっているみたいだ。
悠生が来たことを確認して、大きなテーブルの椅子に座っていたトモユキは、視線を上げる。
「改めて、悠生くん。我らが『ルーム』へようこそ」
視線を上げたトモユキが、リビングに入ってきた悠生へと歓迎の言葉をかけた。
「少し話が長くなるかもしれない。テーブルの椅子に腰かけてもらって構わない。ずっと立っているのはしんどいだろう」
リビングのドアの前で突っ立っていた悠生へ、トモユキは座るように勧めた。それに従って、悠生もトモユキの対面の椅子に座る。
椅子に座った悠生は、改めて『ルーム』のリビングを見渡す。
大きなテーブルには椅子が八つあり、テーブルには悠生の他にトモユキ、ミユキ、タクヤ、カツユキの四人が座っている。ミユキとカツユキは並んで座っているが、タクヤだけ数席間を空けて座っていた。一方、アオイとミホはそのテーブルから少し離れた壁際に配置されているソファに座っていた。
ファミリーマンション二部屋分を使って、改装された『ルーム』は改めて見るとかなり広い。そこにミユキたちは暮らしているのだが、悠生は違和感や疑問を抱いた。
「さて何から話せばいいのか、こちらも困っているのだが、まずは君が知りたいことを聞こう。ミユキやタクヤから、こちらの世界のことはいろいろ聞いただろうが、他に何か知りたいことはあるかい？」
悠生がテーブルについたのを見届けて、トモユキは尋ねてきた。

「知りたいこと――」
トモユキの言葉に、悠生はしばし考える。
夜の街を走り回ったことに対する疑問はすでに解消されている。しかし知りたいこと、感じている疑問はまだまだたくさんある。どれから尋ねようかと迷っているのだ。
「……『覚醒者』っていうのは？」
十数秒考えた悠生は、おもむろに口を開いた。
「世界に突如現れた人々のことを指している。それらの人々はみな、何かしらの力――それも人知を超えた超人的な力を有している。初めて『覚醒者』という存在が認められた、あるいは世界に認知されたのは一九九七年三月一八日と国際機関が発表している」
「国際機関？」
トモユキの話の中に気になる単語があった悠生は話を割って、聞き返した。
「あぁ。『覚醒者』の存在を研究している国連が主導した機関だ。この国際機関が世界中で『覚醒者』について今も研究をしているのだよ。その国際機関が発表した『覚醒者』のことを我々は『始まりの覚醒者』と呼んでいる」
そこで、トモユキは一拍置く。
悠生の理解を追いつかせるためとここまでで抱いた疑問を解消させるためだ。
「その『覚醒者』ってのは、俺がいた世界にはいませんでしたよ？」
その悠生は、思い返したように尋ねた。
「なるほど。君の世界に『覚醒者』がいないとなると、『覚醒者』という存在や概念は、こちらの世界にだけのものらしいな」
「知らなかったんですか？」
悠生の話を聞いて唸るように納得したトモユキに、拍子抜けした悠生はさらに尋ねた。
「知らなかったというよりも、『覚醒者』の存在と並行世界が実在することは別の問題だと我々は考えている。並行世界の存在はそも

そも立証すらされていなかったのだからな」
何を当たり前のことを、と言うようにトモユキは言った。それを聞いて、悠生はさらに驚く。
「立証されてなかった！？　じゃ、じゃあ俺は本当にあるかも分からない並行世界（パラレルワールド）への移動で、こっちの世界へ飛ばされたんですか！？」
「そういうことになるな」
「君自身が並行世界は存在する、という生きた立証人ということだ」とトモユキは付け加えた。
それを聞いた悠生の驚いた表情が固まる。
無理もないだろう。並行世界へ飛ばされたというだけでも驚きだった悠生に、それが証明された上での行動ではなく試しにやってみた、というような感覚で行われたのだ。そのような軽い感じで悠生は世界を越えるという人生で味わったことのない経験をさせられている。
「そんな……」
あまりの驚きに、悠生は情けない声を上げた。
「時空移動については我々が緊急事態だったということもある。君には全く身に覚えのない話だがね」
「緊急事態？」
「そうだ。君もこちらの世界へ飛ばされてすぐにわけも分からない奴らに追われただろう？　奴らが追っているのはユウキ、そして奪われた『時空扉（タイム・ドア）』だった。申し訳ないのだが、奴らが何故ユウキや『時空扉（タイム・ドア）』を追いかけているのかは分かっていない。現段階で推測できるのは時空を越えて別の世界へ行く手段を求めているのでは、ということだけだ」
それは、当然だろう。
『時空扉（タイム・ドア）』の使用用途をミユキから聞いた悠生にも、それ以外の理由でユウキや『時空扉（タイム・ドア）』を追いかける理由は思い付かない。トモユキが分からないと言っているのは、それで何がしたいのか、ということである。

「ただし奴らは最初にユウキを追っていたということからユウキの力を欲していたこと。ユウキを捕まえるという過程で『時空扉(タイム・ドア)』を奪ったということから、『時空扉(タイム・ドア)』の使用にユウキが必要だと知っていたということ。この二点ははっきりとしている」
強い自信があるようで、トモユキは言葉に力を込めて断言した。そして、
「つまり、奴らはもう一度君を捕まえようとやってくるだろう」
とも予想した。
それは単純に考えれば当たり前のことなのだが、悠生は疑問を口にする。
「ここの場所は、あいつらに知られてるんですか？」
「いや、知られていないはずだ。ユウキが狙われていると我々が知った時は『ルーム』の位置を悟られないように、『眠る街(スリープタウン)』で対応すると決めたからな」
「『眠る街(スリープタウン)』ってのは？」
タクヤも同じ単語を言っていたことを思い出した悠生は、話を続けているトモユキに尋ねた。
「『覚醒者』たちの抗争によって都市機能を失った街のことを『眠る街(スリープタウン)』と言うんだ。そうするに無法地帯ってことさ。君がこちらの世界に来て目を覚ました所も、『眠る街(スリープタウン)』の一つだ」
トモユキの話を聞いて、悠生はここに来るまでに必死に走った廃墟と化した街のことを思い出す。
窓ガラスが失われたどころか建物の壁がなくなり、吹きさらしになったビルがいくつもあり、電灯の明かりさえない街の様子はとても人が住める場所とは言えないものだった。しかし、そのような状態になった街にもかつては人が住んでいたのだ。なぜ、あのような街の姿になったのかを想像して、悠生は顔を青ざめてごくっと唾を飲み込んだ。
「そこでミユキたちは奴らと交戦したが追い詰められて、『時空扉(タイム・ドア)』を使ってユウキをあちらの世界へ、君をこちらの世界へつれてきた

というわけだ」
自分がこちらの世界にいるこれまでの過程を聞いて、改めて悠生は自身がかなり大きな問題に巻き込まれていることを認識した。
（これから俺どうなるんだ……）
そして、その不安感は簡単に拭えない。
ミユキはこちらの世界へ飛ばされた悠生を守ると言ってくれた。その言葉は嘘偽りのない本心だろう。しかし、悠生を守るというのはユウキを守ることに繋がる。そしてミユキはそれがこちらの世界を守ることに繋がるかもしれない、とも言っていた。それは純粋に危険な目に合うだろう悠生を守る、ということではない。こちらの世界のために、危険な目に合うだろう悠生を守る、ということである。
『覚醒者』に守られるということは心強いことだと思いながらも、それはそれで素直に納得するのは駄目なんじゃないか、と悠生は思う。
「そういえば、ここにいるみんなは『覚醒者』なんですか？」
ふと思った悠生は、リビングに集まっている面々の顔を見回しながら尋ねた。
「私以外は、みな『覚醒者』だ。あと二人いるのだが、今は外出中でね」
悠生の新しい質問に、トモユキが答えた。
ここにいるトモユキ以外の人間は『覚醒者』と聞いて、悠生は驚く。
そして、これらの人に守ってもらえるなら安全だという打算的な考えも浮かんだ。
しかし、
「『覚醒者』の力は様々だ。ミユキのように戦闘に向いたのもあれば、タクヤやアオイのように戦闘に向かない力もある。君の安全を必ず保障するということはできないが、我々は全力で君を守ろう。それが無理矢理連れてきてしまった君へ、我々が行う償いだ」
そうトモユキは続けた。
全力で守ろうという決意を見せたトモユキに合わせるように、カツ

ユキやミユキたちも力強く頷いている。
「償い……」
トモユキが使った償いという単語に、悠生は敏感に反応した。
その単語を選んで言ったということは、少なからず罪の意識があるということだ。それはトモユキだけでなくミユキたちも持っているのだろう。だから、力強く頷いたのである。
「我々が出来ることは君の疑問をなるべく解消し、全力で君の安全を確保することだけだ。それでも君は我々を信じて、共にいてくれるだろうか？」
真摯な言葉と態度で、トモユキは肝心のことを悠生に尋ねた。
ミユキたちにとっても、それは大事なことだった。ユウキが時空移動した代替として、こちらの世界へ来た悠生だが、当の悠生は目が覚めた時にその場にいたミユキたちに従って、今ここにいるというだけである。何も、このままミユキたちのお世話になるという選択肢しかないわけではない。
しかし、
「……今の俺には、他に行くあてもない。それに、ここにいた方が安全なんでしょう？」
「答えは決まってる」と悠生は、トモユキに言った。
こちらの世界での知り合いが他にいない悠生が、他の選択肢を選ぶことは自殺行為に匹敵する。『ルーム』から一歩出ただけで、また追われる可能性だってあるのだ。それならば、ミユキたちに守ってもらうほうが最良に決まっている。
「そうか。では、改めてよろしくな、悠生くん」
満足そうに悠生の返答を聞いたトモユキは立ち上がって、握手を求めてくる。差し出された手を、悠生も立ち上がって応える。
固く握手をしたトモユキは、悠生に向けて笑顔を見せる。私たちは君の味方だ、と優しく訴えるように。
「もう夕方になる。君はこっちの世界で目覚めてから、ずっと起きていたのだ。部屋を用意している。眠ったほうがいいだろう」

再び座ったトモユキは悠生の身体を心配して、睡眠を取るように勧めた。
身体の疲労はすごく感じている悠生だが、こちらの世界に飛ばされてから半日近く起きていたのに意識は不思議と覚醒していた。
それでも、トモユキの進めに従う。
「……わかりました。ベッド借ります」
「あぁ、ゆっくり休んでくれ。アオイ、案内してあげなさい」
それまでずっとソファに座っていたアオイに、トモユキは指示をした。
「はい。悠生くん、こっちよ」
トモユキの指示に立ちあがったアオイは、悠生を部屋へと案内する。
そのアオイに、悠生もついていく。
リビングを出る際に振り返るとトモユキは再度笑顔を見せてきて、ミユキは何とも言えない表情ながら悠生の顔をまっすぐ見つめていた。
「……」
ミユキに見つめられた悠生は、その表情をどこかで見たことのあるものだと気付く。しかし、どこだったか思い出すことができなかった。

アオイに案内された部屋は『ルーム』の奥にある部屋のようで、廊下の突き当たりにドアがあった。
「この部屋を使って。とりあえず今はゆっくり休んで」
悠生を部屋に案内したアオイは、トモユキのように努めて優しい声で言った。
「あ、あぁ。ありがとう……」
その声色を聞いた悠生は驚いたような拍子抜けした声でお礼を述べ

る。そのお礼を聞いて、アオイもにっこりとする。
そしてドアが閉まる間際に、
「それじゃ、おやすみなさい」
と声がかけられた。

第三章　家　〜ルーム〜　？

とある建物の中に、薄暗い部屋があった。
薄暗い部屋には、様々な色を発している光があった。それらの光は明滅を繰り返して、薄暗い部屋を物静かに照らしている。
その部屋にスピーカーの声の男――シンジはいた。ずっと着ていた防護スーツではなく、スーツルックな服装に変わっている。
シンジの視線は、じっと光を放っている大きなモニターに向けられている。
「『時空扉（タイム・ドア）』を起動してください」
モニターを見つめていた別の白衣を着た男がマイクを通して、起動の合図を出した。
そのモニターには、ミユキから奪った『時空扉（タイム・ドア）』が映されていた。
奪った『時空扉（タイム・ドア）』は、ドアが閉められた窓のない硬質感がある部屋のガラステーブルに置かれている。窓のない部屋には、他に白衣を着た男が二人いた。
窓のない部屋にスピーカーを通して、先ほどの指示が届く。
その指示を受けた白衣の男の一人が、ガラステーブルに置かれている『時空扉（タイム・ドア）』を持ち上げて、円盤型機械の中央にあるボタンを押す。
すると『時空扉（タイム・ドア）』は強烈な光を放ちながら、丸みを帯びた淵（ふち）が円状に広がっていく。淵が広がりきるとその眩しさは次第に弱まっていき、そのうちまた元の鈍い銀色の光沢だけが残る。そして広がった円状の淵の中には、薄暗い霧が渦巻いていた。
「これが世界を越える入り口か」
モニター越しに『時空扉（タイム・ドア）』の起動を見つめていたシンジは感嘆の声を上げた。その目は楽しいおもちゃを買ってもらった子どものように、きらきらと輝いている。
「本当に、この中を通るだけで並行世界へ行けるのでしょうか？」

同じようにモニターを見ていた先ほどの白衣の男が当然の疑問を口にした。
「並行世界の存在すら確認されていないのに、先に移動手段を確立させるなんてロマンにもほどがありますよ」
しかし、その言葉にもシンジは、
「いいではないか。そもそも研究者は、そのようなロマンを追い求めているのだろう？　そこに何があるのか？　それは本当にあるのか、本当はないのか。一度疑問を持ったそれを追い求めずして、研究者とは言えないだろう？」
『時空扉（タイム・ドア）』が作られた理由もそれと変わりはないとシンジは言い放つ。
シンジの言葉に白衣の男――研究者は同意するが、それでも並行世界の存在はタイムマシンの完成と同レベルのロマンだと思っている。科学技術や世界の理が次々と解明されるようになっても実現にはまだまだ様々なハードルがある、ということだ。
「とはいっても、誰でも使えるのかどうか確認する必要はあるな」
起動された『時空扉（タイム・ドア）』の円の中をじっと観察したシンジは、おもむろに言った。そして、続いて命令する。
「さて、部屋に入れろ」
シンジの命令から、窓のない部屋のドアが開き、さらに拘束具に縛られた男が二人とそれを率いているシンジの部下の男が二人入ってきた。拘束具に縛れている男二人は両手を縛られている他に目隠しもされており、鎖でつながされていた。
「そいつらを『時空扉（タイム・ドア）』の円の中へ飛びこませろ」
冷酷な命令がシンジから出される。
拘束具に縛られている男二人は目隠しをされているため自身がどこにいるのかも、どこに飛び込めと言われたのかも理解できていない。
「し、しかし――」
その命令に驚いた研究者たちは声をそろえて驚くが、

「そいつらは犯罪者だ。どうなろうと構わん。それにあらゆるデータは必要だろう？　さっさと飛びこませろ！」
「はっ」
拘束具に縛られた男二人を連れてきたシンジの部下は、連れてきた男の拘束具を取り外す。そして、目隠しをしたまま『時空扉（タイム・ドア）』の前に立たせた。
「な、なにがあるっていうんだ……っ！？」
目隠しをされている男は目の前に何があるのかも分からず、恐怖に帯びた声を上げる。その声は今にも鳴き叫びそうなものだった。
目の前で男たちが時空の渦へ飛びこまされそうになっている状況を見て、部屋にいた研究者二人は、これから起こるだろう結果を直視したくないと視線を逸（そ）らしていた。
「お前たちを別世界へ連れて行ってやるのだよ」
その一言とともに、シンジの「やれ」というひどく冷たい言葉がかけられる。
次の瞬間には拘束具を解かれた男たちは背中を押されて、短い悲鳴とともに『時空扉（タイム・ドア）』の渦の中へ飛び込んで行っていた。
「さて、これで結果がどう出るかだが……」
じっとモニターを見つめているシンジとは別に、部屋にいる研究者たちはもはや視線どころか身体の向きさえ変えていた。
数秒間の沈黙がそれぞれの部屋に訪れる。聞こえてくるのは呼吸の音だけで、張り詰めた空気が場を支配していた。
「……」
「……」
誰も声を上げない。
その、さらに数秒後。
グシャ、という耳触りな音とともに、『時空扉（タイム・ドア）』の円の中から何かが吐き出された。
「？」
「――っ！？」

突然、『時空扉（タイム・ドア）』から何かの物体が吐き出されたことに、モニター越しにシンジと研究者、部屋にいたシンジの部下と研究者たちは驚いた。
「何が出てきた！？」
『時空扉（タイム・ドア）』から出てきたものがはっきりと認識できなかったシンジは、慌てたようにスピーカーを介して部屋にいる部下の男たちに尋ねた。
尋ねられた部下の男は、恐る恐るその物体へと近寄る。
「こ、これは――」
そして視認したそれは、

「……人肉の……塊です」

ぐちゃぐちゃに丸められた人の成れの果てだった。
『時空扉（タイム・ドア）』から出てきたのが、先ほど渦の中に飛び込んで行った犯罪者たちであることはすぐに分かった。
電気が点けられていない部屋の中で、じっとモニターを見つめていたシンジは、
「まさしく別世界にいってしまったな」
と短く呟く。
同じようにモニターを見ていた研究者は言葉が出ないようで、口をぱくぱくとさせていた。
（あの犯罪者は、一人は普通の人間で、もう一人は『覚醒者』だった。『覚醒者』は全員使えるというわけではないのか）

シンジの命令で『時空扉（タイム・ドア）』の中へ飛び込んでいった犯罪者はしっかりとデータが取れるように一般人と『覚醒者』が用意されていた。
『時空扉（タイム・ドア）』の使用にはユウキの力が必要という情報は得ていたシンジだったが、自分の目で確認するためにも飛びこませたのだ。
（しかし、これではっきりした）
そう判断したシンジはスーツのポケットから携帯電話を取り出して、とある番号にかける。
「もしもし、私だ」
『なんだ、シンジ？』
かけた電話の相手はトモヤだった。
「計画に変更はない。ユウキを捕まえるんだ」
『わかった。捜索はまた明日からか？』
「あぁ、そうなる」
『了解。今度こそ奴を捕まえてみせるさ』
「期待してるぞ」
短く会話して、シンジは携帯電話の通話を切った。
その視線は今もまっすぐとモニターへ向けられていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9359y/

クロス・ワールド

2012年1月10日18時49分発行